GIAHS認定10周年
記念フォーラム in佐渡
記録集

会期：2021年10月29日（金）▶31日（日）
会場：アミューズメント佐渡

トキと共生する
佐渡の里山から
これからの
日本農業への提言

大会宣言

「トキと共生する佐渡の里山」としてGIAHS（世界農業遺産）に認定されて10年、GIAHS認定10周年記念フォーラム in 佐渡を令和3年10月29日～ 30日の2日間にわたり開催し、今後の佐渡と日本農業が進むべき方向性について意見を交えてきました。

本日、この成果を国内外に発信していくため、議論の成果をここに宣言します。

1. 環境問題に対する意識の醸成を図り、「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」を継続することで、生きものを育む農法の普及・拡大に引き続き努めることを宣言します。

2. 離農や耕作放棄地の拡大など農業を取り巻く環境の悪化に備え、水田の多面的機能である生物多様性維持や防災機能などの影響を「見える化」し、人口減少に備えた地域づくりを早急に検討することを宣言します。

3. 「朱鷺と暮らす郷」をはじめとする環境を重視した農法へ転換するため、データに基づく多様な取組、特に、佐渡米については需要に応じた多様な用途の生産に取り組むことを宣言します。

4. 農業の持続可能性を確保するため、「協同組合」（農協、生協など）の重要性と地域での利益を地域内経済循環する仕組を構築することを宣言します。

5. 人口減少、労働力確保の観点から、地域内の労働需給の調整の仕組の開発、佐渡市への移住促進、新規就農を含む経営安定のための措置の強化・体系化に取り組むことを宣言します。

6. 農村コミュニティの維持と伝統芸能などを未来に継承するために、GIAHS（世界農業遺産）の中から、「佐渡モデル」を見つめ直し、未来へ継承する各種仕組みづくりの推進を宣言します。

7. 里山の農業を未来へと継承していくためには、若者の思いや夢に耳を傾け、みんなで応援する風土を醸成することが大切です。若者の声を政策やビジョンづくりに生かしつつ、多様な世代が一緒になって挑戦し続ける島を実現することを宣言します。

以上、本フォーラムの成果として、今後、国内外に広く発信します。

令和3年10月30日
佐渡市長　渡辺竜五

目　次

令和３年10月29日㈮

歓迎のごあいさつ…… 3

オープニング　鼓童公演…… 4

ごあいさつ・祝辞…… 5

記念講演「トキ野生復帰の意義とGIAHS」…… 10

事例発表「トキを学ぶ、トキから学ぶ、行谷小学校の子どもたち」…… 20

事例発表「トキの餌場と生きもの育む　地域の取組」…… 24

令和３年10月30日㈯

基調講演「日本の持続可能な農業とは～佐渡GIAHSの農村文化から考える～」… 30

パネルディスカッション…… 37

分科会

第１分科会…… 58

第２分科会…… 72

第３分科会…… 87

里山未来ユースサミット…… 102

鬼太鼓等地元芸能プログラム

能・民謡…… 104

鬼太鼓…… 109

令和３年10月30日㈯

早朝トキモニターツアー（エクスカーション）…… 113

令和３年10月31日㈰

エクスカーション…… 113

歓迎のごあいさつ

佐渡GIAHS認定10周年記念フォーラム実行委員会
委員長（佐渡市長）　渡辺（わたなべ）　竜五（りゅうご）

「GIAHS認定10周年記念フォーラムin佐渡」を開催するにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

平成23年6月に、当市が国連食糧農業機関（FAO）から、「トキと共生する佐渡の里山」として、石川県能登地域の「能登の里山里海」と共に国内初となる世界農業遺産（GIAHS）に認定されました。このたび、認定10周年を記念いたしまして本フォーラムが開催できますことは、関係者をはじめ多くの皆様のご努力やご支援の賜物であり、深く感謝申し上げると共に、本日ご参加いただきました皆様には、心より歓迎いたします。

GIAHS認定後のこれまでの10年間は、人口減や食の多様化等による米消費量の減少、農業従事者の担い手の不足や高齢化等により、農業を取り巻く情勢は年々厳しくなっております。農業の衰退は、農村コミュニティの活力の低下や持続的な農村社会の崩壊、生物多様性、里山、自然が持つ防災機能の喪失など、地域の消滅につながりかねない喫緊の課題であると考えております。

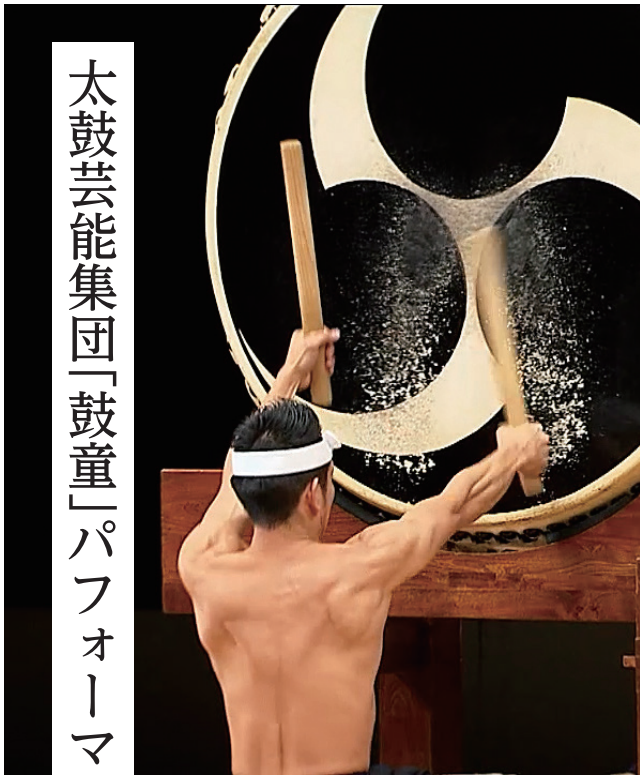
一方、当市が世界農業遺産に認定された大きな要素としましては、世界に誇れる多様な生きものを育む里山農業や経済との両立を目指した取組が挙げられます。本フォーラムにおいては、「生きものを育む農法」と「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」、また農村コミュニティに由来する多様な伝統芸能など、継承し続けている遺産について、全国の事例も含めながら、農業、農村そして地域の持続的発展に向けた様々な議論の展開を期待しているところです。

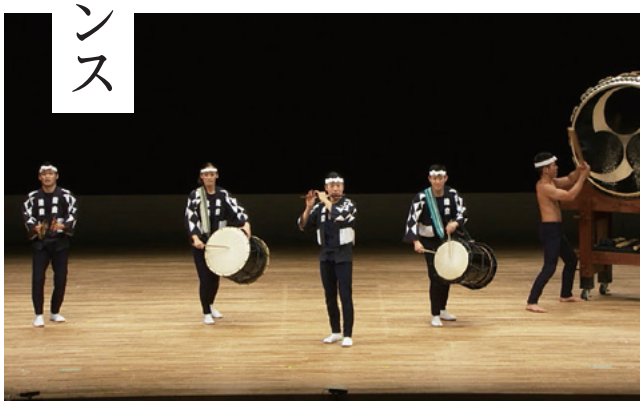
加えて、この10年間の日本と佐渡の農業の歩みを振り返り、持続可能な農業体制、農業と生物多様性の関わり、農文化と歴史、また若者が考える農村の未来像の4つの分野から、次世代へ継承すべき持続可能な日本型農業遺産システムについて皆様と意見を交わしながら、今後の佐渡と日本の農業が進むべき方向を総括し、国内外に発信していく新たなスタートを創設していきたいと考えています。

最後に、GIAHS認定10周年記念フォーラムin佐渡が、皆様の英知が結集されました有意義なフォーラムとなることを祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

OPENING
オープニング

太鼓芸能集団「鼓童」パフォーマンス





ごあいさつ

新潟県副知事
橋本　憲次郎

皆様こんにちは。

私は新潟県で副知事をしております橋本と申します。本来でありますと、開催地を代表して花角知事から歓迎の言葉を申し述べさせていただくべきところではございますが、本日出席がかないませんでした。挨拶を預かっておりますので代読させていただきます。

GIAHS認定10周年記念フォーラムin佐渡の開会にあたり、開催地である新潟県を代表いたしまして、一言歓迎のご挨拶を申し上げます。

本日、新潟県佐渡市において中井環境事務次官様を始め、武内理事長様並びにご来賓の皆様のご臨席を賜り、また全国各地から多くの皆様をお迎えし、GIAHS認定10周年記念フォーラムを盛大に開催できますことは、皆様をはじめ国民が一丸となって新型コロナウイルス感染症防止対策に徹底して取り組まれた成果でもあり、深く感謝を申し上げます。

また遠路はるばるご参加いただいた皆様、ようこそ新潟県佐渡市にお越しくださいました。心より歓迎いたします。

本日のフォーラムは佐渡で展開されてきた生物多様性循環型農業の成果と課題を元に、次世代へ継承すべき持続可能な日本型農業システムとは何かを議論し、その成果を今後の日本の農業が進むべき道しるべとして国内外に発信することを目的としていると伺っております。本県を含む国内認定地域がお互いの独自性を尊重しつつ、世界農業遺産の価値を高める取組を実施することが期待されており、本県といたしましても認定効果の更なる向上が図られ日本型農業システムの維持発展に繋がるよう皆様と連携協力して取組を進めてまいりたいと考えております。

さて、ここ佐渡におきましては本県の悲願でもある佐渡金銀山のユネスコ世界遺産登録につきまして、本年8月に国の審議会に諮問されたところであり、今年度の国内推薦そして早期の登録実現を目指して佐渡市や関係者の皆様と共に全力で取り組んでいるところであります。世界農業遺産の認定に加え佐渡金銀山の世界遺産登録の実現により、佐渡が本県観光の大きな柱となり交流人口拡大の起爆剤となるものと、大いに期待してるところであります。

また、本県はコシヒカリを筆頭に全国有数の米どころとして知られておりますが、近年はその強みである米に加え、県内各地で地域の特性や優位性を生かした園芸作物の生産を拡大して儲かる農業を実現することで、農業者の所得が向上し、農業の成長産業化を図る取組を進めているところであります。特に、ここ佐渡は農林水産業が盛んな地域でありますが、トキとの共生を目指し生物多様性に配慮した「生きものを育む農法」で栽培した「朱鷺と暮らす郷づくり認証米」をはじめ棚田米など高い評価を受けている佐渡米の他、おけさ柿などの農産物や魚介類など色味も品質も良い食材の宝庫であり、全国に誇れる食の島となっております。皆様にはこの度のご来島を機会に是非とも佐渡の食をご堪能頂くと共に、野生のトキの様子や佐渡金銀山の史跡など秋の佐渡を満喫していただきたいと思います。

結びに、本フォーラムのご盛会と合わせて、本日ご列席の皆様のご健勝とご活躍をご祈念申し上げ、歓迎の挨拶といたします。

令和３年10月29日　新潟県知事花角英世　代読　新潟県副知事　橋本　憲次郎。本日はようこそいらっしゃいました。

祝　辞

環境大臣政務官
宮崎　勝

皆様こんにちは。環境大臣政務官の宮崎勝でございます。

GIAHS認定10周年記念フォーラムin佐渡の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。トキと共生する佐渡の里山が日本で初めて世界農業遺産に登録され、今年で10周年ということで、誠におめでとうございます。

この世界農業遺産の登録テーマとしても掲げられているトキは、日本の生物多様性保全において象徴的な鳥です。また、佐渡はトキの野生復帰の取組を通して環境省にとっても非常に関係の深い地であります。新型コロナウイルス感染症の影響が心配されましたが、本日ここ佐渡で無事にフォーラムが開催されましたことを大変喜ばしく思います。生物多様性保全に関しては、現在2030年までの世界目標となるポスト2020生物多様性枠組が議論されており、来年４月から５月にかけて開催される、生物多様性条約の締約国会議で決定される予定です。この新たな世界目標の重要な要素になると見込まれているのが、2030年までに陸域と海域の30％以上を保全する、いわゆる30by30です。環境省では今後この30by30を実現するため、行政だけでなく市民や企業などによる自然に優しい土地の管理を促進していきたいと考えています。

このような世界目標を達成し豊かな自然環境を保全し次世代につなげていくために、より多くの地域そして国民一人ひとりの力を結集させていくことが必要です。ここ佐渡では、トキとの共生を掲げ、地元行政や住民の方々が連携しながら、生息環境の保全・再生や田んぼの生きものに配慮した農業の推進など、社会環境の整備に尽力されてきました。こうした取組の結果、一度は日本の空から姿を消したトキが、今ではこの佐渡の地で500羽近くまで順調に生息数を増やしています。このような佐渡の取組は、様々な関係者の協力によって自然環境の保全・再生を進めてきた先進的な事例であり、全国の里山保全のお手本であると考えています。

これまでの、佐渡の皆様、関係者の皆様の多大なご尽力・ご協力に心より敬意を表しますとともに感謝を申し上げ、全国の取組をリードする存在として今後ますますの取組の推進を期待しています。最後になりますが、佐渡の皆様、関係者の皆様のご健勝と地域のますますの発展を祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございました。

祝　辞

農林水産大臣政務官
熊野　正士

農林水産大臣政務官の熊野正士です。GIAHS認定10周年記念フォーラムin佐渡の開催にあたり、農林水産省を代表しまして一言ご挨拶申し上げます。

世界農業遺産は、2002年にFAOが開始した次世代へ継承すべき重要な農法や生物多様性などを有する地域を認定する仕組みで、これまで、世界で22か国62の地域が認定され、日本国内の認定地域は11地域となっています。新潟県佐渡市の「トキと共生する佐渡の里山」は2011年に国内で初めて世界農業遺産の認定を受け、今年で10年という節目を迎えられました。佐渡のトキとの共生を目指して、多様な生きものが生息できる環境を作り、食と命を育む持続的な農業を島全体で取り組んでこられたことは、農林水産業に携わる地域の方々や佐渡市の皆様のご理解とご努力あってのことと存じます。こうした取組は他の農業遺産地域の模範となるものであり、厚く敬意を表する次第です。

本フォーラムでは、当地が10年にわたり歩んできた各種の取組をご参加の皆様と共有されるということで、地域社会の営みや文化、生物多様性等をテーマとして活発な議論が展開されることを期待しております。気候変動の防止や生物多様性の保全など地球を取り巻く課題は山積しておりますが、世界農業遺産は持続可能な開発目標の達成にも寄与するものと位置付けられています。そしてその地域で行われている農法やそれによって育まれる生物多様性の世界的価値を認識し、その地域だけでなく、社会全体で守り、未来に向けて子どもたちに受け継いでゆくべき貴重なものであります。

農林水産省といたしましてもこの世界農業遺産の価値を国内外に普及・発展させるべく、情報発信や地域の支援を積極的に進めて参りたいと考えております。本フォーラムを通じて世界農業遺産の更なる認知と理解が高まり、地域の活性化につながっていくことを祈念いたしまして開会の挨拶とさせていただきます。

祝　辞

国際連合
食糧農業機関
駐日連絡事務所
所長
日比　絵里子

皆様こんにちは、FAOの駐日連絡事務所の日比です。

まず、佐渡の皆様、新潟県の皆様、GIAHS認定10周年誠におめでとうございます。認定への過程、そして認定からの10年で様々な努力を重ねて今日に至ったことと思います。皆様のその努力とそしてこれまでの実績に敬意を表します。

世界では約10人に１人が飢餓に苦しんでいます。また全ての人を養うだけの食料が生産されているにも関わらず、世界の食料の３分の１は廃棄され食されていません。2030年までに飢餓をゼロにするというSDGs（持続可能な開発目標）の達成には、むしろ逆行している状況です。このような歪みのある食料システムを何とか持続可能なものに変革すべきであるという気運が世界で今大変高まっています。９月にも国連本部で世界食糧システムサミットというものが開催されました。このような中で特に注目を集めているトピックが気候変動、生物多様性、環境を傷つけない食料生産のあり方です。その問題解決の鍵の一つであるこのGIAHSへの取り組みに大変興味関心が高まっています。実際に、今「里山」という言葉が日本語だけではなく、英語で使われるようになっています。国連の取り組んでいる様々なプロジェクトなどで、日本人以外でも皆が里山里海という言葉を使って、今後の取り組みについて話すような時代になっています。ということで、これから2030年を超える、これからの10年、100年を見据えて、佐渡GIAHSからの試みと成果を、これからも積極的に世界、そして国内でも発信していただいて、佐渡から食料問題の解決、SDGsの達成に直接貢献していただきたいと思っております。

改めて10周年皆様おめでとうございます。ありがとうございました。

テーマ

トキ野生復帰の意義とGIAHS

講師
環境省　環境事務次官
中井　徳太郎 氏

東京大学法学部卒業。大蔵省入省後、主計局主査などを経て、富山県庁へ出向。日本海学の確立・普及に携わる。
その後、財務省主計局主計官などを経て、東日本大震災後の2011年7月の異動で環境省に。総合環境政策統括官などを経て、2020年7月から現職。

ご紹介いただきました、環境省環境事務次官をしております、中井でございます。

GIAHS認定10周年おめでとうございます。

GIAHS認定10周年記念フォーラムin佐渡が、記念フォーラム実行委員会　渡辺市長はじめ、関係者の皆さんのご尽力で、こうして盛大に開催されますことを心から感謝したいと思います。

冒頭、トキ野生復帰の意義とGIHASというテーマで生物多様性の危機、そして気候変動の危機と、これに向き合う社会変革、そして地域のあり方というところにも触れてお話をさせていただきたいと思います。

この佐渡島におけるトキ野生復帰の取組を見ていきたいと思います。かつて江戸時代までは日本のほぼ全域にいたトキ。これが19世紀後半、乱獲で減っていく。また20世紀に入って、色んな農薬の関係で餌が減る。そういうことも踏まえて、生息環境が悪化していき絶滅が危惧されるなかで、1981年には、最後の５羽を捕獲して維持に努めよということだったわけです。

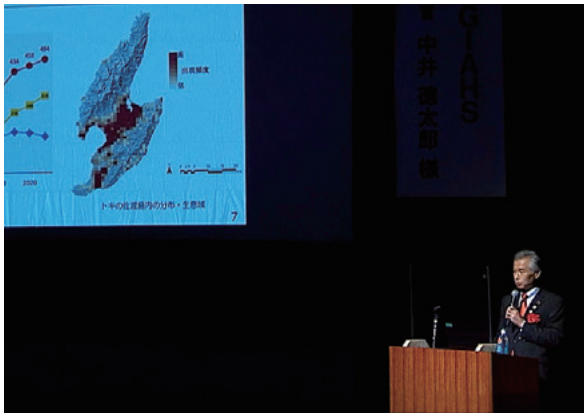
しかし、この時点で野生のトキはいなくなったというなかで、人工繁殖もなかなかうまくいかない。中国の協力を得て、1999年に中国からのトキのひとつがいヨウヨウ・ヤンヤンが来て、そして人工飼育下で初めてのトキ ユウユウが誕生して、そのパートナーとしてのメイメイを貰うというような中国との付き合いの中で、地元の皆さんの大変なご尽力で、トキの人工飼育が始まり、2008年には佐渡島にて放鳥が開始したということであります。

そして、その後、順調にヒナ人工孵化も経る中で、野生下においての孵化も2012年にはついに実現いたしまして、現在は９月時点で約484羽推定されるという状況まで戻っているということであります。

ここに至るまで関係者の皆さんの大変なご尽力の中で、大きな歩みであったと思っております。人工飼育で飼育をしながら、野生の放鳥に向けての訓練をする。そして放鳥に至るということがあるわけですけども、まずトキが生息できるような環境を整備するということです。トキの餌の確保、その為の農業のあり方、環境保全型農業への転換、ビオトープの整備、そして巣・寝る場所として営巣木、森林の整備ということへの尽力整備。そして、これを人のコミュニティとして受け入れる意識ですね。そういう意味での地域住民との座談会や環境の教育的な取組、そしてトキとの共生ルールの策定。こういうようなことが一連のおおまかな今に至るまでの歩みであります。

この生息環境整備につきましては、トキが餌を食べなければいけない。そしてトキの巣になる場所、餌を取るところは、この湿地のような水の浅いところ、水田水系であります。農法として、田んぼの水を抜いてしまう局面がありますから、そういう時にも餌である生きものの避難場所となるような江の設置という工夫もされ、また営巣の為の木の保全などを取り組んでこられた中での、今の484羽ということになるわけであります。

また、社会環境整備として、佐渡市が中心となってトキと共生とするというコンセプトを明確に打ち出され、さまざまな取組をされてきたわけです。子ども達への環境教育という学びの場を、自然体験、農業体験というところに合わせながら展開されてきてるわけです。また、この農法を広めることも含め



て地域の皆さんが、トキと共生するという観点で、さまざまな話し合いをしてきたということであります。

そしてトキとの共生ルールという明確な方針を打ち出す。これは、人とトキが互いに尊重し合って見守るということです。過度な干渉ということではなくて、自然の中でトキの営みが営めるように、助けるところは助けるけど、温かく見守る。こういうことで、今に至っているということだと伺っております。

そして、2008年に第１回の放鳥、最初の10羽が27年ぶりに飛んだわけです。その後、2012年には36年ぶりで野生下での孵化が確認され、現在、放鳥は全25回429羽実施されており、トキの生息数は484羽まで回復しています。

トキの個体数の推移および分布というところで、野生下に生息するトキのほぼ全個体が佐渡島内に生息していると推定されております。１羽、本州で生息するという推定されているところですけども、１羽以外は今佐渡島にいるということで、国中平野と、羽茂平野が主な生息地となっており、島内に広く分布しております。放鳥は継続的に進めており、野生下のトキの総数は、野生生まれの個体が増えてきたことで全体の数が484羽まできている。私も５年ほど前に、最初にこの佐渡に寄らせていただいて、この５年で、大きく増えて、今日も両津港からここに至る移動の中でも、田んぼにトキがたくさん見え、大変喜んでおります。

この野生復帰への取組、その意義、そしてこの農業遺産の認定ということになるわけですけども、朱鷺と暮らす郷づくりです。これはトキの生息が可能になるような餌、ドジョウやカエル、そういうものが生きていけるような農法ということで、農薬や化学肥料を減らす努力、生きものを育む農法として、展開されてきたわけであります。そこで栽培されたお米が、朱鷺と暮らす郷づくり認証制度ということで、佐渡市が始められた、このお米はトキが育つ環境でのお米ということで、安全安心に加えて、おいしいということです。

これをやるための農法としては、江の設置、ふゆみずたんぼのような冬期の湛水の工夫、魚道の設置、生きものの環境整備としてのビオトープ、農薬や化学肥料の削減に加えて、このような自然に優しい農法、生きものを育む農法ということを、ご尽力されてきて今に至っておるということであります。

昆虫も含めて、水辺の魚、植物、トキが暮らしやすい豊かな生態系を作るというお米の価値、付加価値という意味は全国的にバリューになっているということだと思っております。トキと共生するという

ことを目指して、田んぼの生態系に配慮してきた生きものを育む農法の取組、そしてまた、佐渡にかねてから故郷の風景として残っている棚田などの美しい景観、そして、そういう自然の中で、昔から受け継がれてきた伝統的な農文化、こういうもので島全体が、トキと共生する佐渡の里山として2011年６月に日本で初めて世界農業遺産に認定されたということです。生物多様性の危機、気候変動の危機、こういう中で自然と共生、自然生態系、生物と共生しながら地域をしっかりとしたものに維持していく、農業をしっかりとしたものにしていくということが世界的にこれからの大きなテーマであります。まさしく、そのモデルになるのが、この佐渡の取組であるということであります。環境省として、このトキの野生復帰に地元の皆様と深く関わらせていただいて、今日に至っております。これは、本当に一つ理想的な自然再生のモデルの取組ということですね。

自然環境の保全再生で、人の営みを通じて地域が潤う方向に、この動きは展開している。地域活性化のシンボルであるということでありまして、このような佐渡島におけるトキ野生復帰の取組、これも里地作りのですね、そのような先駆的、モデル的な取組として佐渡だけにとどまらず、全国に発信・普及していきたいという思いを私共は持っており、本州等での野生復帰の準備を開始しておるわけであります。佐渡市でのこの取組をまとめて、今後取り組む地域の参考にしてもらう。佐渡がモデル、佐渡モデルとして、それを日本に広げる。佐渡市を中心として、学びの場として交流の拠点となり、全国の里地の再生、地域循環共生圏という、大きな課題を、佐渡から発信して、佐渡が一つのモデルになっていただきたいとこういう思いを、強く持っております。

トキとの共生を目指す里地づくりの強みを生かして、地域循環共生圏社会の構築へ、是非佐渡市と手を携えて、環境省も歩んでいきたいということであります。本当に、佐渡市が佐渡島で展開されてきた事例、これまでの歩みは、皆さんのご尽力があってここまで来ておるわけですけども、素晴らしい営みですけれども、これから地球全体が、地域全体が、

まず危機、困難にあるというところを、どうしても踏まえなければいけません。その中で解決策を見つけ、歩まなければいけないその一つのモデルが、この佐渡モデルということになると確信しております。一つ申し上げなければいけないのは、コロナと気候危機、地球全体で今、大変なことになっております。日本におきましても、今年こそ台風自体の被害はまだそんなにはないですけれども、熱海の土砂災害もございました。毎年梅雨の時期、台風の時期に大変な自然災害が多発しております。世界全体で大きなハリケーン、洪水、森林の火災、南極や北極で温度が上がって氷が溶ける。大変なことが起こっており、気候危機といえる状況です。

これは兼ねてから温暖化という言葉を超えていまして、昨年６月に環境省として気候危機宣言をしています。これは環境白書という政府としての公式見解をまとめる閣議決定文書に初めて気候の問題を、これは危機といえる状況だと、日本政府としても見解を正式に出した。それを受けまして環境省として気候危機宣言をした。国会におきましても昨年11月、衆参両院において気候非常事態宣言ということがなされました。そして、新型コロナで世界は大変な苦しみを味わい今後の心配もあるこの状況ですけれども、この二つの気候とコロナの問題は環境省は二つは切り離せる問題ではない、一つの大きな意味での環境問題、同時解決が必要な環境問題であると捉えております。

地下資源、化石燃料、地球という一つの星を一つの人間の体に例えますと、自分の体に負荷を掛けるような形で、化石燃料、地下資源、自分の体の中からほじくり出して、運び、燃やし、大量生産、大量消費、大量廃棄し、壊して捨てると。そして、体は酸素が必要です。二酸化炭素を吸収して、肺が酸素を、地球で言うと熱帯雨林がまさしくその機能を果たしている。その人間の肺に当たるようなところを大きく切り伐採し、人間の人口が増える中で都市化、都市文明を作ってくる。こういう中で、人間は大変便利になったわけですけれども、体全体がもうもたないよと、悲鳴を上げているよと、自然の吸収力を超えてしまって、もうこれ以上、今までのやり方では持たないというところに今、立っております。そういう認識が今世界で共有されて、これがSDGsの認識になります。これへの解決策というのはどういうことかと、いわば、この産業革命後特にこの100年以内の取組、大きな人間の活動が自然に負荷を与える社会経済のあり方自体、ライフスタイルが変わるということをもってして、負荷が勝っている体の体質改善を図らなければいけない。大きな意味では、社会変革ということを言っております。

2015年にSDGs、持続可能な開発目標が国連で合意されました。17のゴールということで、この中には飢餓貧困と平等といった、人間そのものの課題というのは勿論あるわけですけども、SDGsの大きな特色といたしましては、地球環境、環境のゴールが明確にたくさん入ってるということなんですね。13番が気候変動、14番が海の豊かさ、15番が陸の豊かさ、また、活動自体がサステナブルである、作る責任、使う責任。ありとあらゆる持続化、環境に配慮したものというゴールが入っている。その背景になっている認識は、地球容量の限界「プラネタリーバウンダリー」という認識ですね。この地球全体が正しく一つの生命体、生態系の塊、そして負荷にはある程度が耐えられるが限界を超えると、回復できない破綻が起きてしまうという発想ですね。人間の体と全く同じだと思います。肝臓に負担がかかるような、お酒の飲み方を続ける。肝臓は週末飲んだお酒から回復してくれる。ところが、それが限度を超えてしまうと、肝硬変か肝臓のがんになり、もう治らないと。地球においてもそういうような例えができるような状況で、緑の部分では、回復力がまだある。黄色や赤になってくる部分は、大変危ない状況であると。生物の絶滅速度や窒素やリンという、人間が土地に手を加える土地改変の結果と言えるようなもの、そして気候変動が黄色になってきている。一つの地球自体が生態系生命系の一つのシステムとしてあるわけですけれど、それに今人間自体が負荷をかけて立ち行かなくなりつつあるということなんですね。そういう背景の下にSDGsがある。したがって、環境経済社会を一緒に、この地球を健康な状態に移行するということが、このSDGsのゴールということになるわけです。

そして、気候変動のところを取り出して、かねてから国際条約ということで議論してきたものが2015年にパリ協定ということになったわけであります。パリ協定では２℃目標と1.5℃目標ということを言っております。２℃目標、すでに産業革命以降、世界平均で１℃温暖化が進んでいます。先程申

しました、地下資源、化石燃料を依存して、大量生産、大量消費、大量廃棄。地下資源、化石燃料を燃やして、森林伐採して都市化してきたら、既に温暖化の効果はもう１℃以上あがってしまった。これだけで、色んな自然災害や異常なことが起こっている。それをあと21世紀中に１℃ちょっとだけ上がった２℃までに、食い止めたいという２℃目標です。そのためには、温室効果ガスの排出と森林や海水の藻などの、吸収量、自然の吸収量がバランスがとれるところまで、これがカーボンニュートラルということになります。そこに21世紀後半に持っていくということをやる２℃目標ということがあります。

しかし、パリ協定では、この時点では1.5℃が努力目標なんですけども、2018年IPCCの報告書が出て、１℃は上がっているこの世界の状況が、大変な状況で、後１℃上がったら、どういうことになるのかということですね。したがって、0.5℃で抑えたいと。もう一つは2050年21世紀の後半ではなくて2050年の段階で、カーボンニュートラルに世界中でもっていければ、1.5℃目標ができるという科学的な見立てで、この中で今世界ぎりぎり今1.5℃目標を目指そうということですね。そこの1.5℃がまさしくこの2050年カーボンニュートラル。ただそれをやるのに、2050年に近い2040年とか2045年までに何か素晴らしいテクノロジーが生まれて、地球を救ってくれるようなことが起こって、2050年に駆け込みで良くなるということでは、全くなくて、実はこの後、残された９年というか2030年ぐらいが、もう山だと。2030年、今2021年ですけれども、ここの死活的な10年で2050年カーボンニュートラルに向かってのトラックに乗れるかどうか、そういう死活問題的な10年にいると思うんです。

世界中にそういう認識になろうとしておりまして10月31日からグラスゴーでCOP26気候変動の条約交渉がまた行われます。この1.5℃になんとかトラックに乗るように、何とかならないかということが、思いな訳ですね。日本におきましても、昨年の

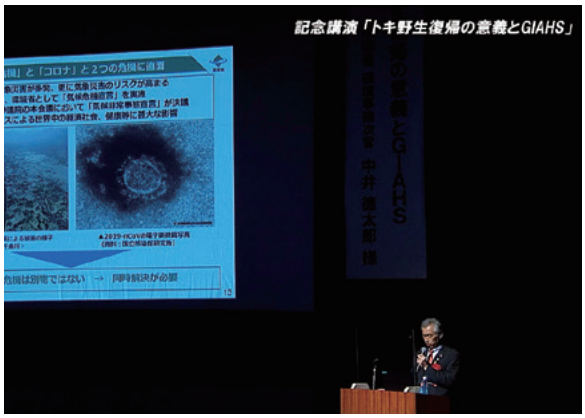
10月に、菅政権が所信表明演説を国会でした際に、2050年カーボンニュートラルにコミットしました。1.5℃目標に、日本政府としてコミットしたということであります。この2050年カーボンニュートラル宣言、大変なインパクトを社会経済に及ぼしております。日本人は大変真面目ですので、後30年で自然の吸収能力まで抑える、ネットゼロに持っていくと、これなかなか、本当に大変な目標ですので、真面目な日本人としてのコミットしてできないと、いい加減な約束ができないみたいな、そういう時代もずっとかねてからあって、いやいやもう世界の動きはこうなので、なんとかコミットすべきだ。色んな水面下での議論もありましたけれども、日本は昨年もう振り切って2050年カーボンニュートラルをやると言った途端に今、経済界も大変な大きな流れ、大企業も含めて、大きなカーボンニュートラルの動きになっています。

ここでは成長戦略という言い方をしています。環境省として、この新たな成長戦略、この成長という言葉に色んな議論が、実はあるんですけれども、環境省の理解として、先程地球が傷んで病んでいる不健康な病気の状態、これをあと30年で健康体に変えようということ、この健康体に変えるための人間の経済や社会の変革をしていく。それによって、経済社会の質が高まり、移行していくということに、お金も必要になります。そのようなこと自体が成長であると、新たな成長であるという風な捉え方ですね。成長戦略、言わせれば、病気の状態から健康体に移行する、だから移行すればするほど良くなる、という発想なわけです。

高いハードルでありまして、日本の排出実績でありますけれども、棒グラフのところで、赤いものが入っているところ2013年で日本の今最高排出量の14億トンというのがございます。2008年９年のリーマンショックという世界の経済活動がシュリンクした瞬間に一回減った。その後、東日本震災で原発事故が起こり、電力の供給構造が原子力というCO_2を出さないものから、石炭火力中心のものに変わって、ガッと増えてそこからですね、日本は色々声をかけさせていただいて、この政策は進めております。

産業界もライフスタイル的にも、この６年ですね、着実に減ってきてはいるんです。６年連続で真面目に減らしてる国はなかなかないです。14パーセント減ってきたということなんですけども、2050年のゼロに向けて、先週の金曜日に政府で閣議決定をいたしました。今までの、この中間目標の2030年が26パーセント削減目標というトラックには乗っているということだったんですけども、2050年ゼ

口に合わせて46パーセント削減という目標に閣議決定いたしました。更に、50パーセントの高めの目標に向けて挑戦を続けるということを、世界的にも表明しております。後、９年で凄く激しく変わるということに日本政府はコミットしているということなんですね。社会変革と言わざるを得ません。地球全体、その中の地球の一部として日本もあり、この地域もあるということですので、全て繋がっております。気候変動の影響、異常気象災害を招くような集中豪雨や台風、これはもういつ来るか分からないような状況ということで全てが繋がっている。この経済社会をどう変えるかというところの究極のコンセプトが環境省、武内理事長が中央環境審議会の会長さんの時にですね、一緒にやらせていただいて、第５次環境基本計画で閣議決定に持っていっております。また、御説明いたします地域循環共生圏、これはSDGsの観点、ローカルSDGsと言えるものですね。そういうものが解決策だと思っております。地球地域、全部繋がって生態系、自分の体というものが病気の状態で、慢性病ですよね。肝臓が傷んでるとか、急性のものでちょっと手術して治ると言うんじゃなくて、こう体質改善が必要。その体質改善していった健康体の状態のイメージ、一個の健康体の状態のイメージっていうものをみんなで持つ。そこに向かっていくという訳です。３つの切り口って、このことを言っております。脱酸素社会、循環経済、分散型社会という言い方をしております。この病気で非常に悲鳴を上げてる体を健康体に変える、その健康体の状況、これも体は、はっきりとものでできておりますね、ものができている。その物の繋がり方がですね、循環経済、今までのようなリニアというか直線型にですね、もうどっかに無限にあるものを獲得し、大量に作り、大量に消費、大量に捨てて終わりと、この一直線のものではなくて、全てがはっきりと、究極ごみはない、全てが全部使われていく。最終的には、微生物が全部分解してくれるところまで行きますけども、この私達が使えるもの自体も、



商品設計の段階から交換しやすいもの。ごみにならない。そういうものの繋がり方として循環してるというのが、この循環経済で脱炭素社会というのは、いわば全て生きていく為にエネルギーが必要ですよね。そのエネルギーの断面で見ると、さっき申しましたようなカーボンニュートラルとCO_2に換算される世界で、自然の排出量と吸収量、自然の吸収量と人工的な排出量が、バランスがとれる状態を言います。この分散型社会というのは分散型自然共生社会と言えるものですけども。これ私たちがいるこの空間のあり方自然生態系との間合い、それをですね、今までのような一方的な一極集中型都市化、そこでコロナが起きて人が集中しているほど、３密があるほど、そのパンデミックのダメージが大きいということでは、今回反省がありますけれどもここにデジタルですね、技術Wi-Fiを含めですね、デジタルの技術を入れると、今や分散型、自然の生態系の本来のあり方に沿った方向に行ける、これ三つのベクトルで言っています。一つの病気の状態を健康体生物、生命体として健康な生態系の健康状態で、それをエネルギーの断面から見るのが、このカーボンニュートラル。物の繋がり方の切り口で見たのがこの循環経済。それを自然空間で、あり方から見たのは、この分散型社会とこういうことになる訳です。この３つの方向を突き詰める。先程パリ協定の話をしまして1.5℃目標カーボンニュートラル2050年と言いました。それくらい今地球全体が深刻な状況ですので、2050年、後30年以内に決着付けないといけない、しかも、この2030年っていう、あと10年ない時間にトラックに乗せなければ、その方向に乗せなければいけないと。政府としてどうするのか。ということで、先程申しました、2040年とか45年に何かとんでもない先駆的な技術ができて最後駆け込みセーフって言うわけにはいきませんので、この話は。

環境省が事務局になりまして、政府官邸の会議体を作って地域脱炭素ロードマップというのを６月に決めております。政府の拡張を全部連携しての大きな方向なんですけども、いわば今までのやり方、産業政策、エネルギー政策、どちらかというと供給サイドの技術のイノベーションにどうしても頼らざるを得ないと、今後もそれはあるんですけども。まず、暮らしや地域の現場需要サイドから、もう目に見える形で、もう変わっていこうよと。そのロードマップを見えるものにしましょうよ、という発想で作ったのが、地域脱炭素ロードマップです。地域の需要サイド地域のあり方から描くと。それはまさしくエネルギーも地域で回していく、引き出して回していく。それで地域の資源として食や農業や観光を使っていくと。こういうことの発想ですので、それは地

域創成そのものであり、地域課題、防災減災ですね、さまざまな社会課題を説いていくということを、この脱炭素という切り口でやっていきましょうということになります。

2030年の時点で、トラックに乗っていないといけないと思っていまして、そういう意味で2030年で2050年に向けて大きなドミノが動くよっていうところまで持ってきたいんですね。そうしますと2025年までに目が向いてないといけない。ということで、今、少なくとも100所以上の脱炭素の先行地域と言う形で全国に手を挙げていただいて、そこに政策を集中投下しようということをこれからやってまいります。

100地域以外のところも、カーボンニュートラルにきっちりコミットできなくても、色んな対策を重点対策として打って、全体的に底上げするんですけども、まず、先行地域にいってもらおうというところになるわけです。これは、一つの自治行政区と言うことにはこだわっていなくてですね、一つの行政区の中でのエリアを切っていただいて、例えば自然エリアというようなイメージです。離島バージョン、まさしく佐渡には大変期待しておる訳ですけども、ありとあらゆる引き出せるエネルギー、バイオマスや風力、色んなものを含めて工夫していただき、地域で回していくということを地域での暮らしに直結させる。この分散型、地産地消型という発想ですね。人間の体は37兆個の細胞からできており、細胞一個一個の能力が高まる、上から統御するという方向ではなくて、一個一個分散型で、もうビルも家も自分でエネルギー使うだけじゃなくて、エネルギーも作るしそういう中で繋がりあうのがテクノロジーで可能になってきてる時代です。最大限デジタルなどを活用してですね、農業もスマート農業を取り入れながら、分散型、地産地消型は、一個一人ひとり、一個一個細胞が元気になっていくというものでの地域づくりです。これは、一つ住宅商業ビジネスエリアというところで、都市バージョンとしてもこのエリアをかけるということでありまして、都市の中でのエネルギーの問題住宅や建築の問題移動の問題があります。

したがって、佐渡におきましても、先程、渡辺市長からは大きく３つの課題があると。移動確保の問題、水道の問題、医療の問題。そういうところの課題もですね、このエネルギーの観点からも分散型の発想でどういう解決ができるのか、というトライがあり得ると思います。

先ほど言いました、循環経済、サーキュラーエコノミーと言って、これまた元々日本人が、(佐渡は特に素晴らしいわけですけど) 江戸時代まで普通に

植物文明で、完全循環型の社会をやってきたのが、今ここに至ってるということなんです。大きな産業構造もできた上での循環って、今までは地下資源、化石燃料でした。一方的に地球が無限だと思って掘って、使って、大量生産、大量消費して大量廃棄して捨てて終わり、というモデルではなくて、その場で常に回していくと。上流の組み立てる部分から、ごみにならないような部品の作り方、交換し合いのような方法と、設計の段階から入ります。究極はですね、トヨタが最近では、定額料金制で車を売るんではなく、サブスクリプションサービスと言いますけど、使用価値サービスを売る。所有権は売らない。こういうことまで始めてる。究極、こうものが大事になる仕組み。今の社会の仕組みは、買い替えてもらう為に２年３年で劣化するような商品を作って、買い替えて売り上げを維持していかないとお金が回っていかない。これではこのサーキュラーにはならないです。これから、色んなビジネスモデルとして、ものを節約した方が売り手にとってもメリットになる。車を売るんじゃなくて、車の利用料金を売ると、利用してもらうお付き合いを長くやる。では、車が長持ちした方が誰が得なのですか？今までは、売って所有権を会社は持たない。今度は、所有権を持ったままやる。自分が車を作るけれど、あまり作り過ぎない方がいいという話にもなってくる。まず、これからそういうような、製造業も含めて、社会は変わってまいります。そして、この分散型社会、自然界との間合い、分散型自然共生社会と言えると思います。特に災害との関係です。今のエネルギーのところと絡めますと、北海道の地震で一つの発電所が止まりますと、他の全体が地震で停電になったり、房総半島の台風の時に房総半島が一気に停電になったりと。そういうものではない、細胞末端がコミュニティベースで、ちゃんと常に維持できてる。正しく、分散、地産地消、自立分散という発想になりますね。自然との間合いをうまく、特に、里地里山が輝く。その象徴としての国立公園、国定公園などの

魅力が高まりながら、そこは従来のような完全な保全する地域はありますけども、加えて、人が利用していくという中での、自然とのかかわりということになります。

究極は、この分散自然共生型社会、森里川海という言い方をしておりますけども、この水の循環に象徴されます、雨が山に降り、雪になり降り、川になり、地下水になり海に行き、それがまた蒸発して雲になり、戻るという。この水の循環系に象徴されるこの全ての循環がある中に田んぼもあり、家もあり、生きとし生けるものがある。ここに佐渡は、トキを戻すというテーマを入れ込まれて、人の暮らしの再構築、人の生業のあり方、農業のあり方を変えていたことで、トキが戻ってきたということなんですね。今、バランスがくずれ、農産漁村が廃り、人がいなくなり、耕作放棄地が広がり、都市のビルに人が集まり、そこでも生きものであることに変わりない人間は何かを食べて、何かのエネルギーを持っている。よく分からないまま地球に負荷をかけていた、中東からの化石燃料、南米やアジアからの穀物、お肉を食べたらそういうことになった。ということです。

一方では、地方の耕作放棄地が広がり、森林は荒れ、自分達が生命体として本来の力を身の回りから引き出そうという発想になりますと、エネルギーも水も空気も食べ物も、物の循環の中にポテンシャルがあります。それを、かねてから日本のご先祖様がやってきたような発想にうまくテクノロジーを使って、真っ当にやっていくという発想であります。

生態系を利用した防災減災、eco-DRRという言い方をしますけれども、過剰な投資で人工物で自然を(言わば)克服するというところに行かないで、自然との折り合いを付けるような、生態系生物との折り合いを付けるような。洪水時への水を貯める機能とか、森林が水を吸ってくれと。そういうことに着目してやっていく公共事業的なものが、これからは大きな意味を持ちます。

また、エネルギーで言いますと、房総半島、一昨年の台風で電柱や木がたくさん倒れるぐらいの風が２週間、東電の関係管内で千葉が停電になりました。分散型地産地消型のシステムを持っている睦沢町の例ですけども、掘るとですね、千葉の天然ガスが出るんです。その天然ガスを熱と電気に変えるシステムを作り、住宅ゾーンとか道の駅ゾーンで、マイクログリッドと言って、電線を繋いで、平時は普通の東電のシステムに繋がってるんですけども、災害時で全体が停電しても、ここは分散型で生きていました。自分の細胞が活性化している繋がりの世界。ちゃんと電気もできて、温泉もできて、入れて、みんなが助かったと。こういうところを、たくさん作って

きたわけですね。こういう土地の力を引き出すことが、技術を使うことによってできる時代になっている、という発想です。里山里地についても、里山イニシアチブということで、世界的にも有名なぐらいに名前が広がってますけども、さらに一歩進めて、ワーケーションITのデジタルを使って、里地里山こそが、人の真っ当な生活やふれあいの場なんだと、いうことに変えていこうという、里山未来拠点構想を、打ち出しているわけです。

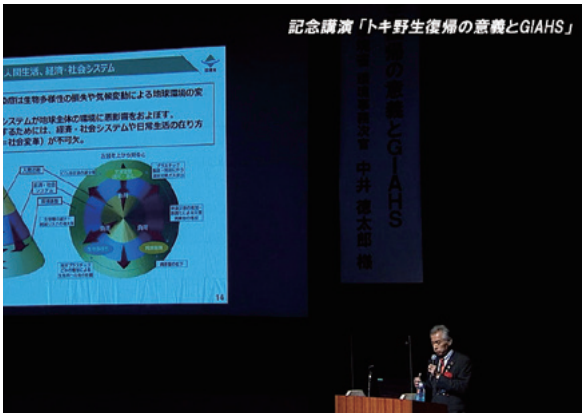
教育体験、企業の研修なども含めて、都市との交流ということもありますし、さまざまなことができる拠点だ、という発想。その為のインフラは、何か？ということになると、やはりITデジタル環境が、まずはベースになってくると思いますね。

国立公園の事例です。日本には、国定公園も含めて34の国立公園があります。日本の素晴らしさ自然の素晴らしさというものを、ブランド価値をフルに、発揮してくる時代だと。一時は、インバウンド向きに国立公園満喫プロジェクトということで始めておった訳ですけども、やればやるほど、コロナがあって。この意味としては、むしろ国内需要ですね。国内誘客も含めて自分達日本人が味わう、暮らしを見つめ直す、そういう場として国立公園をワーケーションという働く場で使ったりしていくと言うことも含めて、やっていこうということであります。宮崎政務官の挨拶にも出てましたけど、今、生物多様性はアフター 2020の目標を来年の４月５月に世界で合意していく。その中に出てくる話で、30by30、陸地と海を、それぞれ30パーセントずつ、ということを目標にしてくることになります。30パーセントも維持するっていうのは大変な話なんですけども。これまでのような人が入れない保護区域だけではなくて、里地里山のような例です。社寺林とかですね、人や企業が団体や手がかかるもので維持され、その自然の循環がちゃんとしてるというものを認定する制度を作って、人が関わるけれども、30パーセントとしてカウントできるというですね、そういう

世界に変えようとしておるわけです。そういうことによって、人が変わると、企業の取り組みとしてのOECMになりますと、その企業のブランドになります。そういうことが企業の評価に、株や金融が付いてくるという時代になりますので、そういうものを促進していきたい。この30by30、今申しました来年の春の生物多様性、合意されべく調整が進むと思いますけども。2030年までに陸と海をそれぞれ30パーセント高めます。ということなので、日本はすでにこの春のG7サミットでコミットしており、これを日本の中でどうするかという議論をしている。自然環境保全エリアとしてですね、このOECMという今、申しましたことを保護地域以外に認定することを、日本版のものとして作っていきたい。社寺林、企業有林、企業緑地、里地里山、また里海も入りますね。そういう意味では、カーボンニュートラルの動きと、30by30から来るOECMのような動きと、全部リンクしてくる話になります。この制度自体が細かいとこまで説明できないのはまだ残念なんですけども、来年の時点ではすべて自然のメカニズムでうまくエネルギーや、食や、観光や、そういうものを引き出しながら維持されている。というそういう地域の見え方、空間のあり方ということになります。これも30年までに30パーセントですから、これはもうゆっくりやってられない。ということで100地域を先行的に、来年ロードマップの公表ということで、方向性を出して具体的なOECM地域を作っていくということに、23年から２年掛かりぐらいでやろうと言う話であります。

また、繰り返しになりますけども、OECMということで生物多様性を保全するエリア活動を認定する。それで、関わってもらうことにより、企業の場合であれば、企業の価値が上がると言うメリットを持つような仕組みを考えております。

企業活動がやればやるほど企業のブランドになると言うことを意味する。これが最近の金融の流れであります。（これもまた、参考ということで）そういう意味で佐渡みたいなこの素晴らしい自然のところを、どうしてOECMを使っていくか、っていうことが、またカーボンニュートラルの先行地域と合わせて、一緒に考えさせていただきたいなと思っておる訳です。



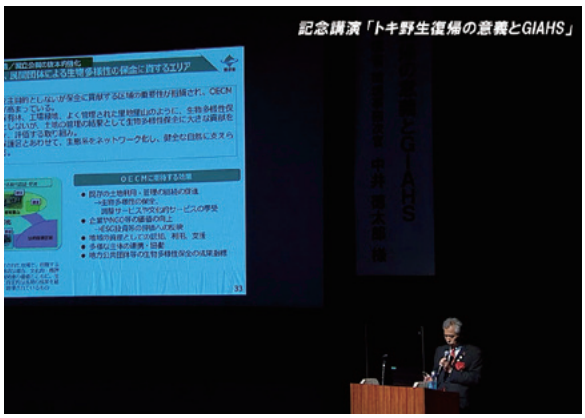
具体的には、棚田みたいなところが入りますし、企業緑地みたいなところ、都市空間におきましても緑地がありますね。新宿園などですね。そういうところは、今まで３つの切り口で申してきましたけど、地域循環共生圏、エネルギーの断面で見たカーボンニュートラルであり、ものの繋がり方から見えたサーキュラー（新循環）であり、空間的なものの配置から見た自然界との対応での分散型であり、そういう健康体のイメージを地域循環共生圏、森里川海みたいな元々根っこは自然生態系自然の恵みを生んでくれるシステムがあって、そこに都市も農村も、私達も言えます。私達も、自然の一部である、森里の一部である、それもバランスが崩れましたから、それぞれが生物細胞だという発想で、もう一回自分の身の回りのポテンシャル、目の前の自然の力は何なのか？と、自分も含めてそういう発想で、自立分散、地産地消という発想に一回立ち返ってやっていくと。

農山漁村においては、人がいない、お金が足りない。都市においては、食物も足りない、エネルギーも足りない。これからビルは殆ど太陽光が付きますし、家も付きます。でも、都市の産業活動まで賄えません。そうすると、農村漁村から人口を養う分を超えて作れるエネルギーを、都市に持ってくる。また、都市の企業なども都市空間で精神的にダメージを受けるような働き方ではなくて、ワーケーションも含めて顔の見える関係で農山漁村とお付き合いをする。その中での社員の研修、働き方の拠点、そういうなものでの顔の見える関係を企業や学校というベースから作り直して、見える関係での食材を、農山漁村から社食の食材で定期購入するとかですね、お米を買うとか、そういうお付き合いしながら、いざ災害があったら、都市での直下型地震があったら３か月住めないかと、３か月もうちの社員全員移住させてもらいますのような。そういう災害協定的なところまで含めて、ボトムアップ型で、どんどん自分のポテンシャルを生かし、引き出しながら補い合いネットワークするとこういうことが、地域循環共生になります。

循環するエリア、細胞が集まって体ができてますけども、細胞が集まって筋肉ができて、筋肉が集まって、消化器系ですね、循環系とかできて、体ができる。そういう体のレトラリで、ベースの一つの家とかコミュニティとか、市町村単位、流域単位とか、

さらには北陸全体とか、北海道全体とか、その上にはアジア全体とか。そういう意味では、大きな産業工場が都市部港湾地に立脚しているところを、日本国内で足りないエネルギーを、地球的な意味で言うと、今は化石燃料に依存していますけども、オーストラリアや中東砂漠から出てきた太陽光の再生エネルギーを使ったアンモニアとか、水素を港湾で輸入するようなことに、最後には入ると思います。これは、環境省の森里川や地域循環共生圏のホームページで見ていただきたい。細胞系が活性化したエネルギーのシステムは、衣食住や雨風をしのぐ建物のまちづくりや、移動とか、ありとあらゆる教育の課題だとか、一回全部ぶち込んだものです。地域循環共生圏と言われているものになります。いくつかの例を言いますと、これは北九州エコタウン。産業立地という側面でも、物の繋がり方から言うと、「ごみはないんだ」という発想で、ありとあらゆる産業界への物が連鎖して、最終的にごみはないんだ、ということです。繋がり合うというところがエコタウンとして北九州、その発想の延長で、そういうものを動かしていくシステムとしての再生エネルギーの活用である。そこには、人が関わり学習の場になってるような産業立地としての循環の例もありますし、これは鹿児島県の大崎町の例では街ですね、農産漁村的なとこですね。ここの住民ベースでの、ごみへの取り組み。ごみを分ければ資源、という徹底の中で12年連続でリサイクル日本一というところで、ごみがない。焼却しないで分別して全部回してしまう。アジアやインドネシアなどでお金はない中で、ごみの問題どうすんだ？というところで、大崎システムとしてですね、学びが輸出されるとで人材の交流になります。

ラムサールブランドと言ってですね、干潟の再生有明海の鹿島市ですね、海苔の養殖やっていて、ここなんだか守らなければということで、企業が絡んでやってたら、カモが海苔を食べてしまう。そのカモを避ける為にLEDで照明を当てると、カモは寄ってこないと。これ夜見たら非常に綺麗だということで、このライトを使って、今、夜間エコツーリズムが非常に盛んになってる。やりようは色々あると。



岡山の真庭市という木材の循環利用の先進地ですけども、従来のバイオマス発電ですね、さまざまな使い方に加えて瀬戸内海との連携ということで、瀬戸内海の牡蠣殻を真庭のお米作りに使うという、真庭里海米ですね。そういうようなことは、森里からの循環と発想で自立分散していくと。

色々申しましたけども、SDGsというと、世界目標で、少し抽象的なんですね。17番のうちに何番のゴールに合ってるか？みたいな議論の陥りがちなんですけど、トータルでこの地域、地球の健康というイメージを共有して、そこに向かっていくということです。そして、それを具体的に展開してくのが、この地域循環共生圏、地域のSDGsと言ういろんなふるさと、この地域の未来系をより健康な状態をイメージしていただいて、そこに必要なエネルギー、物の繋がり方、自然との間合い、生物との間合い。課題が一個一個出てきます。その最優先課題を見つけてもらって、やれるものから解いていく、というのが、この地域循環共生圏。そのベースになるのはやはり森里川海という自然の一部であり、その恵みを引き出すんだ、という時代なんだと。地球の健康は自分の健康なんだと、全体がうまく自分の細胞が末端細胞までちゃんと栄養が行き届いてるような状態になってなければ駄目なんだ、ということを自分からやっていただく。こういうことを、国民運動として個人企業単位で知っていただきながらいろんなアクションをつなげる、森里川海という運動をやっております。一者一者、ひとりひとりの運動的なものから具体的な地域づくり、その架け橋として広める為には、地域循環共生権のことを知っていただくステークホルダーが絡み、マッチングするプラットフォームをやっております。また大臣表彰という形でグッドライフアワード。こういうものを政策展開してます。グッドライフアワード、そういう環境経済の同時解決用のものに大臣賞をですね、１年10個以上をあげると。昨年９回目、今年９回目が12月に表彰されますけども、昨年の大賞は里山でしたね。東京の里山で養護施設が開拓しているところが、地域との連携になって、すごくいろんな展開できてます。大木町というですね、循環生ごみ、山村留学が最近すごいコロナ関係ではやってまして、そこが岐阜のグリムウッドさん、また自然農法で都市に直接顔の見える関係で長い間やられているカネマツさん、また、尾畑酒造さんですね。これは森里川海特別賞（第５回学校蔵プロジェクト）を取っております。

そういうことで、いろんな取組を皆さんの持ち味を持って企業としてやる、自治体としてやる。色んな取組なんですが、やはりベースはこの森里川海というところに共感し体感し、その運動が大事だと思ってます。是非この森里川海プロジェクト、皆さんホームページから入っていただいて賛同いただき、一緒に色々学んでいただければと思います。

ポストコロナ時代ですね。この地域循環共生圏と故郷の健康体のイメージを作って、そこは全く昔に戻るということよりも、昔の良さを現代版に引き出す、懐かしい未来をデジタルなども使って、人の温かみある、トキと共生する、そういう社会にしたいわけです。それが環境省が言ってる成長戦略でありまして、CO_2が減る。色々大変な議論が出てきますけど、ただそれは今病気の困難な状況下から一歩でも早く知恵を出して、健康体に行こうとすることですから、それはいいことで、日本人は真面目です。我慢合戦みたいな感じになってですね、皆、我慢して切り詰めてるというのではなく、知恵を出して、本来の命のパワーを引き出してやると。そんなことを、お話をさせていただきました。今日はありがとうございました。

新穂地域にある「日本一のトキの学校」。佐渡での野生復帰と、トキとの共生について学び、伝える活動を20年以上続ける。また、トキについて学んだ子どもたちが、「トキ解説員」として、修学旅行で訪れる市外の小学生や観光客などに解説活動を行っている。

テーマ

トキを学ぶ、トキから学ぶ、行谷小学校の子どもたち

「日本一のトキの学校」として取り組んできたこれまでの活動と今後の展望を発表します。

発表者

佐渡市立行谷小学校

行谷小学校６年生です。よろしくお願いします。

行谷小では、１年生から６年間、毎年トキ学習をしています。毎年、観光客の方にトキ解説をしたり、トキの餌となる水辺の生きもの調べをしたりしています。また、学校の周りにはたくさんのトキに関する施設があり、たくさんの方からトキについて学んでいます。そして行谷小学校はトキを飼育したことのある、唯一の小学校です。これらから行谷小学校は、「日本一のトキの学校」と名乗っています。私達は今年、学校で飼育していた４羽のトキについて学びました。これまでは写真でしか見たことがありませんでしたが、６月に飼育していたトキの貴重な映像を見せてもらいました。今日は、そこから学んだことを中心に発表します。

まずは、飼育していた４羽のトキについて紹介します。１羽目はカズです。阿部和夫さんが保護したので、和の字からカズと名付けられました。カズはメスでした。次はフクです。保護した福田嗣夫さんの福の字からフクと名付けられました。フクはオスでした。３羽目はヒロです。ヒロは近辻宏帰さんが保護したので、宏の字からヒロと名付けられました。ヒロはメスでした。最後はフミです。フミの名前の由来は大葉文雄さんが保護したので、文の字からフミと名付けられました。フミはメスでした。

次に４羽のトキの特徴について説明します。最初にカズの特徴についてです。カズは右側の羽を骨折していました。上野動物園の獣医と地元の獣医が、カズの治療していました。治療法は骨折箇所を包帯で３日間固定して、その後３日間は関節が動かなくならないように包帯を取り外すというものでした。でも、包帯が外されると身の自由を喜んで、また骨折をしてしまいました。つぎにフクの特徴についてです。フクは冠羽が短かったです。また、人懐っこい性格でした。そして食欲旺盛で健康体でした。また、フクはカズより一回り体が大きかったので１日３回600g食べました。カズの２倍食べたと言われています。ヒロとフミの特徴についてです。空腹時には待ち切れずに手から餌をついばむほどで、人への警戒心は薄かったそうです。

次は４羽のトキを保護した方について説明します。トキを保護した方々は、阿部和夫さん、福田嗣夫さん、近辻宏帰さん、大葉文雄さんです。もちろん保護するためには他にもたくさんの人が力を合わせました。

次は保護した日についてです。カズは1965年８月９日です。フクは12月５日です。ヒロとフミは1962年６月２日です。

次は捕まえた場所についてです。阿部さんは炭焼きに行った、黒滝山の入り口付近で羽を傷めて飛べなくなった幼鳥、カズを素手で確保し捕獲しました。フクは新穂村教員委員会が保護作戦を開始し、真野地区で発見して佐和田地区で保護しました。次はヒロ、フミについてです。黒滝山で巣立ちの近い２匹の雛を捕獲班総勢20人で捕まえました。

次に行谷小学校で飼育した経緯について発表します。カズは保護された後、まず現在の新穂小学校前にあった旧公民館と管明寺の間の空き地に作られた仮設ケージで飼育されました。仮設ケージの大きさは縦2.7m、横1.8mととても小さく、日当たりが悪かったそうです。そこで新穂村教育委員会は検討し、行谷小学校が最適だと判断し、行谷小学校にケージ

が作られ、行谷小学校に移動しました。カズは高野高次さんに抱かれ、まつえむ鮮魚店の方のご厚意で車で運ばれました。フクも保護された後、仮設ケージで飼育されました。高野さんから餌づけされ２か月近く飼育されました。その後カズのケージの隣に増設されたケージで飼育されるようになりました。ヒロとフミは保護された後、他の２羽と同じように仮設ケージで飼育されました。２羽は生後１か月くらいだったので４か月ほど仮設ケージで飼育されました。そして、行谷小学校に移動しました。その時、カズが亡くなっていたため、カズがいたケージにフクが入り、フクがいたケージにヒロとフミが入りました。

次に４羽のトキが飼育されていた場所について紹介します。これは昔の校舎の写真です。行谷小学校は昭和50年頃、今の位置より少し前にありました。校舎が前に出ていたため、後ろ側にケージが作られました。現在の校舎では校長室前の廊下の位置にあたります。

次にケージの大きさについてです。ケージの大きさは７mほどの大きさだったそうです。教えてもらった情報によると、僕たちが使っている教室と同じくらいの大きさだったそうです。

次は学校で飼育していた餌についてです。まず、トキの餌についてですが、小学校で飼育していたトキは、ドジョウ、タニシをあげていたそうです。また、当時のトキ保護センターではカエル、アジ、ドジョウなどをあげていたそうです。トキ保護センターでの１日の餌量は340gグラムから400gでした。

トキの餌は、どこでどうやって、捕っていたかについてです。トキの餌は、村全体が協力して、捕っていました。村民が捕まえたドジョウなどを１か所にあつめていたそうです。僕達の先輩である行谷小学校の子ども達も餌となるドジョウ集めに取り組んでいたそうです。

次に、トキをお世話していた方々についてです。高野高次さんは元々トキの保護に力を尽くしていた方です。行谷小学校でもトキのお世話をしていました。カズが学校に来て１週間後には高次さんの手から直接餌を取るようになりました。カズの治療にも積極的に協力しました。本間作治さんは用務員の仕事に加えて、トキのお世話をするようになります。仕事量が多くなりましたが、温かくトキたちのお世話をしていたそうです。本間スミ子さんは作治さんの奥さんであり、サポートをする為に学校へ来ました。作治さんの用務員としての仕事に支障がないように、お世話しました。佐々木健次教頭先生は教員を代表してトキの飼育にあたりました。４名の方々を中心に、協力してトキの飼育をしました。

次にカズ、フク、フミ、ヒロの死因についてです。カズは行谷小学校で飼育中に亡くなってしまいました。カズの内臓には寄生虫、肝臓には多量の水銀が含まれていました。食べていた餌に水銀と寄生虫が入っていたと考えられます。フク、フミ、ヒロは行谷小学校で飼育後、トキ保護センターに移動し、本格的に飼育されていましたが、亡くなってしまいました。ヒロは床に落ちた姿で衰弱、間もなく死亡しました。死因検査の結果、寄生虫が肺を破り、静脈に穴を開けたため出血多量だと分かりました。餌が影響したのかもしれません。フクはいつも通りに採食して水浴びなどをし、灰黒色の羽の完成を見せたとき、急死しました。お腹の中に大きな出血がありそれが原因となったそうです。フミは左脛骨を骨折し、それが原因の衰弱死でした。

次に行谷小学校で飼育していた４羽のトキの亡くなった後の行方を説明します。まずは、カズについてです。カズはトキ保護センターに移送された後、新潟大学で解剖され、検査されました。その後、新潟大学の附属図書館に剥製が設置されています。次はヒロについてです。ヒロは最後まで行谷小学校にいたわけではなく、昭和42年11月21日にトキ保護センターに移送されました。亡くなった後、剥製になり、現在は佐渡市の姉妹都市である埼玉県入間市の入間市博物館に展示されています。次はフクについてです。フクはトキ保護センターに移送された後、

剥製になり、現在は新潟県立自然科学博物館に展示されています。またフクの他にも新潟県の動植物エリアに、トキが５羽展示されているそうです。また、そこでトキの生態も紹介されているそうです。次はフミについてです。フミは行方が分からないそうです。是非、行谷小学校に帰ってきてくれたら嬉しいです。

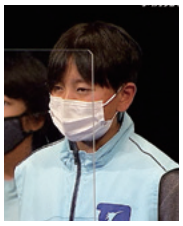
飼育されていたトキの体から水銀が見つかったことから、原因について考えてみました。まず、今と昔の農薬について調べてみました。昔は農薬を大量に使っていて農薬の中には有害な物質が多くあり、地下水や川に流れ出てしまうこともありました。また、化学肥料も多く使われていました。そういった肥料のせいで栄養を作るための微生物などが集まってこなくなり、その結果、土が乾いたり環境がダメになってしまうこともありました。また、昔は毒性があるにもかかわらず殺菌能力があるからと水銀を使って肥料を作っていました。ある時は、メチル水銀を農薬に使っていました。メチル水銀などの有機水銀は人間の脳に障害を引き起こします。ここで使われていた水銀がトキの体にも入ってしまい、障害を引き起こしたのではないかと考えられます。現在の農業は化学肥料に水銀を入れることを禁じています。また、佐渡ではトキを中心とした環境作りを重視する米作りが広がっています。

ここからは、昨年僕たちが学習したトキに優しい米作りについて発表します。減減栽培についてです。減減栽培とは減農薬、減化学肥料で農作物を栽培することを言います。減減栽培で作られたお米は、朱鷺認証米となってお店などで売られます。減減栽培には消費者側、生産者側のそれぞれにメリットがあります。消費者側では安全に食べられる、普通の栽培よりもお米本来のおいしさを引き出して栽培されるので栄養価が高いというメリットがあります。生産者側では農薬代が軽減できる、お米のイメージアップで多く買ってもらえるというメリットがあります。佐渡市では農薬を減らす取組が1995年に始まりました。約９年後に起きた台風の影響によって佐渡全体で台風の被害を受け、品質や収穫量が大きく落ちました。それから佐渡市は自然災害に強い米作り、佐渡米というブランディングを確立するという方向性で進めていくことを決め、今の減減栽培が

行われるようになりました。

皆さんは「朱鷺と暮らす郷」というお米を知っていますか？このお米はトキ認証米制度の条件を満たして生産されたものだけが名乗ることができます。それではその条件について説明していきます。朱鷺と暮らす郷を作るための条件は、農薬・化学肥料を半分に減らすこと、生きものを育む農法を１つ以上を行うことなどがあります。このような条件で作られたお米が、「朱鷺と暮らす郷」になります。トキ認証米は佐渡市の学校給食で使われており、私たちも食べています。朱鷺認証米は自然に優しい農法で朱鷺に優しく、また、私達の体に優しいお米です。このお米がどんどん全国に知名度を広げていくといいと思います。

佐渡では朱鷺を育む農法という、トキに優しく佐渡の生きものを守る水田作りが行われています。その農法である、江、ふゆみずたんぼ、ビオトープについて説明します。江とは田んぼの横にある深みのことです。水が張ってあります。そのため、田んぼの水を抜いてもドジョウなどの生きものが江に逃げることができます。また、ヤマアカガエルなどの産卵場所にもなります。しかし、デメリットもあります。手間がかかることや畦が弱る、外来生物であるザリガニなどが生息しやすくなり、畦に穴が開いたりすることなどです。ふゆみずたんぼとは冬でも田んぼに水を張ることです。冬でもさまざまな生きものが生きられます。冬の田んぼの中で生きる生きものが形成するトロトロ層というものには抑草効果があり、農薬の使用量が減ります。そのため、多くの生きものが生まれることがあります。しかし、収穫量が市内の平均値を下回ることがあることや水管理に手間がかかること、農家の負担が大きいことがデメリットになっています。次にビオトープについて



説明します。ビオトープとは作付けしなくなった田んぼに水を張ったり、年間を通して水を張った池や沼のことです。米作りに直接関係はしませんが、休耕田の活用という点で重要です。ビオトープは生きものが繁殖したり、周辺の田んぼへの生きものの供給場所となったりします。ビオトープはトキの餌となる生きものが増える利点もありますが、その分ウシガエルなどの外来種が増えてしまいます。また、ビオトープの管理が大変なことがデメリットです。どの農法にもデメリットはありますが、トキや佐渡の生きもののためにこのような農法を行っています。

僕たちはトキについて学んできたことで、トキだけでなく人、生きもの、植物を全て含めた環境を守ること、作ることが大切だと考えています。佐渡の環境は世界一だと言えるような状況を作っていきたいです。

これで行谷小学校の発表を終わります。ありがとうございました。

※行谷小学校６年生は13名の在籍ですが、当日は都合により12名の参加となっております。

テーマ

トキの餌場と生きもの育む　地域の取組

トキの野生復帰の絶対条件である餌場環境整備について発表します。

発表者
トキの水辺づくり協議会
会長　板垣　徹 氏

「潟上水辺の会」でビオトープ整備や子どもたちのビオトープづくり、ホタル保護など活動。また、河川の自然再生事業を契機とした「トキの水辺づくり協議会」や、官・民・研究者がトキ野生復帰を協議する「人・トキの共生の島づくり協議会」の課題に取り組む。

ごめんください。トキの水辺づくり協議会の板垣と申します。

私からは、トキの餌場作りの取組について、概略的に申し上げて、そして具体的な地域の取組として、生椿の実践を高野毅さんからお話ししていただきます。

佐渡のGIAHSは、何度も確認をされていますように「トキと共生する佐渡の里山」トキと共生する佐渡の農業と人々の暮らしが中心のテーマであります。今佐渡ではあちこちでトキが羽ばたき、そしてトキとの共生を大事にする人々の心の優しさ、さらに数多くのトキが、野生で生きていける豊かな自然環境があります。朱鷺と暮らす郷づくり認証米の取組や、生物多様性を大事にする生きもの調査などの活動が、地域で広がってきました。その中で私からは、地域での餌場作り、トキの生息環境整備について、報告をいたします。

今佐渡の平野部ではトキのいる風景が当たり前に見られるようになっています。農作業の傍らにトキが佇んでいたり、子ども達の通学路の脇で餌を探したりしています。子ども達も「あ、トキがいる」と、さりげなくちらっと見ながら、そのまま歩いていくわけであります。こんな光景が見られるようになるまでには、長い間のいろんな人たちの取組がありました。

放鳥する前には、トキが当たり前にその辺で餌をついばんでいるようになる、というのは夢でありました。まさに夢のような話と当時は思っていたものであります。果たして自然界の中でトキたちが生存を続け、繁殖し定着することができるのか、みんな心配をしていたわけであります。私たちにとって幸運だったのは、トキが美しい大型の鳥であったことです。美しいから野生絶滅にまで追い込まれてしまったのではありますが、空を飛ぶその美しさは人々を魅了し、すっかりトキの虜にしてしまう力を持っています。

トキを放鳥する前と放鳥した後では、佐渡の人々の意識は大きく変わりました。野生復帰に冷ややかだった人も、自分の田んぼに来たトキを見た途端に、うちの田んぼにトキが来たんだと自慢そうに語ります。トキの持つ不思議な力だと思いました。

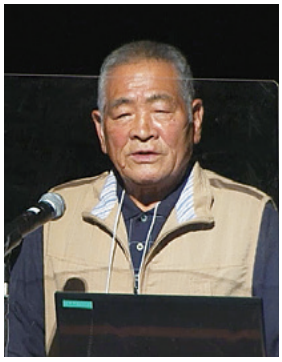
また、佐渡農業の基幹は水田稲作です。平野部から山間部にかけて水田が広がっています。トキはその水田を生息基盤としています。水田に色々な生きものが豊かに生息していることが、トキが生息し繁殖していくための基礎条件だったのです。湿田状態の田んぼは大事な餌場です。また稲刈りが終わった後の刈田は、彼らにとっては食物の宝庫。今の時期は刈り終わった広い田んぼで、トキ達は餌の食べ放題であります。400羽を超えるトキ達の命を支えてきたのは、生物多様性を大事にしてきた佐渡の水田農業システムの広がりがあったからに他なりません。ただ夏場から稲刈りまでは稲の背が高くなり、トキ達は田んぼに入れません。また、耕作者が減少し、耕作されなくなった水田が増えています。これをできるだけ放置しないで維持管理していくことが必要です。

そこで、餌場としてのビオトープの整備と維持管理が重要になります。湿原状態になっているビオトープ、草原となっているビオトープなど、多様な環境の餌場が作られています。ビオトープ整備は、トキたちが暮らせる環境を作り、守っていこうという、人々の想いの現れなのです。

また、ビオトープ整備には、幾つかの波及効果や活用方法があります。ビオトープ整備の多くは、地域の共同作業として行われています。ビオトープ作りが地域づくりにもなるのです。私は新穂潟上という地域で、潟上水辺の会というボランティア団体で活動していますが、ビオトープ作り、修学旅行の体験学習受け入れ、蛍の保護活動と蛍祭りの開催など、地域活性化の持続的な取組に繋げることができました。ビオトープは学生や企業のボランティア受け入れの場となります。ビオトープ維持の主な作業は草刈りです。都会から来た学生や会社員の皆さんに、草刈機の安全な使用方法を指導し、最初はマンツーマンで見守りながらやってもらいます。こうした取組は、ボランティアツーリズム、GIAHSツーリズム、そして佐渡全体のエコツーリズムへとつながっていく可能性があります。ここ２年間はコロナ禍で足踏みしていますが、終息後を視野に、今後再度本腰を入れて展開をしていく必要があると思っています。条件が不利な水田は耕作されず、放棄されると雑草や木が生え、足を踏み入れることすらできなくなってしまいます。本来は稲作の再開が水田を守る為には必要なのですが、それはなかなか難しいので、せめてビオトープにして維持管理することを考えています。佐渡市のトキビオトープ整備事業や、新潟県トキ保護募金の助成を活用して、何とか水田を利用するとともに、トキの生息環境を守ることが必要だと思っています。

この画面に映っている場所は、天王川という川に合流する小さな支流が流れている、薄倉沢という谷間の水田地帯です。この一帯で耕作が行われなくなってしまいました。その全体をトキの餌場として整備していこう、ということで取り組んでいます。ここは耕作している人がいないために人があまり来ません。そして近くにトキのねぐらの林もある為に、トキたちにとっては楽園となっています。

ビオトープは生物多様性の保全に重要な役割を担っています。特に湿地性の生きものや水生生物の生息場所となり、用排水の結び付きにより、水田の生物多様性にも寄与しています。そして修学旅行の体験学習として、また総合的な学習の時間を使って、未来を担う子ども達の環境学習の場としても活用されています。こうした取組を行っている活動団体が佐渡にはたくさんあります。それらの民間団体と国・県・市の行政の皆さん、そして新潟大学などの研究者の皆さんが集まって協議する場が、人・トキの共生の島づくり協議会です。この協議会はオール佐渡、オールトキの合意形成の場として位置付けられています。また、新潟県が行う天王川の自然再生事業をきっかけとして結成された、トキの水辺作り協議会は、サントリー世界愛鳥基金の助成を受けながら、共同して行う一斉作業や、各団体の活動支援などに取り組んでいます。その構成団体は、私が所属している地域団体である「潟上水辺の会」、最も早くからトキの生息環境に取り組んできた「NPO法人トキどき応援団」、環境教育を中心に取り組んでいる「一般社団法人佐渡生きもの語り研究所」、岩首昇竜棚田の素晴らしい景観の保全と地域活性化に取り組んでいる「岩首談義所」、桃源郷生椿地区の景観と環境の保全に取り組んでいる「生椿の自然を守る会」、地域の建設業者さんのグループで重機を使った環境整備支援に取り組む「新穂エコロジーチーム」の７団体となっています。その中で、昨年９月と今年６月の２度にわたって放鳥が行われた、生椿地区での活動について、生椿の自然を守る会の高野さんにお話をしていただきます。昨年９月の放鳥です。降りしきる雨の中で行われました。真ん中辺で菅笠をかぶっているのが高野さんです。それでは高野さんよろしくお願いします。



テーマ

トキの餌場と生きもの育む　地域の取組

トキの野生復帰の絶対条件である餌場環境整備について発表します。

発表者
生椿の自然を守る会
代表　高野　毅 氏

かつて野生のトキの棲息地だった生椿で生まれ育つ。鳥獣保護員として、またトキ保護センターの飼育員としてトキの保護・飼育に当たった亡父の遺志を継ぎ、生椿の棚田を守りビオトープを整備し、子どもたちの体験学習を受け入れながら、トキが再びこの地を舞う時のために活動。

変わりまして、生椿の自然を守る会の高野毅でございます。よろしくお願いいたします。

私の方から、少し話をかいつまんでしたいと思うんですが、現在出ている映像は、小佐渡東部、国見山周辺に群生する雪椿でございます。生椿（はえつばき）っていう地名のおこりには、２つ程由来するものでございまして、一方古文書の記載では、灰椿（へいつばき）と書いてあります。これは恐らく開墾時に、伐採した雑木や雪椿の木も焼却した残りの灰からの説。もう１つは、雪に埋もれて耐え忍んで這うという椿の一面。そういうところから取られたんだろうと思うんです。花のきれいな雪椿の方がはるかにいいということで、椿が生い茂るから生椿という地名になったと言われています。

これはトキの故郷生椿という私の看板でございます。生椿というところは、佐渡市新穂地区の行政センターから約10キロで、二里半と言われています。両津から15キロ、それから赤玉から８キロ、ちょうど小佐渡東部の、本当に山の中に先程申しましたように小佐渡東部に開けた、桃源の郷、生椿があるわけであります。

これは生椿の全景じゃなくて、私の田んぼのところを撮ったものでございます。それで古文書によりますと、1670年頃４人の儀、そこに入って居を構えるとありますし、また数年後にですね、６人の儀とあり、これは大野代官所の、訴状の中に出てくる文章であります。

耕作面積は23.1aということで、これは私らの水田の水張面積です。元々の面積は、国調では約１町歩ぐらいあるんですが、畦畔が多いということで水張面積は半分以下になっております。

田んぼの横に、繋がってビオトープがございまして、連続しており多様な生物にとって、好適地と言われております。昭和56年のトキ全鳥保護までは、先程出ましたように餌場として機能を果たしておりました。

これは私の実家でございまして、築180年の歴史を醸す山の中の一軒家という風に見ておったんです。これまでに多くの人たち、地域に住んでいる住人であったり家族を見送りしたりですね、最後の一家になっておりました。私の家も、平成元年に麓の方に移住をして、多くの人たちを送り出し、その後、最後の一軒となったということでございます。

約５～６年ぐらい放置をしたんですが、元々は家が大事だったもんですが私が雪山を登って除雪をしながら家を守ってたんですが、なかなかそれもできずに、平成８年に雪害によって、くずや、母屋からですね、雪が凍って茅ごと全て抜けて滑り落ちるもんですから大きな穴が開きます。そんなことから中に雨漏りがして、崩壊したということでございます。この崩壊も、その後平成13年11月、ボランティアの皆さんの手を借りまして、約60名ぐらい。１日で全ての損壊した廃材の処分と清掃が行われました。

改修工事が行われました、現状の建物なんですが、平成19年の夏、企業や支援者の協力によりまして、鴨居建ちという大きなくずやの中の鴨居の部分が残ってたもんですから、それを１つ生かして改修工事し完了したということであります。この施設は、私も作業所として使っておりますし、体験学習やボランティアの活動拠点としても使っております。また一方、緊急避難小屋として使ってほしいというこ

とで開放してますし、憩いの場としても利用していただいております。

これは先程出ました、行谷小学校での、父親とカズちゃんだと思うんですが、その時の様子です。カズちゃんは非常に好奇心が強く、父が入っていくと、遊びに寄ってきたりして餌をねだったそうであります。

これは父のお願い事で、子どもたち集落ぐるみのトキの支援ということで古くから子どもたちも一緒になって、色んな生物あるいはミミズやカエルやドジョウやそういったものを捕って、父のところに持ち寄ってそこで集めたものを、少しずつ田んぼに撒いてあげるということで協力をいただいておりました。特に子どもたちにとっては、父からご褒美がもらえるもんですから、喜んで餌撒きをしていたということです。特にこの顔を見てみますと、たくさん食べてほしいというような願いも込めながら、笑顔で餌を水面に撒いているという一面です。

これは昭和38年の出来事なんですが、皆さんもご承知のように、38豪雪と言われた大雪の時でありました。それで父はトキの餌場として、除雪をしながら田んぼの地面を出して、地面を約20cmぐらい掘って、掘った中に、ドジョウやカエルなどを中に伏せて、トキが他の動物に取られないように土の中に埋める作業が餌撒きという表現で報道されてるんですけども、実際には土の中に埋めていったわけです。そういった応援をしてあげたいという思いで除雪に取り組んだのですが、１時間に１mも積もる、掘っても掘っても除雪ができないぐらいに掘ったと言われておりました。

これは雪解けをした生椿の風景です。これはちょうど私の田んぼの横にあるところなんですが、元々は池田と言いまして腰まで浸かるような軟弱な田んぼでした。片隅にミズバショウが植わっていたもんですから、父と２人でどうせ深い田んぼだから、少しでもミズバショウを増やして植えて景観を保とうというようなことで取り組んできた結果です。そして積雪から目覚めた生椿の早春ということで見てもらっていいと思うんですが、ミズバショウの花が咲

いて、白と緑の調和が野に映えるという景観でありますし、また秋にはエゾリンドウという特別紫の強いきれいな花が咲くんですが、四季折々そういった花が訪れる人を魅了するっていうことで、評判になっておりまして、多くの人たちが訪れております。

そしてこれはいよいよ田植えの時期なんですが、これは畔切が終わって水を蓄えて、これから耕耘に入る作業なんです。

この頃、非常にヤマアカガエルの合唱が始まるんです。合唱というのは恋の季節なんですね。カエルにとっては恋の季節で、産卵も水面に少し残っているんですが、その中に輝きがあるもんです。それでたくさん産んであります。そしてまもなくしてモリアオガエルの産卵が始まる。そうすると、そこではカラスやタヌキ、トンビの活動も忙しくなってきまして、全ての生きものが繁殖期を迎えて忙しい日々を迎える。私よりもそういった多くの生物たちの憩いの場であり、あるいはその生産の場所でもあるようであります。

これはちょうど私が田植えを終わってその後、今度は私の出番なっちゃと言って張り切る母の姿なんです。83歳で、昔とった杵柄と言ってですね、お前に任せるより俺の方が早いんだと。しかも上手だとこう言って、補植をどんどん進めていた映像であります。

これが私の生椿の地域で、特にビオトープとか、そういったものをやる圃場です。里山の裾に広がるビオトープでありまして、非常に生物多様性の適地でございます。ここでは小中学校、高校、大学あるいは企業、ボランティアを受け入れて、ビオトープや里山整備などの体験学習を受け入れております。広くここを使いながら、自然に楽しみながら色んな生物と土に触れ、そして素足で田んぼに入っていただいて、土を楽しんでもらうっていう、ゆとりのある楽しい時間を過ごしてもらおうとこんな風に思ってます。このことによって、自然の醸すあるいはその自然の中に生きる生きものと触れ合うことによっ

て、自分の心を豊かにしていくということは、生活の中のリズムの向上にいいのかなという風に思っています。

大学のサークル活動で、一週間ぐらい泊まりに来て、生椿で一緒になって作業をしたり、ここで自然との生活を営むという、一面は協力隊でもあり、一面は自分たちの生活をするための場であります。これは早稲田大学のサークルでありまして、環境ロドリゲスっていうことでね、佐渡には50人ぐらい来ておるんですが、私のところには10人ぐらい来て、一緒になって活動して大助かりしております。特に作業中はキャーキャー言いながらも、そのことが近くにある山にこう木霊する、歓声が吸い込まれていくというような、粋な山の中の生活姿でございます。

作業が終わりますと、今度は楽しく夕食を食べようということで、私のところで夜泊まりしながら夕食作りをやっておりますし、器は全て竹を切って食事をする。そしてご飯は、竹を割ってその中にお米を入れて水を入れて、温めてご飯にするという竹ご飯作りもやりました。そんなことを含めて学生たちのお手伝いに一緒になって、生活を援助していきました。活動後は、やっぱり彼らも熱心にミーティングをして、それぞれの活動報告あるいは資料作りもしておりました。夜は、10時頃になりますと、先程放鳥しましたトキの高台にシートを敷いて夜空を眺めるっていうようなシーンもありまして、非常に楽しんでおりました。また次の日は、生椿の上人の史跡を探索しようということで、早く寝てもらいましたし、ゆっくり休んでもらってね、身体をいとしんでもらいました。

そしてこれが生椿の３上人というところなんですが、上人を訪ねて訪問しながら史跡の下にある、西方院滝から周辺の探検をして、供物を備え、そして一緒になって供養したところでございます。また供養するとともに、ここで昼食会を開いて、上人さんたちと仲良く食事を堪能したということでございます。また生椿の信仰者は、非常に霊験あらたかでありまして、生椿との住人とは密接な関係も続いておりましたし、また広くは商人の地域であります。福井県辺りからも、来ていただいて、信者もたくさんいたと、こんな風に古文書には書いてございます。

これは先ほど３上人が身を極めて修行した場所の元々私たちは商人滝と言っていますが、本当の名前は西方院滝とこう読んでいるようであります。滝のうしろの窪みのところが昔は６畳ぐらいのひさしが出ていまして、６畳ぐらいの洞窟があってその中で生活もしたと言われてるんですが、明治30年の佐渡の大水害によって、崩落をしたと言われております。住人と一緒になって探索をした中で、六体ぐらい大きな石仏があって、新穂の資料館に預けてございます。その後、ここで滝に打たれる青年も見ましたし、海水パンツも持ってきて、身を清めた者もおりました。

これは先程のビオトープの整備場所なのですが、これは野口健さん、アスリートですね。野口健さんが自然環境学校というものを開いて、生椿にて開校し、地域貢献活動が始まった状況でございました。生徒は大学生総勢約40名ぐらいの若者集団でございまして、先生自ら先頭に立って活発な行動力で広範囲な面積を整備していただきました。この活動は、５年間継続して実施されましたし、毎回恒例の泥んこ相撲で締めくくりました。全員が全部泥んこになります。女性も男性もでした。そんな時があって和やかに過ごした状況でございました。

これは平成20年、第28回全国豊かな海づくり大会が新潟で開催されました。その時に５会場で取水式がありました。その取水式のうちの１つの会場は生椿で、一つは岩船と佐渡それから糸魚川と中越と下越、この５会場でございました。この時も多くの子どもたちが訪れて、手に持っているのは取水の容器です。真ん中に20リットルぐらいの大きな容器があるんですが、そこに集めて、開催の会場に移動するということでございました。このあと子どもたちが一緒になって、なにか記念を残そうということで、写生大会が行われました。時間をとりながら、全員が優秀賞ということで、学童用品などを配って喜ばれた１日でありました。

これは、子どもたちと一緒になって生椿で生きもの調査あるいは生物との触れ合いを楽しんでいる１コマでございます。子どもたちが非常に和やかに、笑顔を出しながら一緒になって活動してくれております。こういったことで、私はできるもんであればこういった大きな仕組みの中の一面には、子どもたちと豊かな自然に触れ合ってそういった環境をこの後もずっと残していきたいなと、興味を持つ子ども達に私は手を差し伸べていきたいと、こんな風にこ

れからも自分なりに活動しながら取り組んでいきたいと思っております。

トキと共生する佐渡、そして、その山の中で育んでこられた生活も含めて、そういったものを多くの人たちに伝えていきたいと思って、里山の中の生椿というところから皆さんにお知らせをいたしました。

本日はどうも大変ありがとうございました。

テーマ

日本の持続可能な農業とは
～佐渡GIAHSの農村文化から考える～

講師
公益財団法人 地球環境戦略研究機関 理事長
世界農業遺産等専門家会議 委員長
武内　和彦 氏

地球環境戦略研究機関理事長、東京大学未来ビジョン研究センター特任教授。専門はサステイナビリティ学。
日本政府と国連大が推進するSATOYAMAイニシアティブや国連食糧農業機関(FAO)が認定する世界農業遺産(GIAHS)にも深く関与している。

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました武内でございます。

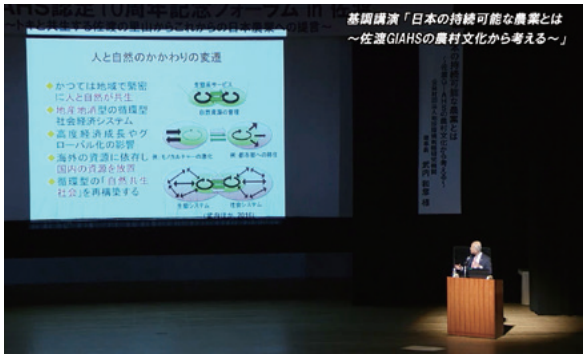
佐渡がGIAHSに認定されて10周年ということで、大変喜ばしいことだと思います。心よりお祝い申し上げたいと思います。

私はその10年前の認定に先立つ、2009年にこの佐渡を訪問いたしまして、当時の髙野初代佐渡市長と色々と話をした中で、世界農業遺産という仕組みとしてあるんだけれども、是非佐渡が候補地として認められるようにしてみたらいいんではないか、ということを申し上げました。髙野市長から賛同いただきまして、当時、私は国連大学に副学長としておりましたものですから、国連大学の職員に協力をしてもらって、英語で申請書を取りまとめたわけでございます。

その後2010年に、生物多様性条約の第10回締約国会議が名古屋で開催されまして、その折に石川県の能登地域、それから佐渡の認定に向けたいろんな取組が本格化したわけでございます。

当時FAOでGIAHSを担当しておりました、パルビス・クーハフカンというイランの出身の幹部の方がおられまして、彼にも直接、石川県と佐渡市を、ということで、お願いをしたことがございました。

そうした過程を経て、10年前にGIAHSの日本初の認定地域として、２つの地域のうちの１つ、この佐渡が認定されました。以来私も折に触れてこの佐渡にお邪魔しておりまして、農業遺産のみならず、色んな街づくり・地域づくりの取組に協力をさせていただいております。今日はGIAHSを通して見た日本の持続可能な農業のあり方ということについて、お話をさせていただきたいと思います。



まず最初のスライドです。これは、当時国連大学で、日本の里山と里海を、世界の生態系評価という枠組みを使いながらどんな風に評価できるだろうか、ということを研究した際に使いました。

そもそも里山里海を、英語でどういうふうにして翻訳したらいいのかという議論から始まりました。当時、色んなところと相談をしまして、イギリスにアッテンボローというドキュメンタリー作家がおられまして、日本の滋賀の里山をドキュメンタリーに仕立て上げ、そしてBBC放送で放映した時に、彼はそのまんま里山という風に表現しました。で、私も「あ、そうか」と。じゃあ、里山という言葉を世界に広げようと。そして、合わせて里海という言葉も世界に広げていくことができればいいのではないかと活動してきました。10数年たちまして、今私が海外に訪問すると、「ここはオーストリーの里山です」とか、「ここはスウェーデンの里山です」とか、向こうの方から里山って言葉を言っていただけるような状況になっており、大変嬉しく思っております。

この里山里海の要点は何かというと、自然だけではなくて、また人間だけではなくて、人間と自然がお互いに助け合いながら一つの景観というものを形成していく。英語ではランドスケープと言いますけれども、そういうものであります。

つまり、自然はどうしても必要なものですけれども、同時にそこに人の営みというものがあるということが、非常に大事な事柄になってまいります。里山や里海の関係は、時代とともに大きく変化をしています。

続いて、高度経済成長以前の社会、それと今の社

会、そしてこれからのあるべき人と自然の関係について説明をします。

昔は非常に狭い地域の中で、人と自然がお互いに助け合って、まさに里山里海が、自立・循環・共生的な仕組みとして存在していた。ところがそれが、高度経済成長あるいは経済のグローバル化、都市化、こういう問題が顕著になるようになって、自然の仕組みと人間の仕組みが分離されてしまったということです。

その結果、日本の国内では里山や里海が荒廃するという問題が生じ、他方で海外から資源を大量に輸入するために、海外の自然資源の枯渇という問題を引き起こす。これが本当に持続可能な社会なのかということを、今我々は問われているわけです。

そして私達は、もう一度自然の仕組みと人間の仕組みをうまく融合させた、新しい時代に即した自然共生社会を構築していく必要があるのではないかと考えているわけです。

しかし私達は、もはや以前のような閉鎖的な社会の中に生きているわけではありませんので、やはり世界と色んな意味で繋がっている必要がある。しかし、例えば食料だとか、エネルギーだとかはできるだけ地産地消型でやっていけるような、そういう仕組みにしていけばいいのではないかと思っています。

これを佐渡の例として考えてみます。佐渡はもちろんお米が大変有名ですし、それ以外の農産物も豊かです。しかしかつては米余りで非常に困っているという状況もありました。そして農産物価格が低迷するという問題もありました。この状況を変えたのが、生きものを育む農法。それによって付けられた付加価値というものですけれども、しかし、まだ佐渡にはさまざまな問題が残っています。

例えば、佐渡の森林はほとんど資源として利用されていません。森林を資源として利用されていないということは、適正な人の管理がなされなくなるという意味で、里山環境にとっては非常に大きな問題だということが言えます。

それからエネルギーの問題。大量の化石燃料を島に持ち込んで、電力を皆さんに供給しているという状況があります。有り余る自然資源、バイオマス、風力、それからソーラーの開発可能性、こういう風なものを考えると、今の化石燃料を島外から運んできて、それに依存する社会でいいのかという、問題は、やはり考えていかなければいけないことだと思っております。今、私たちは自然共生社会をテーマとして多面的な観点で、あるべき社会像を検討しております。

さて、自己紹介の中でも触れましたように、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の際に日本

の環境省の支援を得まして、国連大学が中心になって立ち上げた新しい世界的な取組、これが里山イニシアティブというものです。

これは、先程申し上げたように、里山里海に見る人と自然の関係をもう１回再評価してみようというものです。難しい言葉ですけれども、人と自然が農業生産、あるいは農林水産業というものを通して作り上げたようなランドスケープ、これが里山ですね。それからシースケープ。これは里海ですね。こういうものを是非、世界の人達と一緒に考えていこうではないかということをCOP10の際に提起した訳です。色んな方に参加をいただいて、今日に至っております。

生物多様性条約は２年に１度締約国会議が開催されるので、ちょうどこの時から10年、つまり今年そして来年、コロナの影響で少し遅れ気味になっていますが、COP15というのが、中国の一番南の昆明（クンミン）という町で開催される予定です。そしてその時には、今の生物多様性の目標を引き継ぐ新しい目標が定められるということになっております。

これは後ほどお話をさせていただきますが、非常に大きな、我々にとって重要な取組の開始というのが、このCOP10で行われたということであります。

里山イニシアティブは何をするかというと、まず多様な生態系サービスと価値の確保のための知識の結集、それから伝統的な知識、そして近代的な知識、これをうまく融合させるような仕組み作りです。最近で言うと、ITのようなものを使って、伝統的な知識を近代的に展開していけるような形にすることです。

それからもう一つ非常に大事なことは、新しい共同管理のあり方。これはコモンズという言葉でよく表現されますけれども、古いコモンズというのは、ある地域で、ある生業を営む人たちが、グループになってその地域を支えるそのための仕組みですね。これが伝統的なコモンズですけれども、私たちがここで提案したのは新しいコモンズです。色んなステークホルダーの人が参加しながら地域全体を底上げしていくような取組、これを新たなコモンズと称

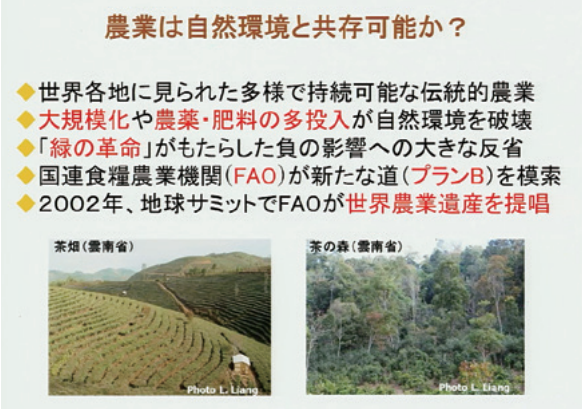
して推奨しているというイニシアティブが現在も続いております。中井環境事務次官のご尽力のおかげで、当初は10年間の取組だったんですけれども、これから先も続けていこうっていうことで、今その準備を始めているところであります。

一方、世界農業遺産、これはFAOが考えた１つの新しい取組ということになります。

FAOでは、大規模化農業、農薬の多投入、これが自然環境にもたらす負の影響を、無視できなくなってきたわけですね。開発途上国ではプランテーションというようなやり方で、大規模化して単一作物を広大に栽培する。そしてそこに肥料を投入して生産性を高めていく。これは一時的には収量がうんと増えるんですけれども、環境を破壊するために、結果的には土地荒廃が起こって生産性が下がってしまって不毛地化するということが問題になったんですね。そうではなくて、もう１つ別の道を考えたらどうかと。つまり、伝統的な農法の中にそれを近代化させるようなヒントが潜んでいて、それを近代化させることによって、現代社会の中でも生産性が高く、そして付加価値も高く、さらには環境に対して非常に親和性の高いような農業が展開できるのではないかということで、2002年の地球サミットで、世界農業遺産GIAHSというものを提唱したわけであります。

これを最初に提唱したのは先程申し上げたパルビス・クーハフカンが中心となっていました。当初はGEF地球環境ファシリティという、途上国のさまざまな、開発援助・環境支援をサポートする組織の支援を受けておりましたので、開発途上国だけという限定が付いていたんです。そのお金は先進国には使えませんよと。

しかし私は、お金の問題じゃなくて、世界農業遺産を認定することによって、先進国の問題を抱えた農業も、そこに新しい希望の光が見えてくる可能性があるということを申し上げて、それが先進国に広がり、今ではヨーロッパでもGIAHSが認定されつつあるという状況になっているわけです。



ちなみにこの中国の雲南省。左側がいわゆるプランテーションの茶畑、右側が森林を残したままそこに茶の木を植えて、お茶の葉っぱを収穫するというやり方です。

環境保全という観点から言うと、全く違って右側の方がいい訳です。ただしこれは非常に効率性が悪いということで、色んなことをこの林の中でやって、トータルに収益を上げていくという。ですから、この林の中では、家畜の放牧も行っております。

家畜が放牧されることによって、林の森林の密度が適正に管理されるという組み合わせで、一種の人工生態系として維持していることで、最初、中国政府は、左側のようなプランテーションを一生懸命推進していました。今、逆に左のようなプランテーションを、右のようなお茶の森に変えるという取組に転換をしている状況になっております。

まとめてみますと、GIAHSとは、元々開発途上国での認定制度でした。しかし2011年、先進国として初めて能登と佐渡が認定され、現代はヨーロッパも含め世界各地で認定が進んでいます。そして、私が特に強調したいのは、よくユネスコの世界遺産との比較でGIAHSを語られることが多いわけですけれども、どちらかというと世界文化遺産は、過去のものをそのまま凍結的に保存していく、という考え方が強いのに対して、GIAHSの方は、未来社会に継承していくための仕組みだと言うことです。

非常に象徴的なことがございまして、フィリピンのイフガオという棚田があります。これは世界文化遺産にも世界農業遺産にも指定されているところなんですね。どういうことが違うかっていうと、世界文化遺産だと農道は絶対広げちゃいけないというんです。これは狭い農道だったわけですから。世界農業遺産というのはそういう立場ではなくて、伝統的な骨格は残しつつも、現代社会の要請に応じて、生きたものとして改良していくことを認める。こういう観点が非常に大きく違うということでありまして、そういう点をどういう風にして、今後考えていくかというのは、難しい調整の問題になっていくだろうと私は思っております。

特にヨーロッパに行きますと、世界文化遺産と

世界農業遺産の競合が生じるわけです。例えば、いわゆる葡萄栽培地帯のようなところですね。伝統的な葡萄栽培農法と、それからそれをどうやって近代的な農業として維持していくのかということの間には、さまざまに調整しなければいけない事柄があるわけで、それぞれの地域に即して、地域の人々と一緒に話をしながら、その問題解決を図っていくということが、重要ではないかという風に考えられるわけです。

日本でも、みなべ・田辺の梅システム。これも、近代的な仕組みの中で、収穫のやり方が今までとは少し違う近代的なやり方になってるんですけれども、残念ながらそれが必ずしも景観との調和がとれているとは言えないということで、地元の方々に、どうやったらうまく伝統的な仕組みと近代的な工夫を擦り合わせることができるかということを、検討していただいているところであります。

さて今は2021年。これからあと10年で2030年ということになります。この10年というのは、いわゆる地球環境の持続性を維持する方向に舵が切れるのか、それともこのまま様々な問題を解決することができず、多くの問題が生じてくるのかという、どちらの方向に舵を切るかということを決する、決定的な10年だと言われています。英語ではDecisive decadeという言い方をしているわけです。

これは特に温暖化ですね。昨日、中井事務次官から話がありましたが、2050年までのカーボンネットゼロを目指さないと、地球気温の上昇を産業革命以降1.5℃の範囲に抑えることができないと。1.5℃に抑えることができれば、さまざまな自然災害が生じたり、温暖化の悪影響が生じることはある程度は覚悟しなければいけないのですけれども、本当に破滅的な状況になるということは避けることができる。これがIPCCという国際組織が取りまとめた1.5℃報告書というものなんですね。

この1.5℃に収めるためには、この10年で、日本ではCO_2の排出をほぼ半分近くまで減らさないと、そこに到達できないという状況です。たった10年でそんなことができるのか、ということを疑問に思う方もおられるかもしれませんが、逆に言うと、この10年でそれができなければ、1.5℃目標は達成できないということですから、非常に破滅的な未来に残念ながら向かっていかざるを得ないということを意味しているわけです。そういう意味で決定的な10年という意味です。

またですね、ここ数年、コロナ禍ということで、世界が大きな打撃を受けています。コロナからの復興、これをコロナ前の社会にそのまま戻すのか、それともこれだけ人類社会が大きな深刻な被害を受けたことを、私たちのこれからの社会づくりに生かしていくための大きな転機だという風に捉えるのか。コロナ後の社会は、気候変動の問題なんかも含めた、新しい社会像に向けていくための投資をどんどんどんどんとしていくような、そういう社会にしていくべきではないかという風潮が世界で強まっています。

とりわけヨーロッパですね。特に、最近ではドイツなんかが、温暖化影響を受けた大規模な自然災害によって、深刻な危機に陥っている。こういうことから、いかにグリーンな回復を図っていくかっていうことが真剣に議論されているわけで、我が国も昨年から今年にかけて、そうした歩みをした方がいいという風に舵を切っているわけであります。菅政権は、この面では非常に頑張って良い成果を上げたという風に思っています。

そういう意味で、日本もこれからの10年、決定的な10年にグリーンリカバリーの精神でもって取り組んでいく。そして最終的には人と自然が共生する。豊かな未来を実現するために貢献していくという方向性になっていくのではないかと、あるいはなっていくべきなのではないかと。その為には色んな持続可能な開発目標についても、それぞれ検討していく必要があるという風に思っております。

今日はこの持続可能な開発目標を細かく説明していくと時間が足りませんので、色んな側面で検討するっていうことが必要だということを申し上げたいと思います。１つには環境、それから経済、それから社会、こういうものの総合的な向上を目指すということが、SDGsにおいては求められているということは、是非ご記憶いただければと思います。

2050年に、１つは脱炭素の社会。もう１つは自然共生社会。これは生物多様性の観点ですね。パリ協定の実施、ネットゼロ。

生物多様性条約の第15回締約国会議COP15昆明、ここで採択される予定のグローバルな生物多様性の新しいフレームワークがあります。

今までのフレームワークは愛知県名古屋市で開催

されたCOP10で決められたので、愛知目標という名称がついています。恐らく新しい目標は採択されれば、昆明目標という風な名称になるのではないかと思いますけれども、ここでは自然の減少を食い止めるどころか、むしろ積極的に自然を回復させると。２割ぐらいのネットゲイン、自然豊かな地域をむしろ２割ぐらい増やしていくと、2050年までに。こういうことを提唱しているわけです。

こういうことを行う為には、技術のイノベーションは大事ですけれども、まだない技術に頼っているのでは10年では間に合わない。今ある技術をどうやって組み立てて、より有効な技術に仕立て上げていくのか、これは合わせ技の技術とでも言ったらいいと思いますけれども、そういうものが必要です。それから社会システムも変革するという社会のあり方。そしてさらにはライフスタイルも変えなきゃいけないということで、私が理事長をやっております IGESでは、ヨーロッパの研究機関と共同で、1.5℃ライフスタイルというものを提案しております。1.5℃ライフスタイルというのは、１．５℃に向かっていけるような人々の住まい方、移動の仕方、そして食生活、あらゆるものについて、どういう風にして変えていけばいいかということを書いております。

こう色々見てみると、日本は残念ながら居住ということに関しては、決してヨーロッパのようないわゆるエネルギー効率の高いようなものにはなっていません。他方、食生活を見ると、日本人の食生活はヨーロッパの人の食生活に比べて、遥かにCO_2を出さない食生活になっているという風なことが明らかになっております。そういう意味でのライフスタイルイノベーション。そしてそれを支えていく、さまざまな主体の関与。こういうものが重要でありますけれども、私は特に若者の役割というのが非常に重要になるのではないかという風に思っておりまして、今色んな国際会議でもユースの参画っていうのを非常に公式に認めるようになってきました。

環境省でも審議会って言うと、大体私のようなちょっと年取った人が偉そうな顔をしている訳ですけれども、それじゃまずいということで、ユースを審議の場に是非お呼びしてご意見をいただきたいという取組が進んでおります。そういう風にして、社会がだんだんと変わってきていると言うことも申し上げておきたいと思います。

世界農業遺産とSDGs、環境と社会と経済の統合的向上。こういうものに関して見てみますと、世界農業遺産は、SDGsのさまざまな側面に大きく貢献するというのが、私達が明らかにしたことであります。こういうことで、持続可能な開発目標の達成、脱炭素、自然共生にGIAHSを活用していくような方向に議論を進めていただければと思います。

それから今、国連では色んな取組を進めています。国連家族農業の10年。企業的な経営は非常に効率性が高く、家族農業はあまり農業政策の中では重視されていないということがあったわけですが、実は特にアジアなんか見てみますと、家族農業がほとんどで主流なんですね。ですから家族農業を大事にし、それが生きていけるような仕組み作りをきちっとやっていこうじゃないかということを、国連が言い出しているわけです。特にFAOが中心になってこれを先導しております。

それからもう１つ、国連生態系回復の10年。これも今や病んだ地球をやっぱり回復しなければいけないということで国連環境計画の本部はナイロビにあります。それとFAO。これが主導して議論を取りまとめております。

それからユネスコに付属したユネスコ政府間海洋学委員会、IOCというのがあるのですけれども、これが主導しているのが持続可能な開発のための国連海洋科学の10年というものです。これは、陸の生態系というのはもちろんわからないことはいっぱいあるわけですが、随分いろんなことが明らかになってきてる。それに対して海の生態系っていうのは十分明らかになってないことがさまざまにあるということで、これを明らかにするっていうことは、今後の海洋の酸性化の問題とか、海洋の温暖化の問題とか、あるいは海洋資源の持続的な利用の問題とか、こういうことを考える上で欠かすことができないということで、こういうことを推奨しようではないかという取組であります。

こういう風なことを考える際に、一番念頭に置いていかなきゃいけないのは、自然資本という私たちに与えられた自然を、いわば人間の利用可能な資本として活用していくことができるような健全性の確保。これは持続可能な開発目標達成の非常に大きな基礎となるのではないかということであります。

最近のFAOの、GIAHSに関する動向としては、色んな取組がございます。最近はコロナで実際の会

議がなかなかできにくいものですから、オンラインでの会合。これを繰り返し行っております。国連生物多様性、生態系回復の10年に貢献するような世界農業遺産と生態系回復っていうようなテーマでもいろんな取組が議論されておりますけれども、そういう中で日本の認定地域からも事例報告がされたと言うことがございました。

家族農業に関する国際シンポジウムも開催されまして、ここでは高千穂郷・椎葉山、それからにし阿波、これも日本の世界農業遺産地域でありますけれども、こういうところが紹介されたということがございます。

いずれにしても生態系回復・気候変動対策など地球規模の課題や家族農業の発展に貢献するために、今後ますます連携を進めていくということが重要です。

認定地域間の連携も進んでおります。残念ながらコロナ禍で延期を続けておりますけれども、次回は2022年に中国浙江省の慶元において開催をするという予定になっておりまして、今のところ2023年には岐阜県。ここは長良川清流の鮎が農業遺産の認定地域ですけれども、ここで開催をするということが予定されております。

ちなみにFAOの農業の定義は、いわゆる狭い意味での農業ではなくて、農業・林業・水産業・牧畜業を含んだ広い意味で農業という言葉を使っているということで、農業遺産の中に森林が対象になっても水産物が対象になっても、全く問題ありません。長良川の鮎も、岐阜県の古田知事は、里山里海ならぬ里川という言葉を提唱されておりますけれども、そういう風なことについても、今後議論が進んでいくのではないかと思います。

さてトキと共生する佐渡の里山。髙野初代佐渡市長の左隣がパルビス・クーハフカンというGIAHSの最初の仕掛け人であります。トキと共生する佐渡の里山ということで、ここでは農業がただ農業生産だけにとどまらず、１つの農村文化を生み出しているという観点が非常に重要なのではないかという風に思っております。

農業遺産に認定されてどんな効果があったかということを佐渡市さんが取りまとめられて、私が農林水産省での日本農業遺産の認定式典で講演した際に使わせていただいた資料なんですけれども、朱鷺と暮らす郷づくり認証制度のブランド力が向上して、認証された農家数が、256戸から407戸に増え、認証面積も426haから1,038haに増えている。農業法人、新しい仕組みですよね。従来の農業のやり方をもう少し近代的な社会づくりと合わせるような形でやっていこうということで、農業法人というのができてきているわけですけれども、着実に28団体から59団体へと増えている。新規就農者も増えている。そして、認証米の販売店数も150店舗から299店舗へと増えている。こういう状況が示されております。

だから、次世代への継承という意味では、色んな農文化で育まれた伝統芸能の継承ということで、これは後程地元の方々にお話を伺うことになっておりますので詳しいことは省略をさせていただきますけれども、一つ私が強調したいのは、農業って言葉ですね、アグリカルチャー（Agri・Cuture）。もともと農業という言葉の中に文化という言葉が含まれているんですね。私たちはそれを強調する時には、農業と言わないで農文化と言っていますけれども、そもそも農業というものの中に、文化的な側面が入っているということをとりわけ皆さんにはご理解いただきたいと思っております。

佐渡で非常にいい取組だなと思っているのは、子ども達の学校給食だとか、子ども達が参加した生きもの調査が盛んに行われているということであります。

GIAHSに認定されたことの一つの意義は、地域における農林水産業に対する人々の誇りというものが生まれてきていることではないかと。そしてそれが継承されていくためには、子どもの頃から農林水産業に非常に積極的に関わって、そうしたものを自らの体験として蓄積させていくことが、非常に重要なんじゃないかなと思っております。

観光への影響も、これも今はコロナ禍で非常に停滞していますけれども、色んな形での取組が進められているわけですね。

特に、この中で特に注目したいのは、地域おこし協力隊の定着率が非常にいいってことです。佐渡が非常に魅力的なので、皆さんそのまま定着されるということが多いと言うことであるんですけれども、その数がどんどんどんどん増えているということが、非常に注目すべきことではないかなという風に考えております。だから生きもの調査についても、引き続き皆さんが取り組まれております。

色んな調査が進められていますけれども、特にトキの野生復帰がかなり進展がいいということもありまして、それを支える餌場としての生物多様性の確保というようなことも含めて、皆さんにいろんな取組をしていただいているというのが、非常に功を奏してきているのではないかという風に考えております。

認証米制度の話ですね。都市との交流、環境教育、こういうものをうまく組み合わせて、ただ単に認証米に付加価値を付けることだけではなくて、それをいわば地域の文化に定着させていくという取組が、今後は必要ではないかと考えているわけです。

佐渡の伝統的な農文化ですね。これも皆さんご承知のことだと思いますが、文化と農業というのが伝統的に結び付いて今日まで維持されてきたということをやはり大事にしながら、これからの地域社会づくりを考えていくと。古きを訪ね、そして新しい未来を考えていくという取組、これが重要なのではないかと思っております。

色んな方が参加するという新しいコモンズ、これが重要だと申し上げましたけれども、いくつか事例を用意していただきました。これは梶原さんという神戸生まれの方が、お父様の出身地の佐渡に移住して、色んな新しい農業をやっておられるということです。

特に海藻・魚を使って農薬や化学肥料に頼らない農業を実践されているということですけれども、私の研究グループが研究したことで申し上げますと、佐渡の海藻は、伝統的にものすごい識別がされて、多様な利用があったんですね。ところが今はその伝統的な知識がなかなか継承されなくなって、佐渡の人でもごく限られた海藻しか食べない、使わないという状況になっているというのが報告されまして、この状況はぜひ改善していただきたいなと思ったところでございます。

それからこれは生物多様性についての写真をずっと集めておられる服部さんという方の取り組みです。こういう風にして大阪府生まれの人が、県の職員として佐渡に勤務して、そのままこの佐渡の中で、生物多様性についての取組を行っておられるという。こういう新たな主体の参画というのを色んなところで見られるわけです。

それから最近非常に国際的にも国内的にも注目されている農福連携ですね。農業の体験を通して福祉に貢献するということで、立野福祉会という団体の取組です。こういう風な取組も是非今後展開していただければ、大変良いのではないかと思っております。

それから子ども農家(金井小学校)ですね。これも先程来申し上げているように、次世代を担う人たちの育成にはとても重要なことであります。

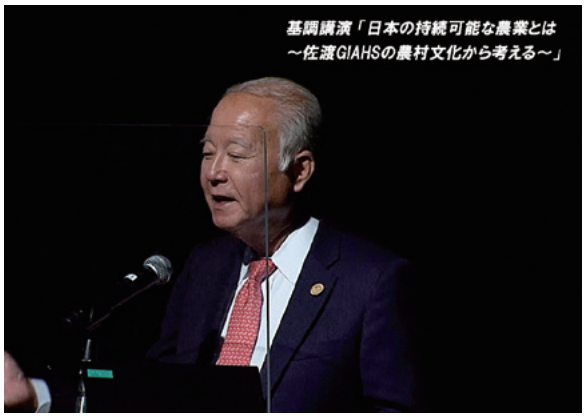
田んぼアートですね。こういうものも色んな人々に注目していただく取組として、非常に重要だと私としても考えております。

佐渡の例についてはちょっと時間不足で、詳しくお話をすることができませんでしたけれども、この後のパネルディスカッションの中で、皆さんからいろいろとさらなる説明をいただければ、大変良いのではないかと思っております。

私もまた佐渡に何度かお邪魔をする機会がございますので、そうした機会を通して、皆さん方と引き続き議論を深めることができれば、大変ありがたいと思っております。

改めましてGIAHS認定10周年を心よりお祝い申し上げ、私の講演とさせていただきたいと思います。

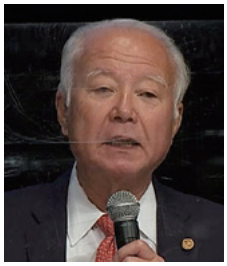
どうもご清聴ありがとうございました。



パネルディスカッション

コーディネーター
農業ジャーナリスト
小谷　あゆみ 氏

兵庫県尼崎市生まれ。石川テレビ放送アナウンサーを経て、2003年からフリー。食や畜産番組リポーターとして全国の農業を取材。誰もが自分らしい生き方ができる、持続可能な地域と農業をテーマに取材・発信中。農林水産省／世界農業遺産等専門家会議委員ほか。



パネリスト
(公財)地球環境戦略研究機関
理事長　武内　和彦 氏

基調講演に続き、パネルディスカッションにも登壇します。

パネリスト
珠洲市長
泉谷 満寿裕 氏

早稲田大学政治経済学部卒業後、野村證券㈱勤務を経て、2006年に珠洲市長に就任。現在4期目。

パネリスト
大崎市世界農業遺産推進課
課長　高橋　直樹 氏

宮城県大崎地域の世界農業遺産認定申請及び認定後の保全計画推進業務に従事。2020年4月から現職。

パネリスト
㈱佐渡相田ライスファーミング
代表取締役　相田　忠明 氏

独自ブランド「相田家産佐渡スーパーコシヒカリ」で朱鷺認証米と環境を意識した国際品質の米づくりに取り組む。

パネリスト
尾畑酒造㈱
専務取締役　尾畑 留美子 氏

「真野鶴」五代目蔵元。廃校再生の学校蔵で酒造りに取り組む。The Japan Times社のSATOYAMA大賞受賞。

パネリスト
佐渡市長
渡辺　竜五 氏

佐渡市農林水産課係長時代、佐渡米の再起を図り「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」を開始。2020年から現職。

【小谷】 日本の持続可能な農業とは？佐渡から考える持続可能な農業という風に題しまして、６人の皆様とお話を進めてまいりたいと思います。

先程の武内理事長のお話にありました、FAO、GIAHSの考え方、大規模だけじゃやっぱりバランス取れないんだと。小さな家族農業、地域地域に合わせた農業が大事なんだというお話をいただきました。農業は自然環境、地球環境と共存・共生できるのか？っていう大きなテーマを投げかけられましたけども、できます！できますっていうのを実現しているのがこの佐渡の農業だという風に感じています。その辺りを皆さんからたっぷりと伺ってまいりたいと思います。

それではまずは、動画がございます。FAOが制作しました世界農業遺産、そして農水省がこれを受けて制作しています日本農業遺産、この考え方を説明する動画をまずは５分ほどご覧ください。FAOのGIAHSのコーディネーターとして遠藤さんが今からお話をいただくということで、今日の為に、10月30日の為に改めて解説を遠藤さんからいただいているということです。

【遠藤】 皆様おはようございます。私はローマの国連食糧農業機関FAOのGIAHS事務局に勤めております、遠藤芳秀と申します。この度は佐渡GIAHS認定10周年ということで、誠におめでとうございます。またお招きいただきまして大変ありがとうございます。ではビデオで、これから５分間という短い時間ですが、FAOのGIAHSプログラムの概要と世界の認定地から見た日本の特徴を説明したいと思います。時間が短いのでかなり内容を端折らなければいけませんが、そこはご承知置きください。

まず、GIAHS世界農業遺産の事業の概要ですが、この図はGIAHSの認定手続きを示したもので、皆さんご承知の通りだと思うんですけど、最終的にGIAHSの認定書というものはGIAHSの提案書というものは、このScientific Advisory Group（SAG）が５つの基準を元に認定するということなんですが、そこで保全のための認定後はですね、認定された後の話ですが、動態的保全ダイナミッコンサベーションというものが行われる。その手段として行動計画というものが制定される。その行動計画に基づいてさまざまな保全発展のための取組が行われることが期待されております。

これは全て、認定地を巡る色々な関係者、地方政府、それからその国の農業省なりの省庁の責任において行われるということになっております。それでさまざまな色んな活動があるんですけど、例えば農村観光の振興とか、伝統食材の復活・普及とか知識も保全、資源管理、それから市場販売促進策、色々なものがあると思いますが、これらの総合的な効果によって、認定地の保全、それから適応、それから発展というものを行っていく。これがGIAHSです。目的は認定そのものにあると言うよりも、認定を通じてこうした活動を行う。それからこうした活動を行うための体制が地域によって整えられ、関係者が初めて話し合い乗っかってくる。そういう制度なり、形体制が組まれる、とここにGIAHSの意義があります。それがなければGIAHS っていうのはあんまり意味がないということです。

それは時間がないんで次の項目に行きます。これがGIAHSの管理組織です。日本に拠出いただいてます。我々事務局というのは、私も含めて４人しかいません。それからSAG、FAO、それから加盟国というものが、管理機構の構成としてあります。このようにGIAHSというのはさまざまな活動と関連しております。FAOの中の色んな事業と関連しています。Dymamic Conservation動態保全の具体的例ですけど、静岡の認定制度とか佐渡のエコラベル。それから様々な市場促進のための販売促進のための活動ロゴの作成。これは世界的に行われているものを示したものです。それから農村観光の振興ということで、ざっと世界のGIAHSサイトを見ますとバングラデシュの浮き畑、中国の棚田、それからマサイ族の遊牧ですね。Agroforestryですね、山麓のキリマンジャロ山麓の森林農業。それからメキシコのチナンパ、それからこれがよく色々な事業の説明に使うんですけど、佐渡で行われている生態系を回復した、トキと共存する農業生産。それからオリーブの古代樹農業システム。スペインのシステムですね。あとアルジェリアのGhout農法、ペルーのアンデス農業っていうことですよね。

最後に世界の認定地から見た日本の特徴なんですが、昔から里山里海といった人の手が入った二次資源、二次自然の価値を認識しているという土壌があるということですね。それから認定後の保全発展のための活動を行う人材、制度、経験の蓄積が日本は豊富である。それから生物多様性の観点での特徴的な事例がある。佐渡だけじゃなくて、例えば阿蘇の草地ですね。それから他にも色々あります。行動計画の実施面で、世界のリーダー的な存在になり得るということですね。ですから日本のGIAHS認定地にはこれからもさまざまな行動計画の事象を通じて、世界のGIAHSサイトをリードしていってもらいたい。これが私からのお願いです。それではもう時間が来ましたので、これにて失礼させていただきます。ありがとうございました。

【小谷】 ということでご覧いただきました。冒頭の、武内先生のプレゼンと重なる部分もありましたけども、改めて印象と言うのは、タンザニアとかペルーとか中国の壮大なあらゆる地域の世界の特徴ある農業と匹敵する。それがトキと共生する佐渡の田んぼスタイルなんだよという風に感じますね。

今日は基調講演をいただきました、武内先生は、この佐渡とは繋がりが長いということですけど、まず一言お願いします。

【武内】 先ほど私の講演の中でもお話をさせていただきましたけれども、要するに過去を振り返るって

いうだけではなくて、これからの未来にどうやって継承していくかっていう点が非常に大事で、私はその点についてこの佐渡での取組っていうのは日本の中でも非常に先進的だと思うんですね。より付加価値を付け、そして、そのことが結果的には農家の収入を高め、そして、それが農業基盤を支えて、そして後継者の育成につながっていく。

ただ単に後継者だけではなくて、色んな外部からの人たちが加わることによって、そこに新しいコモンズっていうのがどんどんどんどんと発展していくという、まさに好転のスパイラルの中に入り込んでいってるという状況を、更に加速化させていくことが必要だと思います。私は渡辺市長とは2009年以来のお付き合いなんですけれども、彼が市長に就任したことで、ますますその流れっていうのは加速化されていくということを期待しています。

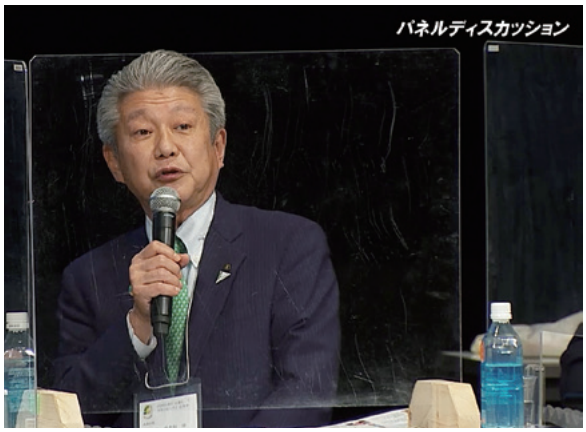
【小谷】 ありがとうございました。改めて環境と共生する農業であり、そして映像を見てても行ってみたくなる観光ともマッチングする農業だという風にも感じます。それでは５人の皆さんにまず自己紹介を兼ねてお話をいただきたいと思います。

同じく10周年を迎えます能登地域から、珠洲市長　泉谷満寿裕様、お願いいたします。

【泉谷】 はい、石川県の能登半島の先端、珠洲市長の泉谷でございます。どうぞよろしくお願いをいたします。珠洲を含む能登の４市５町の里山里海、佐渡市さんと共に2011年に世界農業遺産に認定をされたわけでございますが、佐渡市さんの取り組み、トキと共生する佐渡の里山ということで、非常にイメージしやすい、具体的だなと思いますが、能登の里山里海は、そこに含まれる伝統文化であったり、生業であったり、暮らし方も含めて、なんかこうちょっとふわっとしてるようなところがあります。

少し珠洲市のご紹介もさせていただきたいと思いますが、先程申しました通り、能登半島の先端に位置をしております。私が市長に就任しましたのは2006年の６月でございます。珠洲市の最大の課題は、これは今現在も同じでございますが、人口減少でございます。

昭和29年ですから1954年にですね、珠洲市は３つの町と６つの村が１つになってスタートいたしました。当時は人口38000人を超えておりましたけれども、今現在は13400人ほどということで、本当に人口減少になかなか歯止めがきかないという状況でございます。こうした中で2006年６月に私が市長に就任して以来、珠洲市の魅力は食だということで、こちら佐渡にもおいしい食がたくさんございますけ



れども、食を中心に交流人口の拡大と農林水産業の振興を組み合わせて推進をして経済を活性化させ働く場を増やして、若い方の移住定住に繋げていこう。そういったことを一貫して進めてまいりました。そうした中で本当にタイミングが良かったと思うんですが、2006年に私が市長に就任して間もなく地元金沢大学の関係の方々が珠洲市の空き校舎を活用して、能登半島里山里海自然学校を開設したいと言う申し出がございまして、即座に応じまして、2006年の秋には能登半島里山里海自然学校が開校ということになりました。翌2007年度からは具体的な人材育成事業、能登里山マイスター養成プログラムといったものがスタートいたしまして、そこで学びたいという方も、県外からも来られるようになったということでもございます。次世代型の環境に配慮した、農林水産業を学び直すといったような内容でございまして、これは今でも続けているわけでございますが、そうした中で、2011年に世界農業遺産の認定、珠洲を含む能登の里山里海ということになりましたので、私といたしましては、この色んな農林水産物、それぞれのブランド化を図って、付加価値を高めるということも大事ではございますけれども、世界農業遺産に認定されたことで、珠洲を含む能登全体が、地域そのものが、ブランド化できるんではないかと。そうなればそこで生産される農林水産物の付加価値が高まっていくんじゃないかということを期待しながら色々と取り組んでまいりまして、珠洲におきましても道の駅の整備あるいは宿泊施設の整備といったことも、合わせて進めてきました。

また、具体的な取り組みといたしましては、佐渡市さんの取り組みも本当に参考にさせていただいて、市内の小学校、９校ございますけれども、年に２回、生きもの観察会をずっと継続して開催をしております。こちらは、この観察会に加えて、児童生徒がまとめまして、そして発表するといったことで色々と本当に充実した中身の濃い取り組みとなって

きています。そして、また2019年度からは、さらに発展させてSDGs教育といったことで、進めているところでもございます。

そして、トキが４、５年前に舞い降りた地域、珠洲市で三崎町粟津といったところがあるんですけれども、こちらで佐渡市さんの取り組みを参考に、環境省の地域循環共生圏事業のモデル地区として支援をいただきながら、魚道ですとか、江の設置といったことも進めております。

この粟津地区の取り組みにつきましても、そこで生産されるお米の付加価値の向上といったところも含めて、地道に今取り組んでおります。そしてまた珠洲市で炭を生産されている大野精炭所っていう、専業でやってらっしゃいますけれども。より付加価値の高いお茶炭、菊炭を生産されています。その菊炭を、生産する為には、まずはクヌギの森づくりからということで、多くのボランティアの方々にご協力をいただきながら、地道に継続して森づくりも進めているといったこともございます。そして溜め池の生きもの調査であったり、地引き網を使った里海の生きもの調査といったことも、地域で、あるいは児童生徒とも共に取り組んでいるところでもございます。

こうした取組や動きに合わせて、珠洲市におきましては、2019年３月に生物文化多様性基本条例といったものも制定をして、市民・行政・企業それぞれ連携をしながらさまざまな取り組みを進めているところでございます。まずは珠洲市の取り組みとしてご紹介申し上げました。よろしくお願いします。

【小谷】 泉谷市長ありがとうございます。能登半島の半島っていうのは半分島な訳ですよね。だから佐渡島と能登半島で共通のことが、すごく多いと思いますけども。私実は元々石川テレビという石川県のテレビ局でアナウンサーをしてたんですね。泉谷さんっていうと芋菓子で有名な、能登と言えば泉谷っていうね。あのお菓子屋さんの、あの泉谷さんが市長になられて。食を発信されてますけども、改めて泉谷市長、能登と佐渡の共通点はたくさんありますけども、違いと共通点、どのように思いますか。何度も来られてると思いますが、一言お願いします。

【泉谷】 やっぱり、トキっていうシンボル、これは大きいと思いますね。トキと暮らす郷っていう、ブランド米、お米の取り組み、これも本当に具体的に取り組まれていらっしゃいます。そういったところが能登の里山里海、世界農業遺産認定はされましたけれども、まだまだですね。そこが少し具体的なところまで至っていないといったところがありますので、また色々と参考にしながら、具体的な取り組みも進めていきたいと思ってます。

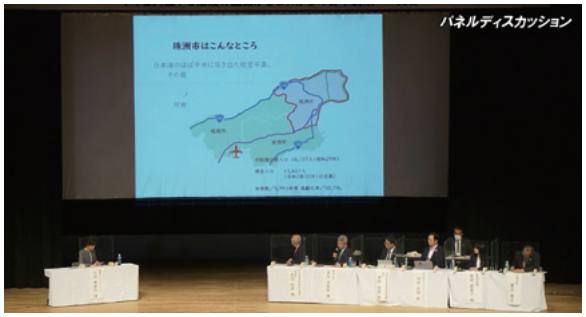
【小谷】 ありがとうございます。距離にすると近いわけですから、人間は移動が大変ですけども、トキにとっては能登と佐渡は昔から北前船でも繋がってた地域ですので、トキの復活がこれを機にルートができることを願っております。

それでは、お待たせいたしました。同じく世界農業遺産に認定されています大崎耕土というのがございますが、こちらの大崎市の世界農業遺産推進課の課長でいらっしゃいます、高橋直樹さんお願いいたします。

【高橋】 改めましてこんにちは、高橋でございます。今日よろしくお願いをいたします。佐渡に今日来る前に携帯で履歴を見ましたら、今回５回目でございまして、恐らく宮城から５回来てる人っていうのは、なかなかいないのかなと思いつつも、それだけ昔から色々勉強させていただく場所として、佐渡だったり豊岡だったりというところで、大崎を含めて３つの自治体で大型鳥類の連携をしよう、自然に配慮した農業の連携しようというところから、繋がりが始まっていって当時、冬期湛水あるいは、ふゆみずたんぼと言われてますけどもそういった取組に取り組んでいったという経緯を今朝もまた改めて思い出しております。

今回、佐渡市のGIAHSが10周年ということですが大崎、来年でちょうど５年ということになります。今、様々色々勉強させていただきながら、取組を広げていっているところですが、今日お時間の都合もありますが、その一端をちょっとご紹介だけさせていただこうと思います。

自己紹介でございますけども私、異動が多いという自治体の職員にしては、ほとんど異動がなく現在のポジション、あるいは類似の仕事をし始めてから、今10年目でございまして、昨年の４月から今の仕事をしております。世界農業遺産推進課と言うことで、名前そのものなんでございますが、当課は10人で構成されています。様々な分野のもので多国籍軍化し



ている部分があります。本日も会場に来ておりますけれども、宮城県からの出向者一人、周辺のエリア内の自治体から出向者一人。自然環境を専門に取り扱う専門員という職、それが２人ということで非常に今、事務だけじゃなくてさまざまな観点から取組をしているところでございます。

改めて説明でございますけれども、宮城県大崎市と周辺の地域、一市4町で大崎耕土。人口が約20万人のエリアでございます。私の勤めております大崎市が約13万人弱、中心市になっておりまして、大崎耕土の中核をなしている状況でございます。

取組ということなんですが、どういうところなのかなと。こんなのどかな田園風景が広がるところでございます。屋敷林を持つ家が多々点在すると、ちょうど今の時期でございますが２つのラムサールサイトがございまして、そのラムサールサイトに多くのマガンが来ております。10万を超えて、たまに市の人口を超える13万とか14万とかという数が来ます。

朝の鳥たちの風景ですね。これが大体10月11月大体２月末ぐらいまで見られ、朝、沼から飛び立っていきます。マガンという鳥、渡り鳥ですね。シベリアから来ます。今日はGIAHSサイトになった背景にもあるんですけど、マガンとの保全、マガンとの共生っていうのが、まずスタートでさまざまな話が進んでいったということがありましたので、ちょっとご覧をいただきました。

先程映ってたんですけど映ってたのは３つしかなくて、マガンと田んぼと沼。この３つしか映ってないんですけれども、この３つの存在が非常に大きくて、これをどうしていくのかということで、さまざまな取組をし始めたと。で、それを進めていく中で世界農業遺産の取組、それを通じた価値作りというようなものに気づかさせていただいたと。こういったこともありまして、2017年に認定を受けております。

農業システムを若干紹介します。「持続可能な水田農業を支える大崎耕土の伝統的水管理システム」という名前です。元々東北の太平洋側は冷害が発生しやすいということ、水害も非常に起こりやすいということで、水管理をどうするのかということが400年前から取り組まれています。さまざまな水管理の基盤あるいは水の配分する基盤で、洪水の時には湿地の周辺に遊水地を作ってそっちに水を流す。通常は水田を作って米を作っている訳ですが、遊水池としても使う。そしてやませに対応するために深くお水を張ったり、水の温度を温めるための水路あるいは田んぼを作る、これが巧みな管理システムという位置付けになっています。こういったシステムに基づいて農業が進む、そういった中で人の暮らしが必要になりますので人の暮らしの中で屋敷林を持つ、イグネと言われている住宅ができる。加えてそこにマガンなどの生きものの姿がだんだんできるようになると、米ができて、大崎はササニシキとひとめぼれが生まれたところでございまして、米作りが盛んな地域、あるいは大豆も本州で一番の生産量を誇っている地域でございますので、みそ加工等々も含めて自然と共生する農業を進めると、現在的な価値といたしましては、文化等々が継承される。大崎地域の場合は餅を食べるという文化が非常に浸透してございまして、餅は最高のごっつぉうというようなところです。

今はさまざまな交流の場としての農業の価値が非常に高くなっているというエリアでございます。保全計画アクションプランですが、３つの繋がりを大切にしたアクションプランということで水・知恵・人、この３つの繋がりを大事にしたアクションプラン。そういった中で３つの繋がりを守って次に繋げていく為に３つのプランを推奨していると。

１つはフィールドミュージアム構想と、佐渡市さんと同じように、認証制度を加えて、人材の育成に取り組んでいる。さまざまな分野で今現在この５年で取り組んでおります。栽培のことも含めてですが、人材育成、ランドスケープを形成するための資源の見える化、さまざま取り組んできております。アクションプランですけれども、我々ラムサールのことから学んだというのが、守る、保全だけではなかなか皆さんの気持ちが付いてきてくれない。守る価値を知ってもらうということはこれを懸命に利用すること、賢く利用することが、この地域のためあるいは自分の生産のために役に立つ。活用から考える保全、守るために生かすアクションというものを大事にしながら今進めているところでございます。

全体の流れとしては、与えていただいた地域資源、環境について、きちんと整理をする。これを共有するために分かりづらい資源の見える化をする。あるいはそれを広めていただく人材を作る。そして、体

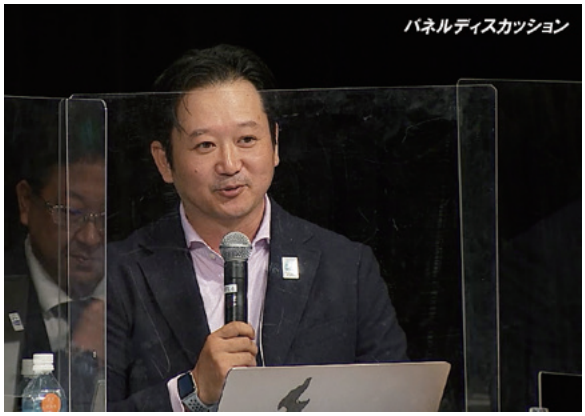
験や体感をいただくということで、ちょうど今この体験体感のところに今差し掛かっているだろうという風に思っています。最終的には共感をいただいて、その共感の中でさまざまな購入活動、あるいはツーリズム、こういったところで大崎耕土を訪れていただく。ここで得たものをさらに資源の保全に活用していく。というこの好循環を是非進めていきたいという風に思っております。

【小谷】 ありがとうございました。大崎耕土。やませ冷害という気象条件、厳しい環境があるわけですけれども、それを克服する術としてこの農業システムが生まれたと。改めてこのGIAHSの農業の価値と言いますか、特徴って言うのはそれぞれの地域の課題を恵みに変えていくそれがGIAHSの農業なんだなって言う風に改めて感じます。

冬鳥のことでは佐渡と大崎は共通してますけれども、私佐渡に来たのは４回目なんです。だから高橋さんに負けてますけれども、佐渡のふゆみずたんぼで改めて思ったのは、湿地のようなところに冬鳥は来るのかなって言う風に思ってたんですけれど、佐渡の場合は、トラクタで轍を作ってちょっとした溝のところにちょうどトキの餌場環境が作りやすいんだって、つまり農家さんが作ったあのふゆみずたんぼのあのスタイルな訳ですよね。このトキが来る状態を作り出すのが農家なんだと。農家は米だけ作るんじゃなくて、生息環境を作り出しているというところに感動したのを思い出しました。

【小谷】 大崎から高橋さんありがとうございました。続きまして、佐渡のお二人ですね。まずは佐渡相田ライスファーミング代表取締役　相田忠明さんお願いいたします。

【相田】 よろしくお願いします。佐渡島中央の国中平野というところでお米作りをしております相田です。2010年から家の米作り農業を継ぎ、2013年



から株式会社佐渡相田ライスファーミングを立ち上げ、代表取締役としてやっております。約10年で栽培面積は２倍まで大きくなり、現在は約20haを生産販売をしております。

このお米の映像、今年の収穫前の映像です。奥に見えるのが金北山という、私にとっても自慢のふるさとの山です。自社ブランドとしまして、「相田家産佐渡スーパーコシヒカリ」を栽培販売しています。約20年ほど前に県、当時10市町村の合併の協議会、改良区、農協が、県内３地区、魚沼・岩船・佐渡というところからスーパーコシヒカリっていう名称で各農家で一等米を常に出す農家がピックアップされた中に、うちの父が入りまして。その時に、佐渡スーパーコシヒカリという名前がつきました。当時、ドデカイ看板がうちの水田に建てられ、たまたまNHKさん等さまざまなメディア、現代農業さんに表紙にさせていただく機会をいただき、うちのお米イコール「佐渡スーパーコシヒカリ」という名前で少し全国にでました。その流れから今は「相田家産佐渡スーパーコシヒカリ」という名前で生産販売しております。

朱鷺と暮らす郷づくり認証米ですが、うちも環境に配慮したお米作りをしておりますが、プラス今から３年ほど前から国際品質のグローバルギャップという資格も取っておりまして、非常に難しいと言われる認証制度ですが、ロンドンオリンピックから選手村で使うものはグローバルギャップ品質というのが定着化しまして、一般的に五輪品質の農産物として東京五輪を通して日本国内でも知名度が上がってきました。

我が社のお米作りの基本は、佐渡でしかできない米作りを意識することです。秋には佐渡産のカキ殻や佐渡牛の牛ふん、自社の籾殻や米ぬか等も肥料にしています。また春には、種籾の段階、苗の段階で佐渡海洋深層水を週１～２トン散布しています。

また他には、牡蠣殻農法という形で父の代からやっております。ドラム缶にカキの殻を入れて水を常に通しています。新穂の山から水をファームポンド経由で流し、プラス佐渡の牡蠣の殻を通して、佐渡にしかできない山と海のミネラルを常に入れた米作りをしております。数年前から国外の販売も行っておりまして、香港・シンガポール・ニューヨーク・ハワイと少量ですが繋がりを持ちましてコロナ禍で少し動きは止まっていますが、現在はパリを中心に、少量ですが飲食店とも繋がりながら、佐渡島と世界を繋げる販売戦略を本当に微量なんですが行っております。

佐渡市や尾畑酒造さんも常に世界を目指しておりますが、うちも少量ですが世界を視野に入れながら、

減反とかの対策も含めて頑張って取り組んでおります。私の住む地域は改めてお話ししますと、旧新穂村と言いまして、お米や果樹、佐渡牛の飼育等一次産業が盛んな地域です。稲刈りしている今年の様子なんですけど、トキが非常にうちの地域の田んぼには多いですね。作業しているとスズメとかカラスとかよりも、トキが多いんじゃないかなっていうぐらいトキが本当にたくさんいます。うちの地域の神社があるんですが、そこにも巣が４つぐらいできてますので、神社の横にある学校とか目の前にスーパーがあるんです。本当にトキが身近な存在としています。

あと佐渡牛ですとか、おいしい果樹が非常に盛んな地域でもあります。また伝統芸能につきましても非常に盛んで、これはもう佐渡全体共通して言えることなんですが、鬼太鼓や色んな芸能文化が盛んな地域としても自慢できるところであります。

また最後になりますが、伝統芸能の鬼太鼓を地域全体で、また世界に配信しようということから2017年から佐渡祭りワールドツアーという企画を自主企画で取り組みまして、2017年にニューヨーク、18年はヨーロッパ３カ国、また2019年にはニューヨークに行きまして、今年ドバイ万博にも行く予定だったんですが、コロナの関係でちょっと断念したという形になっております。

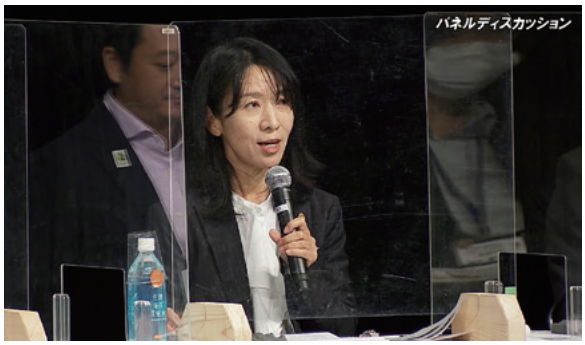
以上が自己紹介です。ありがとうございました。

【小谷】 佐渡のオンリーワンの米作りでパリや海外に進出されて素晴らしいと思いました。

相田さん、これ多分課題だと思うんですけれど、トキが多過ぎると困るという問題はどのように感じておられますでしょうか？

【相田】 私自身は全く問題はないですね。トキが来る前は真っ白い草原のようにサギが凄い占めてたんですが、サギとトキが餌場の取り合いをしたのかわかりませんが(苦笑)、今はトキの方が多いですね。私自身はトキが増えようと、一面田んぼにトキが来たらさすがにびっくりしますが、今のところトキが増えたからといって何か困ってることは全くないです。田んぼで作業していて、やっぱトキの色はきれいですしね。トキだけではなくて、タヌキですとか、野ネズミとか昆虫もそうですけれども、本当に多様化した生物が私が幼少期よりも非常に多いので、本当にありがたいシンボルとしていい存在だなっていう風に感じておりますね。

【小谷】 なるほど。ありがとうございます。観光業界でもオーバーツーリズムという、来過ぎると困



るっていう問題が起きてますけれども、恐らくトキがいなければ何かが来るわけで、トキが来ることによってのメリットをポジティブに捉えて発信することも大事かという改めて思いました。相田さんありがとうございました。

それではお待たせしております。今も写真に出ていました尾畑酒造の専務取締役 尾畑留美子さん、お願いいたします。

【尾畑】 はい。よろしくお願いいたします。尾畑酒造の５代目蔵元になります尾畑留美子と申します。大学から東京に出まして佐渡に戻るつもりはなかったんですけれども、色んなことがございまして1995年に戻って、実家の蔵を継いで現在に至ります。

こちらが当社の蔵になります。お酒造りのモットーとしまして酒造りの３大要素と言われている米・水・人、そこにお酒を育む生産地である佐渡を加えて４つの宝を和して醸す四宝和醸という言葉を作ってモットーに掲げております。

トキの郷づくり認証米、それから棚田のお米。こういったものを原材料にした、お酒造りにも取り組んでおります。2014年には、廃校になった旧西三川小学校を酒蔵として再生させた学校蔵というものをスタートして４つの柱で運営をしております。

一つ目はオール佐渡産にこだわった酒造りでございます。冬は本社で仕込みがあるので夏場に冬の環境を作ってお酒を造っています。

二つ目は環境との共生です。太陽光パネルを設置しまして、電気に関してほぼ100％再生可能エネルギーを取り入れております。これは佐渡島がトキの飛ぶ、非常に自然環境の良い島だということを、お酒からも発信していきたいという思いでスタートしたものです。

三つ目は交流です。やっぱり学校っていうのはいろんな人が集まるのがいいところかなと思っております。毎年６月に学校蔵の特別授業という１日限りのワークショップを行って、年齢やバックグラウンドが異なる多様な人達、10代から70代までなんで

すが、そして島の中の人、外の人いろんな人が混ざって学ぶそういう場づくりを提供しております。毎年佐渡の高校生も10名ぐらい参加しております。今年は初めてオンラインに挑戦したんですけれども、せっかくオンラインなので高校生とアメリカの学生を繋いだりもしました。こういうことを通して佐渡の未来を担う人達、そんな若い人達に色んな世界に触れてほしいと思って続けております。

そして四つ目の柱が学び。酒造りの時期に合わせて一週間の酒造り体験プログラムというものを実施しまして、お酒を学びたいという人を生徒として受け入れております。実はお酒を学ぶということは地域を学ぶことに繋がってまいります。例えば、お米を触りながら、このお米一体どこから来たのか？ということで田んぼを訪ねる。この島のお酒造りはどこから始まったのかと言って佐渡金山を訪ねる。このように一週間の間に酒造りはもちろんのこと、島の循環とか歴史に触れていただくことで日本酒と佐渡のアンバサダーを毎年生み出しています。

このような取り組みをご評価いただきまして2020年には内閣府による日本酒特区の第一号に認定適応をいただきました。武内先生の講演の中で家族農業の大切さというお話がありました。うちを含めまして多くの日本酒の蔵というのは伝統の家業でございまして、小さな事業者であり、効率とか生産性と言うところからは、ちょっと遠い存在でもあります。ですが、だからこそできることもあるのかなと考えております。日本酒の蔵にとってこの島でのお酒造りというのは大変ありがたい環境と言えます。酒蔵の立場から本日はお話をしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【小谷】 尾畑留美子さんありがとうございます。さまざまな外国人の方もアンバサダーを育てているという写真にも出てきましたけど、オール佐渡産の酒造りで東京大学未来ビジョン研究センターとの、エネルギーまで佐渡産っていう。武内先生一言。

【武内】 たまたま東大の未来ビジョン研究センターで、当時、昭和シェルって言って今、出光っていう会社なんですが、この会社がですね、私のところに来まして、共同研究したいと。なんで石油会社が私のところに共同研究をしに来るんだ？っていう風にお話を聞いたらですね、石油を将来やめて、再生可能エネルギーで会社を維持できるような形にしたいんだっていうわけですね。それならば、いいんじゃないかっていうことで、共同研究を始めたんですけれども、実証現場がいるんですね。それで最初は新潟県の平野部で農業用水路にソーラーを張って試験を始めまして、そちらも本格的なものになっているんですけれども。その次に尾畑さんとの出会いがあったもんですから、廃校のプール、そこに小規模にソーラーフロンティアっていう会社のパネルを張らせていただいて。今はそのもっと先にもですね、広げていって、これは補助金も確かもらってやった事業ですよね？今はもう100％を超えているんじゃないかと思いますけど。ぎりぎり？

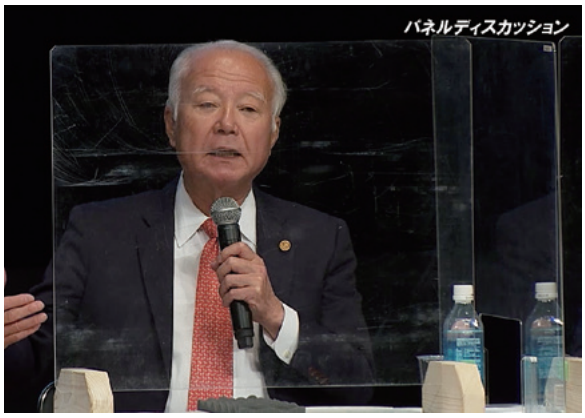
【尾畑】 ぎりぎりですね。

【武内】 私は地産地消って言いますけれども、米も佐渡産、エネルギーも佐渡産、これは非常にいいんじゃないかと思ってます。

【小谷】 エネルギーまで佐渡産という、先進的な取り組みをされている尾畑酒造さんありがとうございました。それでは最後になりました。渡辺竜五佐渡市長お願いいたします。10周年おめでとうございます。

【渡辺】 はいありがとうございます。本当に皆さんおいでいただきまして感謝申し上げます。本当に素晴らしい方々と今日はディスカッションできるということで是非これからの日本のあり方について、提言の一助になればなという風に考えております。

武内先生とは本当に、私が田舎の公務員で仕事をしている時に、この佐渡は日本のモデル、世界のモデルになれるよってことを、本当に私に教えていただいた。今の私の考えを作る本当に基礎的な力をいただいた尊敬する先生でございます。そして珠洲市長がおいでいただいておりますし、高橋君が、高橋君っていうのはあれですけど、昔からの付き合いの名前なんですけど。本当にまちづくり、そしてランドスケープも含めてですね、農地を生かしたまちづくり、ブランド化。そういう部分を本当に勉強させていただいてますし、特に珠洲市の里山マイスター、



私は今でも感銘しましたが、東京とか、大阪から珠洲まで学びに来るっていう形ですね。やっぱりああいうものが今の企業誘致とかさまざまな成果、今、数字に残されていますけど。ああいう取組がしっかりと人と人との繋がりでやってるんだなということで本当に感銘しておるところでございます。また、本当に佐渡のお二人は仕事を通しながら本当に佐渡を発信していただいてる。まさしくCSV っていうところで、仕事を通した地域づくり。本当にお力をいただいているということで私も頑張ってご報告したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

一つこの表紙、見てもらうと分かるんですけど、実は私ばりばりの農業系でございます。農業系の仕事をしておりました。それでちょっとカミングアウト、あんまり普段私お話ししないですけど、実はこのトキと、世界農業遺産を通して、私自身３つの大きな変革がありました。

その一つはまず、この認証米を作る前、私が何を考えてたかと言うと、佐渡のお米が売れない。平成16年の台風の被害が大きかったんですが、もうその後、全然売れない。当時、農業系の人は分かりますけど、政府米っていう政府に買い入れしていただく仕組みがあったんですが、佐渡米の３割が政府に買い入れられたことがございます。当時政府に買い入れられるというのは、消費者に売れないお米というレッテルでございます。佐渡の米は売れない、品質が悪い、これをさまざまな関係機関から言われて。私の心は深く傷ついておったわけでございます。なぜこんなおいしい米が売れないんだ！っていう思いが一番でしたね。で、そこをどうにかしようっていう時に、トキとの出会いがあったわけです。ですから、最初はちょっと邪っていう変ですけどもトキをうまく活用して、まずお米売っていきたいと考えてたのが、実はこの認証制度でもある訳です。

この認証制度は非常に特殊、他にはあんまりないですけど、田んぼ一枚一枚を認証するということで農家の方にえらく負荷をかけるわけでございますね。例えば10枚田んぼを持っていると10枚認証制度に入れるのか、５枚しかやらないのかとかさまざまな形がある訳でございます。ですから、非常に難しかったんです。けども、ここはやはり農家さんの力が凄かったなという風に思ってますし、やはり売れなかったお米の危機感というのが当時行政と農協と農家の皆さんをつなぐその重要な要素になったという風に考えております。

もう一つポイントがあって、認証制度はトキの名前があるんですけど、生きものを育む農法って書いてあって、トキの保護、育む農法っていうことは書いていないんですね。で、ここはかなりの議論があり、トキが分かり易いんじゃないかと。トキの保護、トキを育む農法の方が分かり易いんじゃないかっていう話はあったんですが、トキを保護するということでは偏ってしまうんではないかと。佐渡全体の自然再生がトキを育むということに必要ではないか？と。いうことでトキを育むんではなくて自然再生を売り込んでいく。それをお米の付加価値にしていく。ということが大事だろうというところで、はたと気が付いた訳です。これは米を売ろうとしても駄目だと。米の付加価値は自然再生であったり、人の取り組みであったり。そこを表現してくれるのがトキなんだなという。私が次に思ったのは、やはりトキとの共生とか生物多様性をお米の付加価値にしようと。ここまでおいしさとか大きさとかそういうことではないです。トキとの共生する生物多様性の取組、ここを付加価値にしたいと思ったのが認証米です。認証米そんなに高くはない値段を付けて売ってますけど、農家さんに行くものが少ないとか、さまざま言われておりますが、やはり大きな効果としては、売れなかった佐渡米が全量売れるようになった。今、非常にお米の販売が厳しい状態ですけど、佐渡のお米は比較的堅調に販売されています。ブランド力の問題ですね。やっぱりそういうことがしっかりとできているというところが大きな要素だったという風に思ってます。

ちょっと紹介しますけども、農業遺産、トキを育む生物多様性農業ってここが一番評価されたポイントでございます。２つ目、評価されたポイントとして、自然と伝統文化です。これを農村がしっかり育んでいるというところがやはり評価されました。これを見た時に今の基本的な考えにようやく辿り着きました。この農業遺産を通して、なるほど！生物多様性を付加価値にしようと思ってたけど、実は違うんじゃないかと。農業がある、文化がある、地域がある、風景がある、これら自体が農村であるという評価。日本の消費者の方々が理解をしているか、農

業者が理解をしているか、我々が理解をしていたかというと、ほぼ理解してなかったわけでございます。そうすると農業の付加価値というのは、棚田を守り、能を守り、鬼太鼓を守り、という、これだけではないさまざまなものがありますが、こういうものに付加価値があるというところに気が付いたのが３つ目の点でございます。ですから単純にお米を生産物として生産調整ということが行われておりますけども、生産調整が生み出す影響というのが、どの程度大きいかということを、もう一度考えていくべきだろうという風に今考えておるところでございます。そこをどういう風に緩和していくのかというところは非常に重要であるというところに今繋がっているわけでございます。ですからお米が売れるということ、お米が売れて農業が成り立つということ、それが集落として機能ができるという地域コミュニティ機能ができるということ。それがこういう守るべき姿に繋がっていると。そういう風にようやくたどり着いたわけでございます。本当に偉そうに講演の時に言ってますけども、実はそういう形で繋がってきたという風に考え方をご紹介したいと思います。

認証制度の面積です。今やっぱり若干減りつつあるというのは、やはり農家の高齢化とか、米の生産調整の問題とかそういうものが明確にあるという風に思っております。米価の下落も認証米は常に同じ差額で売っておるんですけど、やっぱり下が下がっていくと引きずられていくということがある訳ですね。トキの野生定着、これは確実に進んでいる。400の後半ぐらいまで今いってると、昨日ご報告をいただきました。そして今、取り組まなければいけないことを少し申し上げますが、やはり農村の風景自体をどうやって守るのかっていう議論になってくる訳です。今これを地域コミュニティ作りということで何とかできないか？ということを今市役所の方で議論をしておるところでございます。ただこれは市役所の方に何とかしてくれっていう声は聞きますけど、地元の方でやっぱり頑張っていこうっていう

姿がないと、なかなか行政だけでは、広い地区コミュニティという問題を解決できない。お米の売り方、例えば棚田だったらもっとオーナー制度をしていこうとか、様々な提案があると思いますので、しっかりと地元と議論をしながらコミュニティをどう守っていくかということを考えていかなきゃいけない。それで今日、大勢来ていただいておりますけど、これはお米作りのサンプルになるという風に思ってます。コープネットグループさんと連携をしてもう10年が経ちました。毎年募金の金額が増えている。お金のことではないです。増えているということは佐渡のお米を買っていただいてる方が増えているということになるわけでございます。ということは佐渡のお米がおいしくて買っていただけるのか、トキということで買っていただけるのか、そういう部分の分析は必要ではございますが、やはり消費者に知っていただいて、それを繋げていくというところがすごく大事だという風に考えています。

これから我々みたいな小さな農業が生き残るのは、もちろん輸出とかも色々あるんですけど、やっぱりどう消費者と結び付いて、ここのお米がなぜ欲しいんだ？うちのお米は何が売りなんだ？ってことを考えていかなきゃいけないというふうに考えています。今少し仕掛けをしながらやっているのがオーガニック食材を活用している保育園給食です。無農薬、無化学肥料は私が別のところでお米をこういう風に展開していきたいというところで大変なご心配いただいてですね、私はできないよっていうお声もいただきましたが、農業というのは僕はすごく多様性豊かで当然だと思ってます。ですから無農薬ができるところは無農薬をやればいいし、今の５割減のままでやるのも全然いいと思います。ただ先ほどのトキのお米作りでちょっとお話し申し上げた通り、やっぱり何らかのブランド価値をしっかりと磨き上げていくということが、他のお米全体の波及効果に必ず繋がるということ産地の魅力と全体に上がるという。そういう部分も含めますし、もちろん売ることばっかりじゃないです。子ども達への食育の部分が僕は大きいという風に思ってます。無農薬のお米作りをやりながら子ども達へのそれを理解して食べてもらう。この取り組みを来年度以降、まず給食から進めていきたいということで農協さんも含めて議論しておるところでございます。

最後になりますけども新たな展望ということ、農業遺産は分かりにくいというお話があるんです。一番の原因はやっぱり生きてる遺産、皆さんがやってることが評価されているというところが理解されていないのかなという風に思っております。そこを理解していくいただくためには、もうすぐだと思って

おりますが、佐渡金銀山の世界文化遺産の国内推薦も、私いつもトキじゃなくて鶴のように首を長くして待っていると、申し上げておるんですけども、そういう取組をしたり。観光の中にどう農業とか、その体験を取り組んでいくか色んな体験が今新たに出ておりますので。もっと自転車でゆっくり佐渡を回れないか？とEバイクの取り組みを今年から始めました。そういう形で佐渡をゆっくり見ていただく。その中にこういう取組が入っていくだろうと。それともう一つ、東京の学校に今年から、トキ米を提供しております。これは農協さんの力で本当に給食の値段でしか販売してないですけど。差額分はこちらで負担してるんですが、農家さんのお力で本当にやっておりますが、東京の子どもたち、800人ぐらいいる学校なんですけども、そこに給食を提供して農家が何回か行ってもらって取組を知ってもらう。子ども達にこのオーガニックなり、トキの取組を知ってもらうということが非常に重要ではないかと。それを東京からまっすぐ発信していきたいというような思いで取り組んでおるところでございます。こういう取組も少し広げていきたいという風に考えておるところでございます。簡単ではございますが、今までの考え方と、今取り組んでいることをご紹介をさせていただきました。ありがとうございます。

【小谷】 渡辺市長、ありがとうございました。米の付加価値は米そのものを売るんじゃないんだと。農産物を売るのではなくて、物じゃなくて物語を、ストーリーを売っていこうっていう風に農業の世界でもよく言われますけども、それに真っ先に取り組まれたという風に思います。先程コープデリ連合会、消費者との連携という話もありましたけども、そういう訪ねてみたい、行ってみたい、田んぼであり、地域というそこから生まれる米なんだという。私も2015年にこちらに来たのが最初だったんですけれども。大地を守る会の消費者の皆さんと一緒に訪ねるっていうツアーで来たことを改めて思い出しました。

それではここから、何と後残りが１時間になってしまいました。まだ二つの大きなテーマを残しているんですが、パネリストの皆さん申し訳ありません。少しテンポアップでお願いをしたいと思います。武内先生、後程またいただくことにしまして、泉谷珠洲市長からお願いいたします。まず、伺いたいのはGIAHSの認定から10年ということでこれまでの影響地域に起きた変化などお話いただきたいと思います。泉谷市長お願いします。

【泉谷】 はい。先程冒頭で珠洲市の取り組みを中心にお話をさせていただきましたが、ここからは少し石川県全体としての取り組みをご紹介をしたいと思います。石川県の方で農業参入支援ファンドといったものを2014年に創設をしていただきました。この取り組みの中で、これまで石川県内外から42の企業などが能登地域へ相次いで農業参入をいたしております。高品質、高付加価値の能登の一品制度といったものも、2014年度からスタートしていただいておりまして、これまでに39の商品が認定をされております。能登の棚田米ですとか、揚げ浜の塩とかこういったところが非常に皆様からも認められております。

続いて、商品やサービスの開発支援を目的として2011年度から石川里山振興ファンドを、創設いただいておりまして、これまで２回積み増しをして、現在も運用中でございます。こちらを通して、265という実に多くの商品サービスが、開発をされております。こうした成果などを踏まえて11月25日から27日に掛けまして、能登地域GIAHSの認定10年を記念して石川県七尾市で国際会議を予定をしております。全国から石川県の方に皆さんお越しをいただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

続きまして珠洲市では、世界農業遺産の取り組みを進める中で、2018年の６月にSDGs未来都市に国の方から認定をいただきました。主な取組は、能登SDGsラボという取組でございます。こちらは産業、大学、そして地元の金融機関、そこに行政も絡んで、既存の企業ですとか、事業所の方で新たな商品開発ですとか、さらなる発展といったことに繋げて、さらに先程申し上げましたマイスターですね。人材育成事業のマイスター修了生が、そこに色んな形で関わってお互いに生かし合うといったことも、進めていきたいという趣旨で取り組んできました。そんな中で、今年の６月ですけれども東証一部上場企業でございます、薬の原材料を含めた薬の関係の商社、アスティナホールディングスといったところが本社機能の一部を珠洲市に移転をいただきま

した。年商で６百数十億円、社員数が千数百人という大きな会社でございますが、そういった会社の本社機能の一部ということでございますけれども、珠洲市に移転をいただいた。本当に奇跡だなと、いうような思いもございます。社長をはじめ７、８人の方が既に珠洲市に移住をされて、家族も含めますともっと人数が多いと思いますが、そういった形で今いろんな取組をなさっていただいております。先程申し上げました11月下旬に開催をいたします、国際会議におきまして、その岩城社長が基調講演を行うということでもございます。またこちらもご注目もいただきたいと思っております。そのアステナホールディングスの岩城社長でございますけれども、将来の可能性は教育にあるということで、今現在珠洲市の中学生高校生を対象とした、ワークショップなどにも精力的に活動をしていただいております。

もう一つ珠洲市では世界農業遺産の取組、そしてまたSDGsの取組、そしてやっぱり人口減少を解決していく上でですね、移住・定住を促進するためにはやっぱり珠洲の魅力を高めるといったことが重要であるということで、今現在第２回目の奥能登国際芸術祭を開催中でございます。11月５日までということで残り会期の日数もわずかでございます。昨日までに大体39000人ぐらいが訪れていただいております。第１回目は2017年に開催をいたしましたけれども、珠洲市のそれぞれの地域の魅力や特徴をアートで表していただいて、これまでなかなか思うように伝わらなかった珠洲市の魅力を伝えることができたという風に思っておりますし、この芸術祭を通して珠洲市から人の流れ、時代の流れを変えていきたいという思いでおります。こちらも、皆さんもしご都合がつけば、ご覧をいただきたい。そのようにも思っております。そんな中で少し珠洲市にもようやく変化が現れて参りまして、今年度に入って上半期、ようやく転入超過が実現をいたしまして、これまでのいろんな取組の成果が現れてきたのか、そしてまたこういう動きをこれからも継続していきたいと思っております。特にコロナ禍において、いろんな社会の変化が加速されてきたと思います。そのうち珠洲で暮らしながら、首都圏の、あるいは大都市の企業に勤めることができるそんな時代が、そういうリモートワークですとか、そういったことで可能になってくると思っていたんですけれども、それがもう今すでにそういった時代に入っているということだと思います。こんな状況でもございますので、これからもさまざまな取組を通してこの転入超過を持続させていただきたいという風に思っております。以上です。

【小谷】 はい。凄い事例をいただきました。転入超過、過疎からの脱却という。素晴らしいGIAHSを通して良い取り組みをしている街には大企業も人も資本も資源も向こうからそこにやってくると言うような素晴らしい事例をいただきました。ということで能登の事例でした。続きまして、大崎の高橋課長お願いいたします。

【高橋】 さっきの続きになる訳ですが、お時間がないということなので手短に要点だけ。見える化をしなきゃいけないということで、さまざまな取組をしてございます。まず資源が分かりづらいということなので見える化を色々やっている。ウェブサイト、当たり前ですけども色んな映像を撮っています。QRコードの付いた看板を各地に設置をいたしまして、資源の大事さというのを資源の保全に携わる多くの人の言葉を通じて、お伝えをする。これが四カ国語で提供されておりまして、こういったものを見ていただけるようになる。時と場所を選ばずって言ったら変ですけども、見ていただけますよと。

ブランド認証を進めています。まだまだでございます。まだ680haほどしか認証ができてございません。３年目の取り組みでございます。680haと言いますと、大崎耕土の栽培面積の２％にしか相当しない部分でございます。まだまだ頑張りたい。

日本酒、やはり11ある蔵、こういったところの取り組みもっと広げていきたい。GI認証を受けたものをこういったものも生産する人が少なくなってる、守っていかなきゃいけないという部分で頑張っています。お米の栽培にはモニタリングを必須要件化しております。これは佐渡から勉強させていただいた部分です。我々の狙い、先程佐渡市長もおっしゃっていた通り、生きものを通して自分の米作りあるいはその地域の文化、大切さ、生態系、それを築く農家がいる地域というのを大崎耕土の農業地域としてのイメージ、これを時間を掛けてでもいいから続けていきたい。こういった取組に地元の農業高校、３つの農業高校が反応して、自らも作って認証を受ける。それに生きもののモニタリングがスタートして

いる。小学校１年生から４年生約6800人を対象に副読本の配布をして学校の授業の中で、これまではどちらかと言うと学校の授業の外でやってたんですけど、授業の中にきっちり組み込んでやっていく。ということで大崎耕土を子どもの頃から学んで地域に対する誇りを持っていただく。さらに、高校生、大学生向けには探求型学習の手助けとして大崎耕土SDGs QUESTというようなものを配布をさせていただいて、大崎耕土を学んでいただくという形で教育の取り組みをさまざまやっております。こういった中で、今盛んに取り組んでいるのが色んなヒントにもなるでしょうけども、農泊を軸にしながらこれから進めていきたいな、農業農村を考えていきたいなという風に思っていまして、コロナによってオンラインっていう環境が一気に進んだっていう部分もあって今取り組んでいるのは旅前のオンライン、旅中の農泊、旅後の物の販売、この３つを循環させるということに注力しています。屋敷林の保全ということでも取り組んでございます。屋敷林ですけども我々さっき言った田んぼ、鳥、湿地しか見てなかったんですが、農業遺産を通じて武内先生も色々指導いただいて、ずっと引きで見て本当ランドスケープで見ていった時に非常に面白い繋がりがあると。人が住んでる林の中と、田んぼと水路とが全部が繋がっていて、全てがないと大崎耕土の生物多様性は維持できないというようなことがあると。これが維持できないということは農業をする時に害虫を捕食するような生きものもいなくなる訳ですから、農薬に頼らざるを得ない栽培方法を続けていかなきゃいけないと言うことなので、農村景観を守ることが大崎耕土の農業を守るということに繋がっていくものだという風に気づきを得たところでございます。以上です。

【小谷】 ありがとうございました。先々月も農泊の大きなグリーンツーリズム全国大会が大崎で開かれたばかりです。改めてツーリズムっていうのは、旅は最大の学びのきっかけ、始まりだと思うんですね。先ほどの能登の事例も含めて改めてGIAHS地域の教育という観光と教育を繋げていくっていう視点も高橋さんからいただきました。続きまして、相田さんお願いいたします。

【相田】 はい。GIAHSに認定されたことにより改めて農業と芸能っていうのが繋がってるなということを本当に感じております。豊作を目指し芸能を通して、その願いを表現する、無事に収穫できたことの感謝として芸能を通して感謝を表現する。そんなことを農業を仕事にして特に感じています。私自身は農業を仕事とする前に大学院で土木系の研究開発をしておりまして、その後ゼネコンでサラリーマンを経験し、８年ほど行政で仕事をしながら、今から12年ほど前に農業の世界に入りました。父も実は公務員からサラリーマン、農業と同じ道を歩いています。私自身は家業を継いだというよりは、さまざまな職種に就いたその先に、たまたま農業の業態を知って選択した感じが強いです。研究者やゼネコンやサラリーマン、行政、その先に米作りをしていく中で全てが繋がっています。同じように私の血と肉には芸能の鬼太鼓やふるさとの幼少期からの生活が存在しておりまして、そちらも全て今繋がってるなっていう風に感じております。そういった意味ではGIAHSというのもいろんな意味が繋がってるというのを感じております。

【小谷】 ご自身が凄くあの鬼太鼓に関わっているおっしゃる話があるのかな？と思ってたんですけど、それは後で今ので良かったんですかね？すごく関わってらっしゃるんですよね。

【相田】 そうですね。右上の写真は家の田んぼにある祠ですが、実はうちの息子が舞っている写真です。あの面は私が小学校の時に地域の方から作ってもらった面です。戦前に途絶えた鬼太鼓を小５の私達が「復活をしたい」と地域のおじちゃんたちと話をして復活した鬼太鼓の面を息子が今付けているという、一回途絶えたものが復活をして、さらにもう30年経ち、時代はこうして受け継がれていると感じています。

【小谷】 そうなんですね。バリ島のバリにも有名なユネスコの世界遺産ですけれども、ジャティルイの棚田っていう、村が丸ごとライステラスっていうすごいところありますけど。あそこでもまさに農業してる人が夜になるとケチャのアーティストになるんですよね。

【相田】 そうですね。バリを知る方は佐渡島がバリとよく似てるっておっしゃいますね。

【小谷】 本当に耕す民であり、夜は祭りの氏子でありという能文化を実践されている相田さんでした。続きまして尾畑留美子さんお願いいたします。

【尾畑】 江戸時代末期、佐渡島には実は250を超える酒蔵がありました。佐渡の島づくりっていうのは、どこから始まったのかっていうと佐渡金山なんですよね。人口の増加、それからそれに伴う圃場の拡大というところから発展し、もちろん島の自然環境の多様性という背景が大きくそこにあったわけです。一方、国内の酒市場というのは1973年をピークに縮小なんです。縮むマーケットの中で佐渡島というのは一大消費地から遠いところにありますので、物流費がかかるとか冬に船が欠航しちゃうとか正直離島というハンディがなくはない。そういう部分があったんですけれども、しかし2008年から佐渡のシンボルであるトキが放鳥されて、そして2011年には佐渡がGIAHSに認定されたということで佐渡の地域環境のストーリーが見える化して付加価値がつき始めた、ちょっと節目になる訳です。弊社では2012年から佐渡相田ライスファーミングさんのトキと暮らす郷づくり認証米牡蠣殻農法のお米を酒米として使わせていただいております。こういうものを使うことによって地域循環というものを見ていただこう、伝えようという思い。そして伝えるだけではなく国内外で多数の賞を受賞する味わいを生み出しております。

それから2019年からは非常にGIAHS的な風景とも言われております、岩首の棚田米コシヒカリを原材料としてお酒造りを行っております。飲めば飲むほど棚田保全や地域の持続、それを支援するお酒ということで、クラウドファンディングをしたんですが、この時も多くの若い方から御支援をいただきました。こういった佐渡島ならではの原材料を使用することで、他にはない味わいのお酒というものを通して、佐渡の環境を伝えていきたいということでございます。同時にお酒の市場にも変化が起きてきました。このグラフをまたご覧いただきたいんですけれど、青い方は全体の国内出荷で落ちている訳なんですが、黄色いグラフは伸びております。これは一本あたりの単価を示しておりまして、マーケットは国内縮小しているんだけれども単価は上がってきていると、即ち高付加価値商品を求めているお客さんが増えてきている。特に環境系ですよね。そんなタイミングでトキの認証米であったりとかGIAHSは非常に大きなメッセージとして注目されてきているわけです。実際、流通関係では佐渡のお酒ということで、括りでプロモーションしたいというような声が上がってきていると思っておりますし、お酒にとどまらず食材や観光コンテンツと言う観点からお話をいただくことも増えていて、佐渡全体のブランディングに繋がっていると思います。こういったお酒は海外にも弊社輸出をしておりまして、今現在、約15か国に出しております。海外においてはサステナビリティーというのは早くから関心の高い分野でありますし、安心安全の観点からも、こういったお酒は販売に良い影響をもたらしていると言えます。例えば、昨年はアメリカのワイン雑誌に佐渡の環境とお酒造りということで御紹介をいただきましたし、9月にはジャパンタイムズのSATOYAMA大賞というものをいただいたりしております。こういったことで活動にご注目いただけるようになったということは非常に大きな変化かなと思っておりますし、今まで当たり前に周りにあった佐渡特有の環境っていうのに改めて目を向けるきっかけになり、また価値を再認識して自らの活動を発展させていくということができるようになったっていうのがこの10年の大きな収穫だと思います。

【小谷】 ありがとうございます。改めて15か国にこの尾畑酒造が出ているということはつまり佐渡を15か国に広めているということにも繋がっているなというふうに感じました。それでは、続きまして渡辺市長をお願いいたします。

【渡辺】 はい。ありがとうございます。GIAHS認定して、当然売れなかったお米が全量を売れて、ずっと足りなくて、もっと欲しい欲しいと言われる産地になっておりますので、お米人材ブランド化っていうのは一定程度可能だったという風に思っています。それでもう一つですね、大事なところは個人に認証をしますので、この基本的なブランドで、それぞれの人がブランド化、自分の営業、起業。ブランド化ができるということも一つ大きな成果だったと思います。その一番の例がやっぱり酒蔵さんだと

思ってます。尾畑さんをはじめ、トキ認証米のマークを貼っていただいて販売していく。どこまでが付加価値になるのか数字は研究しておりませんが、しっかりと佐渡全体のイメージを、作っていくってことが可能になったってことは一つ大きいと思います。

相田さんからも言われたように、自信を持ってこの農村文化が価値があるんだということを、お伝えできるようになったというのも一つの大きなポイントかという風に思っています。今、人口減少で地域コミュニティが非常に厳しくなっている。例えば祭りが守れなくなっている。これが実は農業と非常に関係があるんだよと。だから、お米の産地として取り組みます。それで消費者の皆さんもお願いしますって繋がりができてきたわけですね。ここが僕は一つ大きいと思います。現実的には能にしろ、今観光ツールの素材になっておりますし、鬼太鼓なんかも見たくて来られる方もたくさんいらっしゃる。そういうところがGIAHSという一つのテーマを通してお伝えできていけるっていうところが非常に大きいと思いますね。

実は目に見えないというんで私自身が本当に大きいなと思っているのは昨日、中井事務次官からご提案いただいてる、生物多様性の社会づくり、エネルギーの社会づくり、循環型社会づくり、この３つの柱がこのトキの保護やトキとの共生、そしてGIAHSという取組を通して何となく根付いてきているっていうのが非常に大きいんだと思います。今日いらっしゃいますけど、髙野初代市長が一番最初に、この島は環境で行くんだって言った時、環境がお金になるかっていうご批判がたくさんありましたし、現場で働いて我々もそういう風にだいぶ言われましたけども、環境はお金じゃない、地域づくりになるということです。この一歩がGIAHSだったという風に思っています。ですからGIAHSの考え方を通していくと日本全体で国土をどうやって守ってそこに住む形態、そこの自然、そこを守っていくことが地域づくりになって、防災になって、それで人間は人らしく生きる暮らしを支えることになるという国土の本来の姿、日本の本来の姿っていうところになるのではないかという風に思っております。人口は全体で減ってきますが、そういうものをしっかり大事にする市町村、珠洲市さんがそうですけども、そういうところにやはり移住・定住という本物の姿が出てくる。もっともっと世界農業遺産を通して広い視点で地域づくりを考えていくということが、今、与えられた宿題だという風に思っておりますので、ここについてもまた努力をしていきたいという風に考えております。以上でございます。

【小谷】 はい。ありがとうございます。転入超過を目指して、ぜひ頑張っていただきたいと思います。環境がお金になるんだ。資源になるんだっていう考え方と、そして改めてこの農村文化がお金になるんだって言うとあれですけども、むしろよそから来た人は歌舞伎や鬼太鼓を見たいというね、それがむしろ観光資源なんだという考え方だと思います。１年前の2020年２月にコロナでぎりぎりの時期に私来させていただいて片野尾の歌舞伎の舞台を組んだけど、コロナで演じることができないと、歌舞伎の舞台だけ見せてもらいました。そこで子ども達からチャンバラを見せてもらって、色んな形でそういうふうに受け継がれていくことが素晴らしいと思いました。武内先生改めてGIAHS、日本に今、11の地域が認定されていますけれども、GIAHSの認定を受けて色んな変化が地域に起きていますけども、理想的な影響変化って言うのはどのように捉えていらっしゃいますでしょうか？

【武内】 まず、認定された地域が非常に地域の誇りを持つようになったということが非常に大きいんじゃないかと思うんですね。ややもすると、農業あるいは林業、水産業を取り巻く状況を考えると、非常にネガティブな考え方に陥ってしまいがちなところをいやそうではないんだと。むしろこれからは、そういうものが社会的に再評価される時代が来るんだと。今まさにそういう風な転換点にあるんだという風にみんなが思い始めるきっかけになったんじゃないかなと私としては、大変嬉しく思っております。それと、認定地域がどんどん増えるということです。私はもっと増やそうと思って農林水産省の認定事業として日本農業遺産っていう制度も提案したんですけれども、これも裾を広げることに非常に繋がっている。私が今一番気にしているのは日本農業遺産は、世界農業遺産のちょっとランク下だっていう風な位置付けをされると非常に困ると思っていて、むしろ日本農業遺産としての独自の評価基準、例えば

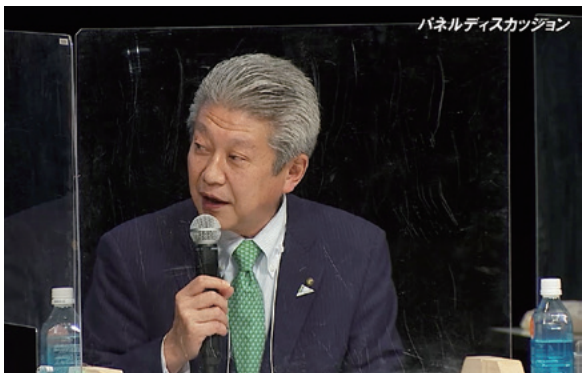
日本は災害が非常に多いから、そういう災害に対するレジリアンスが高いとか。それから付加価値を付けていくっていうんで私あんまり好きな言葉じゃないんですけど、第６次産業化っていうのはですね。１×２×３＝６という足すんじゃないと言ってるんです。足し算だと１が０になっても足し算は成立するけど、かけ算では１が０になるとかけ算で成立しないっていうことから、第１産業は根本だっていうことを言ってるんです。要するに、そういう生産から、販売そして最後に加工品を作り上げていくような、一連の流れを含めて評価していくような、そういう風な取組とか。色んな取組が今進んできているということで非常に良かったと思います。それから認定地域同士がお互いに協調して知恵を出し合うような感じになりました。まだ、世界農業遺産の日本での連携組織が、福井県が中心でやってたんですけどもちょっと弱いので、もうちょっと強化していかなきゃいけないなと思ってます。そういう国内の連携も、やはりこれから大事にしていって互いに意見交換をし合って色んな新しい知恵を見出していくということが大事だという風に思います。そして、更に特に東アジア農業遺産学会っていうのができているんですけれども、国際的な視点というのも皆さん持つようになって、日本の農業と世界の農業との間の関係性をより良く認識していくようなことになってきたんじゃないかな。特に世界農業遺産はFAO認定ですから、意識せざるを得ないですよね。ということが議論されるようになってきたっていうことでは、色んな意味で関係性が発展してきているという風に思っています。

それから、もう一つ、今日の議論を聞いていまして、改めて感じることは、今までの行政ってシングルイシューだったんですね。農業なら農業だけ、観光なら観光だけ、土地改良は土地改良だけ、という風にして行われていた行政の仕組みが必ずしもGIAHSのような取組にはふさわしくないですね。むしろ合わせ技でやっていく。その合わせ技でやっていくことが新しい価値を生んで、そしてそれがまた文化などと繋がることによって対外的な発信力も出てくるというような横つながりの構造を今必要だという状況になってると思うんです。今までは国の組織もそうなんですけども、農水省と環境省っていうのは、例えば里山は環境省でGIAHSは農水省だとか言って、相互にあんまりお互いに密接な関係を持たないというようなことが問題だったんですけども、最近環境省と農水省で協定を結びまして、お互いに里山とGIAHSを入れ子の構造にしていこうという風な方向に今なっているんです。やっぱり佐渡のような自治体でも、そういう横つながりの展開が必要だと思います。今日ご発表いただいた色んな取組については、まさにそういう横つながりで発展をしていくっていうような形の取組だと思うので、これがGIAHSというスローガンの元に展開されてきているということは、私は大変いいことで大変嬉しく思っています。以上です。

【小谷】 まさに環境と農業という国でもみどりの食料システム戦略というのを進めて行こうとしています。脱炭素社会を受けた食料の仕組み、これから新しく環境を踏まえた農業生産ということが言われています。それはむしろGIAHS農業遺産の地域は先進してリードしてきたわけですよね。改めて能登と大崎と佐渡の三者がここに募っていますので、ここから農業遺産全体を連携して日本全体を底上げするリーダーになっていただきたいと思います。

それでは最後の大きなテーマとなります。今の武内理事長の話も受けまして、これからの理想的な農業、GIAHSをうまく軸にしたこれからの地域への展望ということを語っていただきたいと思います。また、こちらも順番に珠洲市泉谷市長からお願いいたします。

【泉谷】 持続可能な農業を目指していく上で、世界農業遺産の取組がまさに軸とはなると思うんですけれども、私の思いとすれば先ほどの武内先生の基調講演にもございました通り、この世界農業遺産という色んな取組にSDGsの観点を取り入れていく、加えていくということが大事じゃないかなという風に思っております。珠洲市は先程来申し上げておりますように、人口減少、また高齢化、地域課題の先進地って言いますか、本当に課題が多い。しかも非常になかなか厳しい地域でございます。そういった意味で、そういうSDGsの観点も含めて珠洲市で通用する地域課題を解決するようなビジネスっていうのが、もし生み出されれば、これはもう本当に色んなところで通用するということにもなろうかと思いますので、今現在、珠洲市のSDGsラボにおきまして



新事業プロジェクト研究といったものも、進めております。

農業はもちろんですけれども、そういった意味で色んな面で、さまざまな取組が持続可能となるようにSDGsの観点を取り入れながら色んなビジネスに発展していく、新たなビジネスが生まれていく、そういったことに、これから力を入れて取り組んでいきたいという風に思っております。今日は環境省の中井事務次官もいらっしゃっておりますし、また渡辺佐渡市長さんにも色々とこれからまたお願いもしたいと思うんですけれども、2025年に佐渡以外でのトキの放鳥といったことも予定をされているということでございます。先程申し上げましたように、能登はトキが最後まで生息をしていたといったこともございます。そしてまた近年、佐渡からトキがやってくるといったこともございましたので是非、珠洲ということに限らず、能登の里山里海、世界農業遺産に認定をされた４市５町のエリアとして2025年のトキの放鳥といった地域に認めていただければと言いますか、そういったところに向けて柱ができればと思いますので、またどうぞよろしくお願いしたいと思います。

【小谷】 はい。ありがとうございます。色んなところで広域連携って言われてますけども、トキに県境はない訳ですもんね。本当に能登とつながりあえたら嬉しいなと思います。そして、武内先生の受け売りですけども、SDGsもGIAHSも元々国連の持続可能な未来をって言うことで生まれた、そもそもの親母体が一緒ですので、SDGsとGIAHSはゴールが一緒だということで大規模集約、グローバルからの脱却、循環型で小さな多様な多面的な家族のものを大事にしていこうということですので、是非、何か企業もまさにSDGsに取り組みたいならばGIAHSと連携すればそれが達成できますよというアピールの仕方もあるのかなと思いました。続きまして、それでは高橋さんお願いいたします。

【高橋】 珠洲市長のおっしゃってた通りというのが本当のところでございます。私の方からは今、実際に大崎も含めて、ご紹介をさせていただきたいなと思うんですけども、新潟なんかでも田んぼダムというのをやられてると思うんですけども、日本の農業遺産の認定要件レジリエンスの話とかもあるわけですけれども、認定の動きとして世界農業遺産が地域に与えた影響の一つとして、これがあるんだろうなと。度重なる水害に農業農村がどんな力を発揮できるのかっていうことで、地元では現代版巧みな水管理っていう言い方をして普及に取り組んでいまして、今ちょうど300haで実証実験を行っています。地域が非常に、一体になってやらないといけないことで、下流域の水害を防ぐ為に上流域の農家が協力するという大きな取組です。そういった視点を持たせていただいたのも、やはり世界農業遺産の認定が非常に大きかったなと思います。こういった農村の資源を活用した水害の対策等々が、これから新たな農業遺産の視点として色々出てくるだろうなっていうのが最近感じているところです。

もう一点、人口減少。我々の自治体も人口減少しております。人口減少は生産年齢人口の減少に繋がって農家の数が少なくなる、担い手が少なくなるということにつながっています。それが逆転できれば非常に良いですが、こういった中で次どうしていったらいいのかな？ということを考えると、農泊に戻っちゃうんですけども、あれの延長上で最近地元の人たちと話してるのは泊まってお金を貰うだけじゃなくて、泊まって農産物をお礼として渡す。仕事をしてもらいに来るというようなことでワーケーションのさらに一枚噛ませた２つのワークをするような感じのものを是非やれないかというようなお話が出ています。

農作業そのものを手伝っていただかないと、もう回らないって言う地域もやっぱり出てきています。そういったところ、特に家族農業をやられている地域にはそういった仕組みも必要になるだろうなということで、少し勉強させていただいておりました。いずれにしても人口減少問題っていうのは色んな地域に関連することで、農業遺産の視点で見ると、さまざまな角度から見ることができると言うことで色んな気づきがあるかと思います。我々も先程武内先生から横の連携あるいは認定地域間の連携というのがございましたが、山形の方も紅花の取組が進んでおったりしておりますので、連携しながらそういった色んな視点から見れるような農業遺産の推進あるいは農業遺産の普及というものを我々も一地域でございますけれども、進めてまいりたいと思います。

【小谷】 ありがとうございます。上流は下流を思いやり、お互いの流域連携をするという考え方をいた

だきました。宮城県は「森は海の恋人」という畠山さんのメッセージがあり、環境省でも森里川海の連携が重要と言われてますけれども、改めてつながり、連携ということがキーワードとしていただきました。続きまして相田ファーム相田さんお願いいたします。

【相田】 はい。農業や漁業等の１次産業を営みながら芸能や地域を愛し、そこで地域に根ざした暮らしを営んでいることが実は今の時代、少なくなってきています。ただ、そこに対して世界が評価をしていることを私たち自身が感じていくべきだと思いますし、改めて武内先生からありましたが、そこに「誇り」を持って次の世代に繋げるということを、言葉ではなく、その背中を見せつけていくことがとても大事なのかなっていう風に感じております。農業も大規模な会社的な経営ではなく、それぞれが中小規模の経営を行って地域の活動や祭り等にも積極的に参加し、それらを支えられる業態でなければいけないと感じております。それこそが地域に見せ続け、続けていく農業を含めた一次産業を見せる背中だと私は思います。持続可能な農業への展望の中にさまざまな政策がありますが、結局は現場にいる私たち自身が次の世代につなげていく意思があるのか。そして、それを受ける側の持つ人間をどれだけ生まれるようにするのか。そこが一番のような気がします。私自身は父から農業を継いでほしいっていう風に言われたことはありません。行政を退職し農業を継ぐ時も、父は冷静に、このご時世農業ますます悪化するけど大丈夫か？家族支える自信あるのか？という風に言われました。本当に悩みましたが、でも難しいからこそ、だからこそやりたいなと自問自答した結果、自分の中で出た答えでした。それは今でも変わっておりませんし、もしかしたら簡単だったら農業は継がずに行政職を続けていたかもしれません。そういった思いで繋げなければという強い意志が生まれたことを今でも覚えております。

また、私自身が決めたことですが単純にそういう話ではなくて、父や母、近所のおっちゃんおばちゃんたち、私が佐渡を離れている間、祭りを繋げてくれた先輩や後輩や友人たち、そして大きくは、この佐渡島がその大きな背中を私に見せ続けてくれたおかげだという風に感じております。そして、私自身を農業へ強く推し進めてくれたのもそうです。今も常に押されておるような感じがしておりますが、それこそがもしかしたら世界が認めたGIAHSという部分ではないかなっていう風に感じます。

GIAHSが生む影響はそこにあるんじゃないかっていう風に感じながらGIAHSのことを学んでおります。

【小谷】 はい。ありがとうございます。お父さんが継いでって言わなかったけども、難しいからこそやりたいと思ったっていう。

【相田】 そうですね。実は今の朝ドラでも言ってたセリフなんですよね。朝ドラ「おかえりモネ」では本当に色んなことを毎日学んでいたんですが、本当にその言葉を聞いた時に、あ、私もそうだったなというのを思い返して、すごくこの言葉は大事にしていきたいなっていう風に感じております。

【小谷】 はい。ありがとうございます。お隣の高橋さん、おかえりモネの地域ですけれどもね。本当に課題があるからこそチャレンジしたいっていう人はいると思うんですね。昨日の農業新聞でしたか、カヤの実を加工する26歳の女子が佐渡で新しい代表として生まれたっていう新聞がありましたけれども、むしろカヤなんて忘れられた農産物のように一般的な農業を知っている者には思いがちなんですけど、むしろ新しい人はそれがアーモンドのように香ばしくておいしいと。そういう新しい視点で課題があるからこそ若者が入ってくれる。そういうことも感じました。相田さんありがとうございました。続いて尾畑さんお願いします。

【尾畑】 この写真は某国のワイナリーのブドウ畑でございます。こういった一枚の写真で世界の色んな人が、ここきれいだよなって思う訳で、よく憧れたものでございます。でも、実は佐渡にも同様に世界共通の感動をもたらす風景がある。それは海外からのゲストを案内して気が付きました。例えばこちら、国中平野の相田さんの田んぼがある辺りなんですけれども、こういった田園風景。そして棚田の風景、そしてもちろんトキが羽ばたく。こういったところ

です。こういった風景に触れてかれらがよく言う３つの言葉があります。それがアプリシエイトピースフル、スピリチュアル。日本語的に言ったら恩恵であるとか里山、八百万の神といったところでしょうか。これらは本当に日本の里山のイメージを指す言葉だと思います。そういう意味でも佐渡島って言うのは、まさに日本の縮図なのではないかと考えるわけです。私達は、その里山、日本の縮図で造ったお酒というものを色んなところに届けていて、一部は海外にも届けている。そして、そんなお酒を飲んだ人達がまた佐渡を訪れてくれる。こういった資源と人の循環というものを行っていると思っております。

そして、先ほど申し上げたように、以前、佐渡は東京などの消費地から遠いということでハンディがあるんじゃないかと、私は思っておりました。でも、今はこうやって東京を介さずとも人も物も佐渡から世界と直接繋がれるっていう風に感じるようになりました。これも一方通行の物流っていうことではなくて、自らの地域で循環をしている自信と誇りが持てたからかなと思います。

学校蔵での一週間、酒造り体験プログラムというのも進化をしてまいりました。近年は海外からわざわざ参加する方が増えていまして、2019年は７名、そして今年は国内在住なんですが外国人の方が６名参加してくださいました。このような皆様が、佐渡の持続可能な地域環境というのを体験して、それをまた母国に発信してくださるということで、循環の輪がどんどんと大きくなってきているんではないかと思います。

また、参加者がリピーターになってわざわざまたフランスから来たりとか、そして実際に移住者も生まれてきているというようなことが起きております。今後の展望についてなんですけれども、今現在は、廃校活用して、再エネを取り入れて、お酒造りをして、体験プログラムであったりとか、学校蔵の特別授業というのを行っております。今後は、もっと長期滞在のプログラムを実施して世界中から訪れる人達を増やしていきたいと考えております。そして、加えて地域の人や旅行者も気軽に訪ねていただけるような、佐渡の様々な素材とコラボレーションした短期のコンテンツを開発することで、世界の人、それから地域の人色んな人達が混ざって体験していただけるような場に育てていきたいと思っております。将来はカーボンニュートラル。そして、その先にはカーボンゼロを目指してエネルギー、資源、そしてヒトの循環でお酒造りを行えるようなサスティナブルブリュワリーを実現したいと考えております。

最後のスライドになります。佐渡島というのは高齢化、人口減少など日本の課題が詰まっている課題先進地と言われてきた訳なんですが、見方を変えれば課題を解決するチャンスがいっぱいある課題解決先進地とも言えるわけです。GIAHSに選ばれた循環型農業こういったものによって、働き方の多様性、それから生活の多様性というような豊かさももたらしてくれるんではないかなと思うようになりました。佐渡は全体の人口は減っていますが、移住者はとても増えていると聞いております。実際当社のスタッフにも移住者が３人いますし、彼らはWワーカーというかスラッシャーということで、まるで２つの車を乗りこなすようにしてオリジナルのライフスタイルを確立しているなと思っております。循環するって言う言葉のいいところって言うのは一方通行だと、何かこう色んなことがやればやるほど減っていくような、消耗しちゃうって言うような雰囲気があるんですけども、循環するっていうのは、回しながら人との繋がりとか色んな資源を何かを増やしていけるんではないかなと。そういった希望を感じるというところがとても素敵なスタイルだと思っております。

ちょっと前まで、ガラパゴス的に遅れていた佐渡島が、今は多くの場所で失われてしまった環境をまた再び作り出している。だからこそ、離島だからこそ、島国日本の希望にもなれていけるのかなという風に思っております。こういう希望の島で、またお酒造りを頑張っていきたいと思います。

【小谷】 最初は家業が嫌で東京に出ていった尾畑さんですけれども、95年からいち早く取り組んでおられるということで、先程のサスティナブルなブルワリーという。もう思いつくこと、全てこれ以上ないって言うぐらいやれること全部おやりになっているというような素敵なサスティナブルな酒造りを伺いました。それでは最後に渡辺市長と、武内先生ですけども、まず渡辺市長をお願いいたします。

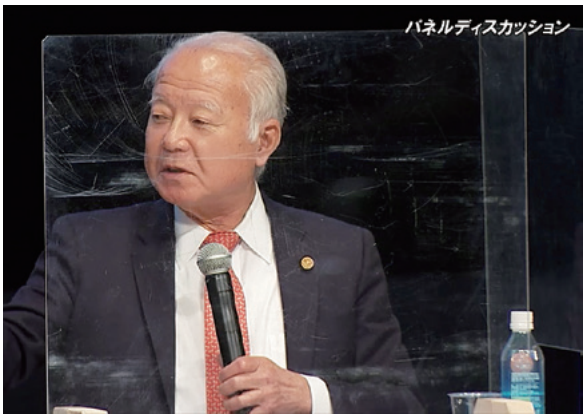
【渡辺】 ありがとうございます。これからの展望ということなんですけども、先般グリーンディスティネーションズっていう国際認証機関から持続可能な観光地世界のトップ100に佐渡が選ばれています。佐渡の方ご存知でしょうか？世界のトップ100です。その中身が何かって言うと、トキとの共生社会が素晴らしいということなんですね。トキとの共生社会って実は何かと言うと、人の暮らし、農業、GIAHS、GIAHSが何かというと人の暮らし生活っていうことになってくる訳でございます。

この佐渡の取り組み自体が、このように国際的に非常に評価される。これを実はこれからの取組として、こういうものをどう我々の肉にして血にしていくのかっていうことなんです。今、外からこういう風にニンジンをぶら下げられているわけですよ。世界のトップ100ですよ、佐渡市さんはって言われてるんですよ。これをどうお客様に伝えて多くの人に来てもらえるか、観光っていう拠点で考えるのかもしれないですけど、私実は観光っていうのはもう観光という考えではなくて、もうほぼ交流っていう考えで行くべきだろうと。それが一泊二日であったり三泊四日であったり一週間だったり一か月であったり季節住であったり移住であったり、そこに全部繋がってくるんじゃないかという風に考えています。ですから、申し上げた持続可能な観光地というのは単なる一つの問題でございまして、世界農業遺産、能でもそうです。鬼太鼓でもそうです。エネルギーもそうです。そういうものがしっかりと循環する社会の中で、打ち合わせしてる訳でございませんが基本的に相田さんと尾畑さんと同じ話になりますけども、こういうものが地域でしっかり循環をして低炭素環境に優しい島、そこに文化、スポーツ、歴史が溢れる。例えば歴史で言うとこういうことがあるのですよ。世界遺産を目指している佐渡金山ですけども、佐渡金山は1601年開山ですけど当初はばっかばっか取れるわけですよね。金がもう山の上に出てる訳ですから。当時、日本全体で1000万とか2000万という人口で、佐渡に８万人いたって言われてる訳ですね。当然お米がいる訳ですよ。貨幣文化も生まれてくるわけです。当然わらじを売ったり、全部農業品になってくる。それが今世界農業遺産の軸になっている。金というのは３回程大きな技術変革があって、どんどん取れなくなる訳です。何が起きたかって言うとその時、北前船に積んで行ったのは佐渡のお米って言われてる。佐渡のお米というのは、金山、ゴールドラッシュってみんなそうなんですけど、金が取れるときはうわっと増えて金がなくなるときはざっと減っていく。その時に地域経済を支えたのが佐渡のお米ですね。これだけ世界文化遺産とも非常にGIAHS っていうのは関係がある。ただ、こういうものを僕がうんちくで語っているだけではお話にならない訳です。地域が理解をしながら、きちっとした歴史とか文化、お米だけじゃない住むということ全てにおいて、どういう風にくっつけて磨き上げて、この島全体の魅力にしていくかっていうところが、これからの大きなテーマだと思っています。

今、移住定住も大体500人ぐらい来ていただいております。もうあと一息、もうちょっとかかりますが、何とか社会減をゼロに近くしていきたいという強い思いでおります。そのためにやらなきゃいけないことは、地域の一個一個の磨きあげ。住んでいる人が、理解して語れるようになっていくってことがすごく大事なんだろうと思っています。

住んでいる人が誇りを持てることによって、ここに来て住みたいなと思って、珠洲市さんみたいに、地域の総合力っていうのが試される。一個だけじゃ駄目だっていうことで、総合力を磨いていくには世界農業遺産である文化、歴史、そして食、これらをしっかりと一個ずつ磨き上げて地域の人と連携をしてやっていく。

今、佐渡は企業が失敗しない島、日本一失敗しない島というテーマで、若者の起業をどんどん促進しておるところでございます。起業も、去年で70から80ぐらいですかね。そのぐらいの方々が起業を展開され、そのうち島外から来られた人が大体3、40ぐらいだと思ってます。島外の人も頑張っている。外から人と資金と知恵をどんどん入れてくる。それを佐渡に住んでいる企業の皆さんと一緒に取り入れながら、佐渡の経済、暮らしを回していく。これが、僕は世界から認められた取組、そして文化遺産の取組でもあるわけです。こういうもの一個一個がツールであって、このツールをしっかりと磨き上げて、循環型社会を作っていく、ここが非常に重要だと思っておりますので、ここは本当に職員と一緒に、何とかしたいということで頑張っておりますので、皆様方からご理解いただいて応援いただいて、全世



界に発信しながら頑張っていきたいと思っております。ありがとうございます。

【小谷】 渡辺市長、ありがとうございました。世界農業遺産というのは、農業だけじゃないんだと。農村の暮らし、島の暮らしそのものが遺産なんだと、世界ふるさと遺産なんだという。それがこの佐渡で実現されていると受け止めました。それでは最後に、武内先生お願いします。

【武内】 はい。ありがとうございます。渡辺市長から世界文化遺産への取組も含めて、ご紹介があったわけですけれども。私は世界文化遺産、世界農業遺産、それから佐渡の場合は国定公園、それからジオパークこういうものを、それぞれの取組として捉えるだけではなくて、総合化して佐渡の一種の自然人間社会ビジネスみたいなものに取りまとめて展開していくっていうような方向性があるといいんじゃないかなと思います。

そして、それぞれがお互いを参照し合いながら、取組の総合化を進めていくと。これはこれ、あれはあれ、ではなくてですね。全体として佐渡の底上げに繋がるような、統合的な地域政策の、いわば大きな傘の下に世界文化遺産や世界農業遺産やジオパークといったものが存在している、トキの野生復帰事業も存在しているという風な。そういう一つ大きな絵を描いていくっていうことが、これからの方向性としてあるんではないかと。そういう中で一番考えなければいけないと思うのは、ポストコロナですね。色んな意味で、日本はデジタルトランスフォーメーションが遅れてるってことが分かりましたよね。だから、そういうものをうまく活用して、今日のシンポジウムも、リアルとバーチャルを組み合わせている訳ですよね。こういうことをさらに発展していけば、働き方も変わっていくんです。佐渡にいながら東京の本社と繋がった仕事ができるとか、佐渡にいながら大学の授業が受けられるとかですね。そういった可能性も出てくる訳で、そういうものも含めて今の統合化の方向性を考えて、離島であるというハンデがあっても、色んな形で克服できるっていうことがあり得るんじゃないかと。最近で言うと宅配便で色んなものが調達できるようになってるっていうのは、すごく優れた仕組みでクロネコヤマトさんを表彰したことがあるんです。田舎で荷物運ぶだけじゃなくて人も運ぶんですよ。そうするとバスが無くなったところでも、クロネコさんが高齢者を運んでくれるという仕組みを開発したりしてるんです。そういう意味で、情報化がなければ駄目ですね。つまり、会社に個別情報が常に入っていかなければ、そういうサービスはなかなか展開できない、と思うんです。展開の仕方はまだ幾らでもあると思いますので是非、佐渡だけではなくて日本の色んな地域で、特に世界農業遺産の認定された地域でですね、こういうことを取り組んでいただけると大変良いんじゃないかなという風に思います。

【小谷】 ありがとうございました。小さな島の課題は、まさにこの日本列島の縮図である。今ここで小さく変えていけることを始めれば、それが日本がリードする事例になるという風に希望を持って感じます。佐渡島(SaDoGa shima)っていうローマ字はまさに頭文字と一緒です。佐渡の皆さんはSDGs島の島民なんだと、そしてGIAHS島の市民なんだという、誇りを是非持っていただきたいと思います。

以前、私こちらに訪ねた時に感動したのは、トキが共生する環境をもう一度復活させた、この地域づくりをしているのは農家さんの５割減とか色んな活動が作り出したんだということですね。

だから、この佐渡は農家が作っているんだと、そして、足元を耕しているということから、農業だけじゃなくて、島の暮らしそのものが、里山が宝物そのものなんだという風に感じます。

農家さんはもちろんですけども、農業に限らず、あらゆる市民の皆さんが、GIAHSを形成しているという誇りを持って、次に繋げていただきたいと思います。ありがとうございました。

テーマ

佐渡における持続可能な農業とは

高齢化社会に直面している佐渡において、持続可能な農業のあり方とは何かをディスカッションします。

座長

新潟食料農業大学

教授 武本　俊彦 氏

1976年農林省に入省。ウルグアイラウンド農業交渉、食管法廃止・食糧法制定、BSE問題への対応等の後、農林水産政策研究所長を経て2013年に退官。食と農の政策アナリスト。環境エネルギー政策研究所シニア・フェロー。野村アグリプランニング&アドバイザリー顧問。

パネリスト

佐渡農業協同組合

常務理事 松井　和幸 氏

1991年に佐渡農業協同組合に入組し、営農指導員、担い手育成を担当。2019年から常務理事(経済担当)。

パネリスト

羽茂農業協同組合

営農課長 渡辺　昌彦 氏

1990年に羽茂農業協同組合に入組し、営農課で水稲、柿担当等を経て現在に至る。

パネリスト

コープデリ生活協同組合連合会

組合員理事 井上　優美 氏

生活協同組合コープにいがた組合員理事兼務。組合員の声や関心事から、くらしの願いを実現出来るよう活動。

パネリスト

佐渡市農業研修生

伴　朋 氏

東京都出身。夫と娘と2021年に佐渡ヶ島へ移住。現在、佐渡市羽茂地域で農業研修中。

【武本】 第一分科会は「佐渡における持続可能な農業とは」というテーマで話をさせていただきます。全体90分間ということでございますけれども、最初私の方から、趣旨の説明等を話させていただきます。そして、できれば３回ぐらい議論を展開していきたいと思います。最初に、自己紹介とパネリストの皆さんの日本農業あるいは佐渡農業に対するお考えについてお話をしていただきます。二巡目は、佐渡農業のうち特に佐渡と朱鷺と暮らす郷認証制度における農業と環境との両立の問題についてお話をしていただきます。三巡目については、そうした佐渡における農業を含めた現状と課題等についてご意見を言っていただきます。そして、最後四巡目になりますが、まとめとして佐渡における持続可能な農業のために必要な政策と、考え方そういったものをそれぞれパネリストの皆さんからお話をしていただくということで取り進めたいと思います。

スクリーンをご覧いただきますと、佐渡における持続可能な農業とはということで、最初に持続可能性についての考え方について、私の方からご説明申し上げたいと思います。

まず初めに、私は司会からご紹介がありましたけれども、新潟食料農業大学で教授をしております、武本俊彦といいます。元々私は行政の世界、具体的に言いますと農林水産省という役所で農政関係の仕事をずっとしてきた者でございます。今大学で教えている科目は食料経済学と農政学を教えていますけれども、技術的な意味での農業などについてはあまり専門的知識を持っている訳ではありません。そこはご承知おきいただきたいと思います。

持続可能性の話につきましては、現世代の利益と同等な利益が、将来世代にも保証されるような環境、一つのその価値、お金と考えた場合に、資本と考えてもいいかもしれませんけれども、それが一年間運用されれば普通は利息が発生します。利息の範囲内で生活をしていく、あるいは利息分だけを使うということになれば、元本部分はずっと残るということになります。そういう生き方ができれば、未来永劫元本は続いていくという意味で、現在の世代の人達が受けている利益は将来に渡って維持されるということにします。

これが環境でいうところの持続可能性、サスティ

ナブルの意味とされています。したがって短期的な視点に立って、今生きている人々が豊かな生活を送りたいということで利息以上にお金を使い始めると、元本に手を付けることになります。そうした生活を続けていくと、将来世代の人達には、今私達が享受しているような利益は享受できなくなる。したがって持続可能性がないということになります。ですから、サスティナブル、持続可能性を遵守すると、必然的に長期的視点、世代をまたがるような観点に立って、自らの行動を規律していくということが求められるということになります。

そういったようなことを前提に、午前中の基調講演、その後のパネリストの方々のご議論で、おっしゃっていたことはそういうことではなかったかなと思うわけであります。それを農業という産業に適応していった場合にどういうような考え方が生まれてくるのかを、パネリストの皆さん方に議論としてお願いするわけであります。

特に、佐渡の場合には朱鷺と暮らす郷という認証制度が動いているわけでございますので、それに限りませんけれども、環境保全型の農法を含めてどのように考えていくのか、そういう生産者の方々の取組に対して、消費者の観点からはどのように評価するのか、そういったことをお話をしていただきたいと思うところであります。

それではまず、一巡目、皆さんの自己紹介を兼ねて、持続可能性についての考え方あるいはそのことを踏まえて日本の農業あるいは佐渡における農業についてのお考えをお願いしたいと思います。順番は、松井様、渡辺様、井上様、伴様、この順番でご意見をお伺いしたいと思います。それでは松井さんよろしくお願いいたします。

【松井】 JA佐渡常務理事の松井和幸と言います。どうかよろしくお願いします。JAの職員時代につきましては、主に水稲の営農指導員を担当させていただいておりました。後半の方は担い手育成の方を担当ということでございます。

佐渡の米の生産者、佐渡の出荷契約書のベースで話をさせていただきます。

高齢化ということで、年間150人前後ぐらい出荷契約者数が減少しているのが現状であります。平成24～25年には、大体出荷契約者数は４千人強だと話をしてたんですけれども、今はなんと2,700を切っているという状況でございます。トレンドで５％ずつ出荷契約者数は減少しているというような状況ですし、幸い農地の利用調整につきましては何とか担い手の方に調整していただきまして、微減状態で保っているというのが、利用調整の状況です。担

い手の方につきましてももう限界となっているのが現状でありまして、このまま放置をすると佐渡米の生産力自体が減少していくと考えます。

JA佐渡といたしましては、水田は水稲作付けをするということで維持をしていきたいと考えている訳なんですけれども、その為には持続可能な農業を進めるには、多様な担い手も含めた中での農業システムの構築が必要と考えております。今日は、皆様方と意見交換を通じまして、一定の方向性が見出せればなという風に思いますのでよろしくお願いしたいと思います。

持続可能性についての考え方については、過去に振り返りますと、渡辺市長の先程のお話にもありましたけれども、佐渡コシヒカリについては古くからおいしいお米ということで高い評価を受けてきておりました。平成16年、佐渡沖を通過した、ちょうど穂揃期の頃、穂が非常に弱い時期なんですが、雨を伴わない台風で作況51、年比率が、17パーセントという甚大な被害が発生いたしました。私の家も農業やってますので、その頃は二条刈りの袋取りのコンバインでした。けれども収穫をしても、満タンの袋を片手で持ち上げられるような状態で、全く実が入ってないような状況でありました。作況51ということでありましたので、今まで陳列棚に並べられていた佐渡米を並べることができなかったということであります。そこから佐渡米の販売不振がスタートするというようなことでございます。

翌平成17年についても量はあったわけなんですけれども、一等米比率はそんなに良くなかった、65％程度で、佐渡米は陳列棚に戻ることはできませんでした。そういった中で政府米に、という話がありましたけれども、政府米に約5,000トン販売をするという屈辱的な形で、しばらく販売不振が続くということでございます。

JAといたしましても、佐渡米の復活に向けてどうしたらいいのかというようなことで、組織の中でも協議をし、農家の皆さんの方からも色々なご意見もいただきまして、進むべき方向の意見等もいただきました。当初は島内におきましても、減減栽培とい

う点での取組、島内幾つか、新穂地区が中心でしたけれども、点の取組があったというわけでございます。JAといたしまして、その点の取組を、何とか農協の力で面にしていこう。環境に優しい農業の取組を進めていこう、ということを組織決定をして、販売方針の転換を行ったという経過がございます。

持続可能な農業につきましては、環境保全型農業の取組だと考えますけれども、加えて朱鷺と暮らす郷の佐渡市からの提案等があったわけですので、ストーリー性のある佐渡コシヒカリとして、環境保全型農業と調和した中での農業生産の取組については、持続可能な生産となると考えているところです。それから、国が示しましたみどりの食料システムなどの中では、佐渡においては５割減減栽培というのがスタンダード化をしておりますので、国が示しております化学農薬５割減、化学肥料の３割減については、すでに島内ではクリアをしているなと考えております。加えて、ネオニコチノイド系農薬も指針では触れていたようでありますけれども、島内におけるコシヒカリ水稲栽培についてはネオニコチノイド系農薬は使用しないという決め事の中で進めておりますので、ここもクリアしているなと、既に実施済みだなという風に考えております。

もう一つ、有機農業の取組につきましては、栽培面とか販売面も含めて、もう少し課題を整理して進めていく必要があるなと思います。栽培面では、雑草対策とか面的取り組みをどう進めていくのかというようなところ、それから販売面においては消費者の方々への理解度とか、農業生産はかなり労働力がコストになってくるので、そういった面での商品価値、適正価格がいくらなのかというところもご理解いただかないと、なかなか進んではいかないだろうなと思っております。

あと、日本農業の問題として農政のあり方というところですが、皆さんご存知の通り、年間10万トンずつ米の消費の減退が進んでいます。それとコロナ禍で、外食産業の業務用米がなかなか動かないという状況がいまだに続いているというところがありますし、インバウンドも聞くところによりますと、６万トンから７万トンぐらいあると聞いておりますので、年間16万17万トンが消費量減に繋がっているというような、非常に米の世界においては厳しい状況になっている状況であります。

それに加えて、農業の現場における実態においても、高齢化や、それに伴う集落の維持が難しくなっているのではないかなと思っております。私の出身地、金井地区においても国中平野のど真ん中でありながら、農家数の減少っていうのは進んでおりまして、地域活動についても参加人数がなかなか集まらないというような課題を抱えているところであります。共同活動というものが、米作りにはあるわけなんですけれども、道普請・江普請というような管理作業というところが、これは担い手だけでは、一人ではなかなか作業することができないと思っております。現状としては、農家数の減少によって、その作業もなかなか厳しい状態になってきているというところではあるんですけれども、中山間直払の制度とか、多面的機能の取組制度は非常に評価できるなと思っております。そういった農地、あるいは水路、農道の維持ができるエリア、あるいは組織数、島内における中山間直払の組織数、面積は毎年減少傾向だというようなところでありますので、そういった部分では耕作放棄地の増加が大きな問題になっているのではないかなと思っております。

【武本】 今の松井さんのお話の中で、雨なし台風で米の品質劣化が起こり、スーパーとか小売店の棚に佐渡米を戻すことができなかったということもあって、環境保全型にシフトしていくって言うお話を聞きました。その点で、気候気象が変化していく中で、減減栽培の方が生産が安定するということについてのデータとかエビデンスとか、そういうものはその時点ではあったんでしょうか。それとも、それをやるしかない、つまり減農薬だと消費者が買ってくれるんじゃないかという、一種の物語性に掛けることにしたのか。今から見れば減減でも十分生産を安定するっていうのがだんだん分かってきているのではないかと思うんですけれども、その辺はどうだったでしょうか。

【松井】 減減の方が生産性が安定するというデータは、その時にはございませんでした。どちらかというと、当時も佐渡市では環境戦略を謳っておりましたので、農業における現場においても環境を謳った中で、物語性を重視した中で、佐渡の独自性のある販売という道を進むべきだろうという判断で、取り

組んできた結果でございます。

【武本】 先ほど中山間地域のお話なんかも出ましたけれども、課題に対する解決方策として、最後は政策をどうしていくかっていう話になってきます。けれども政策を大きく変えるためによく言われてるのは、そのエビデンスに基づいた政策変更を、とよく言われているわけであります。農家の方々に農法の変更を求める場合には、似たようにデータやエビデンスをきちんと示した上で、説明をして納得を得た上で、大きく販売戦略を書いていくっていうことが求められてくるのではないかなという気がしております。

それでは渡辺さんお願いします。

【渡辺】 JA羽茂営農課の渡辺です。よろしくお願いいたします。

自己紹介ということで、私は羽茂生まれで、平成２年に羽茂高校を卒業して、そのままずっと羽茂農協の営農課でお世話になってます。業務については水稲担当も行っておりますし、平成15年からはおけさ柿の担当ということで、ずっと選果場や指導面でお世話になって、現在営農課課長ということでお世話になっておりますので、よろしくお願いいたします。

JA羽茂管内につきましては、今ほどJA佐渡さんからもありましたように、お米の関係はほぼ同じような状況で推移しております。当管内についてはお米の他に、やはり中心は果樹、特におけさ柿が主力でございまして、近年では西洋なしのルレクチェなど、果樹がある程度栽培の中心ということで考えております。農業者の状況については、やはり高齢化、担い手不足というところで、生産量が年々減少し、平成８年、平成10年ぐらいがピーク、そこからはじわじわ下がってきています。その当時と比べると、今は６割ぐらいというような状況で、かなり減少しております。この状態を維持するっていう部分は、拡大できれば一番いいんですけども、何とか維持するということで色々な取組も行っておりますけれども、農家の段階で考えると先祖代々から作られた畑・果樹園を維持するために頑張ってらっしゃるんだなと感じております。

近年、水稲でも他地区ではかなり法人化、大規模化が進んでおりますけども、羽茂地区についてはほとんど法人がありません。今は法人化の検討も始まったところでありますけども、個人農業一戸当たり大体90aぐらいの水稲作付けが中心なんですけども、なかなか収支が厳しいところがありまして、経費をある程度圧縮するために、大規模化、法人化を進めて、その労働力を園芸に向けられればなという風に考えています。

農産物については味、おけさ柿もそうですけどもお米もそうですね、やっぱりおいしいと買っていただける、喜んでもらえる、それが栽培の力にもなりますし、また国のみどりの食料システム戦略に繋がる部分もあるかと思います。そういう取組を生産者と一緒に取り組んでいけるようなことができればという風に考えております。

今日は佐渡における持続的農業ということで、皆さんのご意見等をお聞きして、これからの運営について考えていければいいかなと考えております。今日はよろしくお願いいたします。

【武本】 ありがとうございました。

では続きまして井上さんお願いします。

【井上】 コープデリ生活協同組合連合会および生活協同組合コープにいがたで組合理事をしています、井上です。よろしくお願いします。

佐渡には子どもの頃から数えたら15回以上は来ているんですけれども、佐渡の人々や自然、またトキに会うことを楽しみにしています。最近ではもう一つ、カフェ巡りをするのが楽しみになっています。

コープデリグループは、関東信越の７つの会員生協コープデリ生活協同組合連合会およびその子会社で構成されています。現在組合員数は512万人を超えました。カタログによる宅配事業をベースとしています。

組合理事は組合員の代表としまして、組合員の声や関心事から、暮らしの願いを実現できるように活動をしています。商品に関しても関心事は多種多様で、週に一度家に届くカタログはかなりの厚みになっています。その中から「これを食べたい」という商品を選ぶ時は、宝探しをしているような感覚になります。その中でも、農産物に関してはやはり生産者の顔が見える安心・安全な農作物が欲しいという声が多いです。

コープデリグループの産直は、産地直送というだ

けではなく、生産流通方法を明確にすることや、記録・点検検査など安全の為の仕組み作りを進めてまいりました。また産地に行き生産者の方と交流を通しまして、農作業の苦労ややりがいなどをお聞きしたり、実際にほ場を見せていただいたりして、ほんの一部なんですけれども、農作業体験や生きもの調査もさせていただいています。佐渡とはCO・OP産直新潟佐渡コシヒカリを通しまして、10年以上のお付き合いになっています。

コープデリグループの理念は、「ともに　はぐくむ　くらしと未来」。また、ビジョン2025、「食卓を豊かに地域を豊かに、誰からも頼られる生協へ」は、SDGsの基本的な考え方や目指す方向と同じになっています。地球規模の話ですると、私のような一消費者としてはまだ全然考えが及ばないんですけれども、まずは自分自身や家族のため、家計の持続可能性っていうこともありますけれども、隣近所や友達など少しずつ思いを広げていけたらと思っています。日常生活の中では忘れがちかもしれません。けれども、「誰ひとり取り残されない世界」の実現を頭の隅に置きまして、時々妄想を交えながら自分のできることを想像しています。これまでの日本の農業のあり方やみどりの食料システム戦略について、恥ずかしながら今回これを受けたことで初めてこの言葉を知りまして、農林水産省のホームページを見ました。うちは農家ではないので、農家の皆さんの本当の苦労は見えてはいないと思います。でも子どもの頃通っていた学校の周りは田んぼで、水を張った田んぼを抜けてくる風が気持ちよかったことを覚えています。その頃は、学校の周りが宅地になって田んぼがなくなるなんて全然想像も付きませんでした。また、田んぼが広がっていた中にもぽつぽつと草原となっているところを目にします。後継者不足からなのか、そのような光景を見ると寂しくなってしまいます。みどりの食料システム戦略が実現されたら、またあのような光景が戻ってくるのかな、なんてちょっと期待しています。

【武本】　ありがとうございました。
それでは伴さんお願いします。

【伴】　初めまして、伴と申します。
私は今年の６月から羽茂農業振興公社で、主におけさ柿の農業研修を受けています。出身は東京で、佐渡へは夫と娘と１ターン移住してきました。佐渡に移住を決めた大きな理由は３つあります。１つ目は海がとても綺麗で近いこと。２つめは羽茂の方の穏やかな人柄。３つ目は羽茂の農業公社で研修を受けると、独立後に１年目から実の取れる柿の園地を借りられるということ。以上の３点です。農業は全くの初心者です。令和元年に娘が産まれ育休中に今後の人生について改めて考えた時に、もっと人の役に立つ仕事がしたいと思うようになりました。そこで頭に浮かんだ言葉が、農業人口の高齢化担い手不足でした。少しでも貢献できたらと思ったのがきっかけで今に至ります。

本日私がこちらの席に座っているのが大変恐縮ではありますが、このような貴重な機会を与えていただきありがたく思っています。これから佐渡で農業を担っていく者として、持続可能な農業について勉強させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

問題提起としましては、私の住む羽茂では移住後に住む家がなかなか見つかりませんでした。単身者用の研修アパートはあるので、ファミリー向けのアパートもあるといいなと思います。空き家がたくさんあるとは聞きますが、実際に空き家バンクに出ている物件はわずかです。また空き家であっても「お仏壇だけは使っていたい」とか「お盆の時期には帰ってきたい」というお話も聞きましたので、本当に使える空き家とそうでない空き家の整備が進むといいなと思います。以上です。

【武本】　まず一巡目が終わったところですけれども、今の最後の伴さんの話の関係では、午前中のパネリストの方で珠洲市長さんが、非常に衝撃的な、珠洲市が社会減から脱出できたと、つまり転入の人口が転出の人口を上回り始めたっていうことですよね。渡辺市長もまだ佐渡市はそうなっていないけども、それを目指すんだと言っておられました。全国的に見ると、転入増に転換した町や村というのは結構あるんですね。そういうところを調べてみますと、やっぱり移住者用の家の対策というのは、各町や村の行政においては相当なウエイトを占めています。そういう努力をしている町や村は転入増に繋がっているということは、重い事実として認識をしておく必要があるのではないかなと思う訳です。

それからもう１つ、持続可能性の話のときの、短期的姿勢に立つか長期的姿勢に立つかっていうところに繋がるのですが、ここには農業協同組合の関係の方と生活協同組合の関係の方がいますけれども、両方とも協同組合という法人格です。これは歴史的には短期的視点に立つ株式会社に対抗する存在として、法律上認められてきた団体法人であります。その市場における公正な競争を担保する為に、中小零細事業者の組織する法人を、特別に独占禁止法という法律の中で保護していく、そのために認められた法人であります。ですから、その意味で言うと、元々協同組合っていうのは、長期的視点に立って運営を行うものでありますので、持続可能性という理念には極めて整合性の高い法人になっているわけでありますから、今後持続可能性の問題を展開していく上において、ますます協同組合という法人は重要性を増していくというように私は認識しているところであります。

以上の一巡目のお話をベースに、二巡目に移りたいと思います。

佐渡農業について、持続可能性との関係で一つ、やはり朱鷺と暮らす郷の認証制度はじめ、減減、あるいは自然栽培といったものが位置づけられているわけでありますけれども、そういったことについて、もう少し踏み込んでご意見を承りたいと思います。それでは松井さん、よろしくお願いいたします。

【松井】 佐渡における持続可能性は、まさに、生物多様性農業の取組というところであります。朱鷺と暮らす郷の取り組み、トキの野生復帰を農業で後押しするというような取組が、佐渡にとっての持続可能性農業の中心になると考えております。生産者の皆様においては、トキのために餌場となる環境を整えていく。トキはその餌場で餌をついばんでいく。消費者の方につきましても、トキの野生復帰に向けた取組を応援をしていただく。トキとの共生で育まれたお米については、付加価値という形の中で経済効果が生まれていくという、まさに循環しているんだろうなと考えております。ただ、認証米の取組につきましては、ふゆみずたんぼとか江の設置という作業が伴ってきます。作業というところを考えてみますと、生産者の方も負担が非常に大きくなってくるという状況であります。その負担に見合った経済的効果が享受されてるかと言うと、まだまだそこは課題が大きいなと思うところであります。そこはJAの力不足というところもありますので、そういった取組を、更にお米屋さん、あるいは消費者の皆様にご理解いただきまして、お買い上げいただくというところをさらに進めていく必要があるなと考えております。

それからもう一つ、課題というところで言いますと、佐渡における10a当たりの収穫量は、528kgになっておりますけれども、実際のところは私ども内部の中で精査しますと、470kgぐらいなのかなと見ております。安定した収量というところについては、もう少し単収を上げていかないと、なかなか農家経済の方も水準に達しないかなという風に思っているところであります。冒頭言いました通り、農家数の減少によって担い手の方々に農地が集約されて大規模化していくと、なかなかこまめな水管理、肥培管理等々もできづらくなってくるというところがあると思います。今後構築していかなければならないなというところは、佐渡における農業システムをしっかり構築していく必要があるなと思っております。

高齢化で離農される方が今は中心ですけれども、農業機械が故障したから離農、というところもお聞きするというところであります。離農イコール、今佐渡の現状ですと、利用権設定での全面委託となっています。担い手だけだとなかなか農地の維持は守れない、厳しいのかなと考えております。離農された方につきましても、自分の農地は、自分で体の動けるうちは草刈り水管理等がしていただけるような仕組みづくりをしていく、中間管理の再委託という言い方になりますけれども、そういったところをしっかり仕組みとして作っていかないと、なかなか農地は守れないかなと思っているところであります。

それから朱鷺と暮らす郷の認証制度の取組の効果というところでありますけれども、私も農業をしている中ではやはり、生きものが田んぼに増えたなというのは、本当に実感をしているところであります。それから、学校給食のところ、島内の小中学校においては全て佐渡市認証米を提供されているというところであります。当然、給食センターの方では高いお米は買えないというところがありましたので、そこのところは市の補填あるいはJAなんですけれど

も、JAの元のお金の出所は、生産者の方々から拠出をしていただいたJAが管理している基金があるんですけれども、そこから佐渡市認証米と普通のお米の価格差を埋めて、佐渡の子ども達に佐渡市認証米を食べていただいており、食の教育にも繋がってるなという風に考えております。それから生きもの調査も年２回行うわけなんですけれども、お爺ちゃんが、孫を連れて田んぼに生きもの調査に行こうというような取組も見えておりますので、そういった部分でも食の教育、将来の担い手育成にも繋がっているのではないかなと思っております。それから農協といたしましても、物語性のあるお米についてはPRしやすいですね。話をしやすいということもありますし、買う側にとってもまた卸の皆さんについても、その先についてお話がしやすいと言われておりますので、非常に佐渡米は売りやすいんだよという風にも言われております。そういった中で佐渡市認証米の効果は非常に高いなと私は感じております。

それから自然栽培のことがあげられておりましたけれども、こちらについてはJA佐渡の方で自然栽培研究会というものを平成29年に立ち上がっておりまして、JAで事務局をやらさせていただいております。会員の方が非常に活発なものですから、JA事務局が会員の方を追っかけるのが精いっぱいというような活発な研究会であります。現在会員数32名という中で取組をしておりまして、自然栽培というと皆さんちょっとピンとこない方もいらっしゃると思いますけれども、当然農薬を全く使わない、肥料も全く使わない、有機質肥料も全く使わない、種の力だけでお米を育てるというようなものが自然栽培という風に話をしております。奇跡のリンゴの話がありますが、イメージとするとそのような形でお米を育てているというのが、自然栽培という取組でございます。こちらについてもこの後、生産の方を伸ばしていきたいなと思っております。なかなか、お米のプロであります卸の皆さん、あるいは米屋の皆さんについても、自然栽培の違いって何ですか？という質問がありますので、そのようなところの理解を農協としても整理をして、話をさせていただきながら、生産拡大に向けて取り組んでいきたいなと考えております。

【武本】 ありがとうございました。

今のお話の中で単収の開きというんでしょうか、ばらつきがあるという話や、自然栽培と減減の話とか、そういう話は基本的にデータを集めていただいて、しかるべき専門家の分析を経て、その違いがどこにあるのか、技術的な問題なのか、あるいは土壌の問題なのか、そういったことも示していくということが、地域の農家の方々に納得をした上で生産に取り組んでいただくということに繋がるのではないかなという感じがします。それと、恐らく佐渡米に対する卸や小売りのニーズというのは全てが主食用の高級用途だけではなくて、業務用から色々幅のあるものではないかなと思っていますので、そういうユーザーあるいはニーズをふまえた販売戦略をされておられるとは思うんですけれども、そういった観点も是非お考えいただいたらいいんではないかなと承りました。

続いて渡辺さんお願いします。

【渡辺】 当JA管内でもコシヒカリの５割減減栽培、また朱鷺認証の取り組みを行っております。当管内では平成10年頃までは、多収栽培ということで化学肥料や農薬を今と比べたらかなり多く使われて、とにかくたくさん取った方がいいとして栽培されてました。ただ平成10年頃から、このお米ではおいしくない、もっとおいしいものをということで、有機質肥料に切り替えの農家説明をしたり、その後すぐ５割減減の取組ということで、進んだような経緯でございます。やはり生産者努力という部分があって、今はコロナ禍で米の販売も苦戦している部分もありますけども、そういう取組があってこそ今の佐渡米、佐渡コシヒカリがあるんだなと感じております。また、生産者についてはやはり品質や味など、色々な評価がされるともっと頑張ろうということで、継続していただけるという部分に繋がるのかなと思いますので、今後も新たな取組も加えながら、もっとおいしいお米、もっと高品質なお米という部分で、取組を進めていければなと考えております。

【武本】 それでは井上さんお願いいたします。

【井上】 先程からスクリーンの方に映っていますけれども、コープデリグループでは持続可能な生産と消費の為、2010年から「佐渡トキ応援お米プロジェ

クト」を立ち上げました。昨年10周年を迎えました。その時に記念Tシャツを作りました。去年大々的にやりたいねって言っていたのですがなかなかできなくて…しかし今もめげずにいます。佐渡市、JA佐渡、佐渡米生産者と一緒に、「生きものと共生する米づくりで佐渡をトキの故郷に」という思いのもと、CO・OP産直新潟佐渡コシヒカリとその関連商品の売り上げの一部を「佐渡市トキ環境整備基金」に寄付する取組となっています。佐渡の美味しいお米を食べることが、トキと共生する米作りを支えることに繋がっています。生協は他にも産地との交流の場を多く持っています。けれども、佐渡は市とJAが連携しながら生協と一体となって取り組んでいることが特徴でありまして、推進する力にもなっていると言えます。

申し訳ありませんけど、組合員になるまでは私は佐渡のお米を食べたことがなくて、役割だからじゃあ食べますかって感じで食べたのですけれども、すごくおいしくてびっくりしたことを覚えています。

佐渡って本当にいいところだよって仲間が口々に言うのですが、私は船がすごく苦手で、ずっと佐渡の担当を私できませんと避けてきたんですけれども、３年前にとうとうその役割が回ってきました。でもいざ海を渡ってみて、田んぼアートの畦道に立った時に、先程も言いました、学校の周りにあったようなあの子どもの頃と同じ、風を感じることができました。思い切り深呼吸したことを覚えています。

コープにいがたでは、組合活動として、組合員さんと一緒に春の田植え、夏は田んぼの草取りや畦の草刈り、あとは江掘りやビオトープを作った年もありました。そして秋の稲刈りと、１年に３度訪れて農業体験をしたり、生産者さんと交流したりしています。作業の休憩時間に、農薬が撒かれていない緑の畦で飲んだ牛乳の味は格別でした。改めて自然栽培の大変さを知りました。この取組は、親子の参加が多いのも特徴となっています。佐渡Kids生きもの調査隊と一緒に泥まみれになりながら、生きもの調査をする子どもたちはいきいきとしていました。子どもたちに引き継げる取組ともなっています。「佐渡トキ応援お米プロジェクト」を通しまして、朱鷺と暮らす佐渡認証米の制度・活動報告やカタログなど、さまざまな媒体を通して組合員さんに伝えています。

プロジェクトはお米１キロに対し１円。またパックごはんもありまして、３パックで１円。焼きおにぎりでは、１袋１円の寄付となっています。コープデリグループの2021年度の寄付金は、343万円と過去最高額になっています。渡辺市長もおっしゃっていましたけれども、単なる寄付金の増加ではなくて、認証米の消費が増えたということになります。一般的に米の消費が減っていると言われますけれども、コープデリでは一人当たりの利用が増えている状況にあります。それは縁故米が多いと言われている新潟県でも、同じ傾向が見られています。米そのものもそうですけれども、パックご飯もそうですし、焼きおにぎりはちょっと昨年は下がっていますけれども、年々供給高が増えています。若者の米離れって言われていますけれども、うちの娘は朝食は必ずご飯じゃないと駄目。腹持ちがいいし、午前中に体育がある日は「絶対ご飯を食べていく」と言っています。

供給高が上がったのは他にも色々な要因はあるとは思いますけれども、朱鷺と暮らす郷認証制度が評価されていると見ていいと思います。

【武本】 ありがとうございました。
それでは伴さんお願いします。

【伴】 この議題については、正直私は分からなかったんですが、今回初めて朱鷺と暮らす郷認証制度について調べてみて、生産者の方に自然を意識する考えが広まっていることや、田んぼの生きものを調べる際に子どもや地域内外の人との交流が生まれているということを知って、横に関係が広がっていく、いい取組だなと感じました。

【武本】 ありがとうございました。
今二巡目まで終わったところであります。三巡目は、佐渡農業における課題を、どういうものと考えるのか。生産あるいは消費という観点でよく言われるのが、特に自由化が色々言われた時に、国際的に考えて、でも行動は地域にっていうことで、英語で言うとThink Grobally,Act Loculy っていう言い方があるんですけれども、これは国際分業論みたいな立場の人が言うと「地域は競争力産業から退出すべきである」という風ないい方にも取られちゃうん

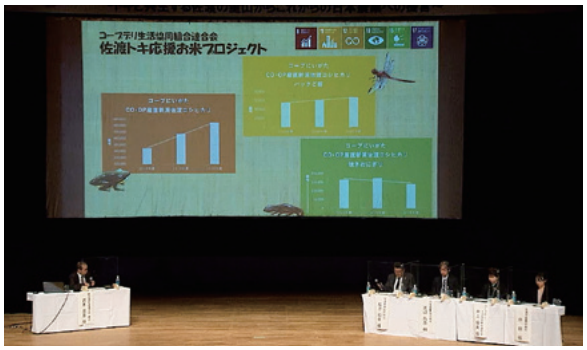
ですけども、多くの場合は国際化が進んでも、その地域の特性に基づいて活動すべきである、というプラスの考え方に立つという考え方もあります。特に先程来、人口の減少だとか、高齢化、担い手が減少していくというところで、農業生産もなかなか厳しい状況に置かれているという状況にあります。

午前中のパネルディスカッションでは、家族農業ということの重要性も言われていました。農業という産業の特性からすれば家族農業が一番適していると考えられるわけでありますが、ただ現実問題としてその後継者が農業を継いでくれないということも事実としてあるわけであります。そういったような状況を踏まえて、生産現場に近い農協の方々、あるいは外側だけれども農業に関心を持たれている生協、あるいは新規参入をされた伴さんから見て、どういう風に考えておられるか。また、厳しい中であるからこそ農業の持続性を考えていった場合には、現在の政策を大きく変えていく必要があるのではないかという考え方もありますが、時間の関係がありますので、まとめも含めて政策についてのお考えもお聞きしたいと思います。

それでは松井さんお願いいたします。

【松井】 生産面における課題というところでありますが、高齢化、生産者数の減少、あるいは大規模農家への集約により単収が減少している傾向が１点。それから品質も、佐渡においては大きな課題となっています。令和元年については高温での障害があり一等米比率は40%台、２年産については75%、本年産については90%に行くか行かないかというようなところではあり、品質の安定が必要だなと考えております。そのためには何が必要かというところをJAとしてもまとめて、土づくりの取組とか、ケイ酸資材の取組をしていこう、というようなことを訴えているところでございます。

家族農業というところにちょっと触れると、佐渡の出荷契約者数がベースの数字になるのですが、全体の出荷契約者数のうちの９%の経営体、約240経営体が、その農地の約45%を担っていただいている



という構造になっております。残りの９%は４ha以上の経営体、というところで整理をしておりました。４ha未満が８割という状況になる訳なんですけれども、それを見てみるとやはり大多数が小規模、４ha未満の農家の方々で55%の農地を守っているというような状況でありますので、家族農業というのも大事な方向性だなと感じております。

その取組を維持していくためには何が必要かというところになってきますと、やはり組織化の中での取組も一部入ってくるかと思います。先ほど機械が壊れた時が離農のスタートだということもあるよ、という話をさせていただきました。じゃあ機械はリースとかレンタルで対応できるからもう少し続けてみようよ、という仕組みを何とか作りたいなと頭の中ではあります。そういったことにおいて、家族の経営が持続されるのではないかなと思っていたりもしております。そこのところはまだ私の中でも整理しきれてないところでありますが、そういう風に考えております。あと、販売の課題というところは、先ほども申し上げた生産地の方々がせっかく市の認証米として、江の設置やあるいはふゆみずたんぼ等々で作業をしていただいた全量のお米を、認証米としてJAとして売り切れてないというのが大きな課題になっておりますので、ここのところはJAとして頑張って、少しでも加算つき販売を伸ばしていくというところが役割だと思っております。

SDGsの取組も若干触れさせていただきたいと思います。生産面では、水稲栽培における肥培管理に元肥一発肥料というものがあるんですけれども、その取り扱いのシェアが60から70%近くまで上がっております。元肥をやって穂肥をやるっていうのが従来の体系でした。けれど、ほ場も大区画化しておりますので、元肥一発の取組が増えてきているというのが現状です。ただここに問題があるのが、最近報道等で言われておりますマイクロプラスチックのことです。元肥一発肥料はプラスチックでコーティングをされており、特に佐渡は海に囲まれておりますので、どこよりもいち早くこの課題を解決する必要があると私は感じており、JAとしても問題視をしている状況であります。ただ、肥料の開発上、あまり進んでいない実態がありますので、開発状況を見ながら、まだ組織決定しているわけではありませんけれども、いち早く切り替えをする必要があると考えておりますし、既に一部メーカーさんや全農肥料工場の方から試験的にいただきまして、試験栽培等も行っているわけなんですけれども、この辺の切り替えはするべきだと考えております。

まとめとしましては、全体的には顔の見える販売取組の中で、消費者の方々に生産現場も見ていただ

き、生産者と消費者の方々が共感できる農業を引き続き、交流事業等を中心になるかと思いますけれども、取り組んでいきたいなと思っております。

緑戦略の関係については繰り返しになるんですが、やっぱり有機栽培の取組が課題となっております。農家の方にお聞きしますと、有機栽培は堆肥を入れるわけですので、肥料を入れた分雑草の勢いもそれなりについて、雑草対策が難しいんだよねというご意見をいただきます。そういった中で、今伸ばそうと話をさせていただいた自然栽培については、肥料はやらないという前提がありますので、一定程度雑草が抑えられる効果も見込めるというところ、あるいは農家の方々も比較をすると、自然栽培の方が入りやすいなという声も聞いておりますので、有機栽培というよりは、自然栽培の取組を進めていく方向の方が、進めやすいなと考えております。色々課題はありますけれども、ほ場の団地化集約とか、あるいは除草機などが必要になってくる訳なんですけれども、その導入支援なんかも行政を中心にお願いできればなと考えているところであります。

【武本】 今のお話のうち、支援を求めていく上でもやはりデータ、エビデンスは必要になってきます。

それからもう一つ、マイクロプラスチックの話は、脱炭素とか全体の流れの一環になってきています。特にヨーロッパを中心として、生産工程でそういうものを使っているか使っていないかということの証明を出せと。特に輸出する場合、求められる可能性が出てきています。例えば畜産で言えば、アニマルウェルフェアを守っているかどうかを、今後EUに輸出するなどという場合には求められる可能性が出てきていますので、そういったことも含めてマイクロプラスチックの問題は、きちんと対応する方向の検討を始めた方がよろしいのではないかなと思われます。

では渡辺さんお願いします。

【渡辺】 水稲関係については、JA佐渡さんの方とさほど変わらないので省略したいと思いますけども、やはりおけさ柿とかル・レクチェ、果樹については、やはり家族労働・家族経営っていうのが中心でございます。その中で、特におけさ柿がかなり傾斜地で栽培されたり、なかなか作業が大変な部分がございます。もちろん労働力の不足っていう部分もあって、最終的には収穫作業が一番手がかかるので、その時の人員が確保できれば、大規模化も可能なのかなとは考えられますけども、なかなか人がいない現状でありますので、労働力の関係が一番の課題なのかなと考えています。

特に佐渡の南部地域については、柿の収穫時期には元気な方はみんな柿をもぐか、柿の選果場が地元にありますけども、季節雇用で100人雇ってますので、そちらの方で働くか、ほとんど人がいないような状況になってしまうので、佐渡全島でもう少し人員をこの時期に南部の方へ確保できるような体制を、考えていかなきゃいけないんだろうなと考えています。

また需要の関係については、おけさ柿は今4,000トンぐらい、ピーク時は5,500～6,000トンぐらいありましたけども、高齢化等で減少しています。販売量も不足気味で、販売先から叱られるような状況でして、品質が維持できるんであればもう1.5倍以上あっても喜んで販売できるっていういい商材でありますので、これが高齢化等で担い手不足で作れないっていうのは、本当にもったいないことだと感じております。そこらが一番の課題でして、今後も関係機関と一緒に検討していかなきゃいけないだろうなと考えてます。

あと政策提案でありますけども、果樹とか園芸品目については、色味の為に有機物がやっぱり必要になります。佐渡島内でも用意できる牛糞堆肥や米ぬか・カキ殻などの島内でもある有機物を、もっと有効に活用できないのかなっていうのは考えております。コスト面等でかなり割高なものであれば、なかなか柿農家もちょっと扱いにくいっていう部分には繋がるんだと思いますけども、地元の有機質を有効利用できる部分がもっとできれば、ありがたいなと感じております。また農業者は高齢でもありますので、農業の途中で急にけがをされたり、家族の病気なり色んな条件で急に作付けが困難になる場合がどうしても出ています。そうした場合、もちろん集落内での協力、また親戚の方等で何とかカバーしておるんだと思うんですけども、やはり柿で言うと収穫時期等なかなか人手が足らない時期ではサポートもできないということがあります。やっぱりサポート体制っていうのも今後考えていかなきゃいけないんだろうなと考えております。

地元で考えると、お米については機械経費等で採算が合わない部分、小規模ですので、その部分を法人化等でまとめながら、その労働力を果樹栽培等へ力を入れてもらって、生産拡大ができたら当地区については当面の部分でありますけども、そこが一番の近道なのかなっていう風に考えておるようなところであります。

【武本】 ありがとうございます。

今のご提言の中で渡辺さんの場合、その前から言っておられると思うんですけれども、労働力の確保の問題と思われますので、この話は恐らく羽茂農協だけで解決される話ではないですから、最低でも佐渡市全体で労働力の需給調整みたいな話を、お話しになった方がいいだろうなと思います。半農半Xとか労働のあり方もかなり多様な方向性が示されてきているわけでありますから、できれば佐渡市内の中で色んな働き方が組み合わせられるという方向、農業サイドだけの話では勿論ないわけなので、ここはやはり市が積極的に乗り出していただくのが、重要ではないかなというように承りました。

では井上さんお願いします。

【井上】 課題とまとめということですが、昨年コープにいがたが行いました生協のありたい姿のアンケートの１位では、食の安全・安心をさらに大切にしていくことが１位になりました。やっぱり消費者の関心ごとの１番は食の安全・安心になります。もちろん家庭を守る私のような主婦としては、おいしく、それに家計に優しいのが第一条件にはなります。その２つが叶えられて購入したくなる商品に重なる「こと」というものが鍵になると思っています。

先ほどもお話ししたんですけれども、「佐渡トキ応援お米プロジェクト」では、組合員に対してトキが絶滅したこと、佐渡米の生産者達が農薬、化学肥料を減らすことで、さまざまな生きものが田んぼに暮らすことができる米作りを始めたこと、それはとっても手間がかかって収穫量が減って生産性が良くない農業であること、生きものが暮らすことができる環境にするために費用がかかること、諸々のことをお伝えしています。その上で募金をしていただいてるんですけれども、募金をしようと思うとちょっとひと手間かかるんですけれども、このプロジェクトでは佐渡の美味しいお米を食べることで、トキと共生する米作りを支えることに繋がっています。生産者と私達消費者が連携して「作る想い」と「食べる想い」が繋がることで、win-winの関係が築かれているのではないかと思っています。

今月の２日に田んぼアートの稲刈りをさせていただいたのですけれども、その時に、生産者の皆さんに「あなたにとっての米作りとは?」という質問を投げかけてみました。色々皆さん答えてくださったんですけれども、「つながり」とか「生産の糧」とか「趣味でやっている」とか、あと80歳のお爺ちゃんは「健康のため、見回りするのも全部歩いていかなきゃいけないから、健康のためにしてるんだよ」っておっしゃっていました。どの言葉も胸に染みまして、皆さん語ったあとに凄いニコッて笑ってくださったので、あぁこの人達だったらすごく信頼できるなと思って、この人達の米を買いたいなって応援したいなという風に思いました。商品と生産者と消費者がつながることで、より一層価値のあるものになるのではないかと思っています。

そして、ここに来て本当は皆さんに直接生産者の方と触れ合ってもらいたいんですけれども、やっぱり新潟県人の私でも、海を渡るってハードルが高かったりとか、ジェットフォイルの運賃がちょっと高いとかあったりするので、そういうことが解決されて、みんながもっともっと佐渡に渡ってこれるといいなという風に思っています。一度来てしまうと、私もそうだったんですけれども、次はいつ来ようという風に思うので、是非何か解決できたらと思います。

また、先日にいがたのグリーンツーリズムで、私は「日本海に浮かぶ黄金の島、日本海最大の金山クラフトコーラ作り」というオンラインツアーに参加しました。何気にSNSを見ていましたら楽しいツアーを見つけることができて、ラッキーだったんですけれど、ツアーの中で私がヒットしたのは、簡単にできるクラフトコーラと、佐渡金山の意外な一面を見せていただけたんですね。「馴染みの女に会いてえな」というあの日本一有名な蝋人形が、実は流人ではなくて社長さんだったというお話を聞いて、あぁそういう面白いことをどんどんどんどん発見できる島なんだなというふうに感じました。

お米については先程も出ましたけれども、CO・OP産直新潟コシヒカリという米もありますけれども、

パックご飯とか焼きおにぎりとかも開発していますので、お米そのものでなく加工品として、売っていくのもいいかなと思っています。今後もJAさんと同じ協同の理念を持つ生活協同組合としまして、「佐渡トキ応援米プロジェクト」を持続しまして、組合員さんに伝えて、私達も一緒につながりのお手伝いができたらなという風に思っています。

【武本】 ありがとうございました。

今の井上さんのお話の中で、やっぱり消費者のサイドは、生協の方々と言った方が良いかと思いますけども、非常に生産者のことを考えておられるなということと、それから、消費者が何を望んでおられるのかっていうことをきちんと把握されて、そのニーズに合った形態の農産物、あるいは加工されたものを提供していくっていうことが何よりも重要だし、その信頼関係が構築されるということが、長期安定取引に繋がっていくことになるのではないかなと思います。

例えば米の問題についても、確かに家庭で研いで炊いて蒸らして白飯のご飯をあったかいうちに食べるというのが、美味しい食べ方であることは誰も争わないんですけれども、消費者の方々がだんだん忙しくなってきているわけですので、研いだり炊いたり蒸らしたりする時間が取れなくなってくると、無菌包装パックご飯だとか、加工食品の方に需要がシフトしていくという可能性は大である、ということを踏まえて、生産サイドが対応していく必要が出てくるのではないかなというように感じられたところです。

それでは伴さんお願いします。

【伴】 私自身そうだったのですが、佐渡米やおけさ柿のおいしさを知らない人がまだまだいると思います。佐渡に来る前に４年ほど長野県に住んでいたのですが、その時は何となく長野県民だし、長野を応援したいからという理由で、長野米をなんとなく食べていました。今はよく知っている生産者の方の佐渡のお米を食べているので、よりおいしく感じています。

佐渡における持続可能な農業の為に必要な施策提案としましては、農業とは直接関係なくなってしまうのですが、現在二歳の子どもを育てながら農業研修をしていて、やはり両立が大変だなと感じています。特に休みの日の過ごし方に悩むことが多いです。ちょっと恥ずかしいお話なのですが、休みモードになった状態で、娘の相手をするのが体力的に、また、精神的にハードだなと感じることが多々あります。佐渡に来る前はちょっと手を抜きたいなという日は、とりあえずショッピングモールに行って、フードコートでご飯食べてウインドウショッピングして、ペットショップで犬とか見て、食材買って帰るというのがとても便利でした。佐渡では自然相手に楽しく遊ぼうと思っていたものの、自分にそのスキルが足りないようで、実際どう遊んでいいかちょっと今困っているという状態です。なので休日に家族で一日楽しめるような、国営公園のような大きな公園があるといいなと思っています。公園の中や入り口に農家レストランやカフェがあって、地産地消メニューが食べられたり、野菜や果物の直売スペースがあると便利で楽しいと思います。

直接農業とは関係なかったですが、私の意見は以上です。

【武本】 ありがとうございました。

今スクリーンになっている資料について、ご説明をします。人口減少の過去から現在までと今後の見通しを示したグラフです。2008年がピークで、今、減少に入っているということです。人口見通しは、他の経済見通しとか、社会的な見通しと比べれば、ほぼこの通りに変化していくことが確定しています。実線が中央値と言って、それより下の方が悲観的な曲線になります。右側にあるのが楽観的な線ですけども、楽観であれ悲観であれ、そう大して違わないですよね。確実に、大幅に減ることだけは確かです。これはオールジャパンベースで見ているわけですから、都市部と農村部がどうなっていくのか、これが東京圏への一極集中傾向は継続する見込みということで、赤いところですね、これが東京圏です。ゼロより上は人口が増加する流入超過です。それに対して地方圏というのはほぼ常に下回るという線です。昔は大阪圏とか名古屋圏も人口は増えていましたが、1970年代半ばからはほぼ原点のところを推移しています。ですから東京がひとり勝ちの状態が続いています。今後ともこの線は上を行くでしょう。そうすると、どっから人口が来るかと言えば地方圏から来ることが確実です。ですので、これがこのま

ま行ってしまえば最終的には地方圏は壊滅する、あるいは消滅するということを意味することになってしまいます。

なんでこんなことが起こるのか。最大の要因は東京に本社があるからです。東京自身は製造業がマイナスですからものづくりはないんです。だけどお金だけ集まる、なぜか、本社があるから。新潟の工場がどんなに収益性が高くても本社は東京にあれば、新潟工場の利益は全部本社に計上されます。当たり前ですけどね。ですからこの構造がある限りにおいては、ほっといても東京は一人勝ちをしていきます。今、元々これを革命的に変えてくれればいいですけども、そんなことはなかなか難しいですよね。となればそれぞれ地域地域で工夫をしていくしかないということが、私達が今置かれている状況です。

これは佐渡市を一つの国と見立てて、佐渡市内の産業が島外に販売したものを輸出と見て、島外から入ってくるものを輸入として見て、それがどういう構成になるのかっていうことを見た表です。これは農林水産、うち米、漁業です。国で言えばGDPに当たるものです。これが輸出です。貿易収支で言えば、プラスであれば黒字、赤はマイナスで、農林水産とか米とか漁業は貿易黒字が発生しています。島内で作られたお米は島内で全部消費するわけではないから当たり前ですよね。ところが製造業は大幅な赤字です。約500億円赤字が発生しています。そのうち石油・石炭製品が92億円、貿易収支の赤字になっています。石油・石炭製品ですね。電気・ガス。電気・ガスっていうのは、そもそも島外に輸出するとか島外から電気を輸入することはありませんから、貿易収支はゼロですが、備考欄の中間材、これは原材料です。128億円外から持ってきてる。この128億円のかなりの部分は石油石炭製品の92億円。石炭なんかここに入ってきますけど、30億、これを合わせると結果的には120億になります。電力を消費するというのは、島内のお金を島外に出してることになります。午前中、再生可能エネルギーをやっていくっていうのは必要なんですよっていう意味は、太陽光

とか風力だとか、地熱だとかバイオマスだとか、そういう島内で算出されるエネルギーを元にして電力に変えていくということで、化石エネルギーで作った電力を輸入することをやめていけば、島内にお金が残る。そのお金を島内で循環していくってことは、何よりも重要ですよっていうのは、佐渡市においても同じです。つまり92億円出ていく部分が仮に島内に残れば、全部島内で循環し始めます。それが農業に行くか、あるいは工業に行くか、サービス業に行くかは、その産業構造によって分かれます。

何が言いたいかって言うと、今の経済構造からすると、東京にお金が集まる構造が強くなることはあっても弱くなることはない。そういう中で地域地域が生き残りをかけて創意工夫をしなければならない、ということになっています。なので、地域を伸ばす産業を伸ばしていって、輸入してくるものを極力島内で代替することができるかできないかを考えていく、ということが重要だということですね。

実態からすれば、明らかに農林水産業というのが稼ぎ手になっていることは事実なわけですから、ここをどうやって伸ばすか、ここが伸びていくということが結果的には全体を豊かにする可能性があるということです。なので、お米の話にしても島内の人口が減って消費量が減っていくことは争えない事実だとしても、オールジャパンベースで考えれば減ってると言ったって、１億4500万人が１億4400万になっていくペースの時に佐渡米が減っていくってことは別に決められた運命ではない訳ですよね。そこに創意工夫がどうやって入っていくのか、朱鷺と暮らす郷認証米っていうのは物語性っていうのはそういうことじゃないですか。その際に避けて通れないのは、2050年の脱炭素という国としての大方針が決められた以上は、その方向に沿った農法に転換していくことが求められるし、外国に輸出することを考えた時に、生産工程にまさか二酸化炭素が出るような化石燃料を使ってないんでしょうねっていうことをこれからはチェックされるってことになります。米に限らず。それがもし使ってるって話になると、我が国では輸入できませんよっていう話になっていきかねない。行きかねないということは考えておかなければならないということになります。

もう時間が来ましたので、この第一分科会としての意見の集約をさせていただきます。

持続可能性という意味は冒頭申し上げたように現世代の利益が今後の世代も享受できるような環境を遵守していくということであること。その場合に2050年の脱炭素だとかあるいは細かいところは色々異論があるかもしれませんけれども、脱炭素を実現する観点でみどりの食料システム戦略の示した

全体的な方向性は、多分そういう方向に行かざるを得ないんだろうと。しかし細目としては、先程松井さんが言ったように、有機農業で行くのか自然栽培でいくのかっていうのはいろいろ議論があるので、それは佐渡市としての特性としてあるいは今後の農業の特徴として考えていくということになるのではないかなと思われます。

それから地域が生き残っていくためには、最後に申し上げたような全体の経済をどういう形で持っていくのか、その中の中心はあくまでもやはり農林水産業、特に農業。もっといえば、米農業のあり方というのは非常に重要になってくる。その際避けて通れないのは労働力の需給調整の話とか、あるいは家族農業経営が持続可能な形になっていく為に、必要な手当てを講じていくということが、何よりも重要になってくるということだろうと思います。そうした中で、これは国や県や佐渡市、あるいは広く国民消費者に理解を求めていくためにも、データあるいはエビデンス、証拠という意味ですけども、そういうものをやはり生産サイドの方々は積極的に協力をしていただいて、データをとにかく収集し、それを分析して社会的にオープンにしていく、そのことによって自らが行っていることの正当性をきちんと説明をしていくっていうことが、求められてくるのではないか。そういったエビデンスをもとにして、具体的な政策、松井さんはあまりはっきり言われなかったですけども、私なりの理解ではやっぱり経営の安定性を確保するための、広い意味でのセーフティネットと言うんでしょうか、経営安定対策というのを考えるべきではないかということが、求められているのではないかと。生産者の方々には、当然色んな意味での努力をお願いすることになるだろうと思うんですけれども、それを前提とした上でやはり持続可能な経営が維持できるような、政策的な対応を求めていく必要があるのではないかということではないかと思います。

以上のような集約の仕方について、パネリストの方々の方で何か不足があるという方がいらっしゃったら、どうぞおっしゃってください。よろしいでしょうか。

ではファシリテーターが、実は分を超えて色々喋り過ぎたところはあるんですけれども、第一分科会としては、今申し上げた形で今日の議論の集約をさせていただきたいと思います。

最後までお付き合いいただきましてありがとうございました。これをもって終わりにします。

テーマ

多様な生きものを育む佐渡の農地の今、そしてこれから

トキをはじめとした多様な生きものを育む佐渡の農業が、これまで行ってきたことと、今後に向けた課題についてディスカッションします。

座長

新潟大学

教授　関島　恒夫 氏

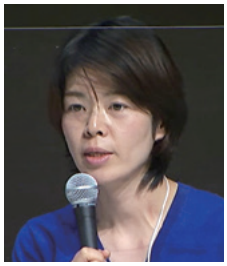
東京都出身。1993年東京大学大学院農学系研究科博士課程修了。博士(農学)。(財) KAST・近藤「冬眠制御」プロジェクト研究員を経て、1998年新潟大学大学院自然科学研究科助手、2016年から新潟大学農学部教授。

パネリスト

㈲齋藤農園

代表　齋藤 真一郎 氏

佐渡出身。水稲、果樹、ハウスイチゴなどを生産しながら、トキや生きものと共生する農業に取り組む。



パネリスト

長野県環境保全研究所

研究員　黒江 美紗子 氏

山形県出身。休耕とカエルの関係(秋田県)や、クマ・シカ・カモシカなど野生動物(長野県・現職)を研究。

パネリスト

環境省関東地方環境事務所
佐渡自然保護官事務所

首席自然保護官　澤栗 浩明 氏

新潟県出身。2004年環境省入省。釧路自然環境事務所、裏磐梯自然保護官事務所等を経て2019年から現職。

【関島】 第二分科会、「多様な生きものを育む佐渡の農地の今、そしてこれから」という課題でディスカッションを進めていきたいと思います。座長を務めさせていただきます、新潟大学の関島です。よろしくお願いします。

パネリストのご紹介をさせていただきます。一人目は有限会社齋藤農園代表の齋藤真一郎さんです。続いて長野県環境保全研究所研究員の黒江美紗子さん。続きまして、環境省関東地方環境事務所佐渡自然保護官事務所首席自然保護官澤栗浩明さん。

今日のパネルディスカッションは、最初、自己紹介ということで、これまでの皆さんの取組をパワーポイントを使って紹介して、それが終了した後に３つの項目について皆さんと議論を進めていきたいと思います。それでは最初は環境省の澤栗さんから紹介をよろしくお願いいたします。

【澤栗】 ただいまご紹介頂きました、環境省佐渡自然保護官事務所の澤栗と申します。よろしくお願いいたします。

簡単に自己紹介させていただきますけれども、私は新潟県の出身で平成16年に環境省に入って釧路自然環境事務所、裏磐梯自然保護官事務所などで自然公園や野生生物の仕事をしてきました。そして、一昨年から佐渡のトキ野生復帰の仕事を担当いたしております。トキの野生復帰について簡単に振り返ってみますと、日本産トキは1981年の一斉捕獲で野生絶滅して、その後残念ながら飼育下での繁殖がうまくできませんでしたが、1999年に中国からつがいが贈呈されて、ようやく繁殖に成功いたしました。これを受けて、環境省では2000年から2002年にかけて共生と循環の地域社会づくりモデル事業を行いまして、地域の関係者と共にトキが生息できる環境を整備するため、佐渡地域における環境再生ビジョンを策定いたしました。環境再生ビジョンでは2015年頃に小佐渡東部に60羽のトキを定着させることを目標として掲げまして、佐渡の皆様と共に取組を進めて2008年にトキの放鳥を開始しました。

トキの生息環境整備の取組のうち、環境保全型農業につきましては2001年に佐渡トキの田んぼを守

る会が結成されて、減農薬の米作りの取組が進められまして2008年には朱鷺と暮らす郷づくり認証制度が立ち上げられ、現在も取組が継続されております。認証米の生きものを育む農法をはじめとするトキに配慮した米作りは、トキの餌場確保に重要な役割を果たしています。資料のほうになりますけれども、図１に各年の年末時点での野生下のトキの個体数の推移を示しました。2008年の放鳥開始から徐々に個体数が増加しまして、2012年には野生下での繁殖に成功し、2016年には野生下生まれのトキ同士での子ども、いわゆる純野生トキが生まれました。その後、2018年には野生生まれ個体が過半数を占めるようになり、2020年末時点では放鳥個体165羽、野生生まれ個体推定277羽の計442羽と推定しています。

しかしながら放鳥トキは2018年の171羽をピークとして減少しておりまして、野生生まれ個体は増加傾向を維持してはおりますけれども、生存率が低下して増加の勢いが鈍くなっておりまして、トキのモニタリングの中で注視している状況です。なお、今年9月29日の時点での最新のデータでは現在、484羽が生息していると想定しています。

トキの野生復帰の取組では、繁殖年齢に達した成熟個体が1000羽以上になることを目指していますけれども、現在の成熟個体の推定値は252羽となっております。

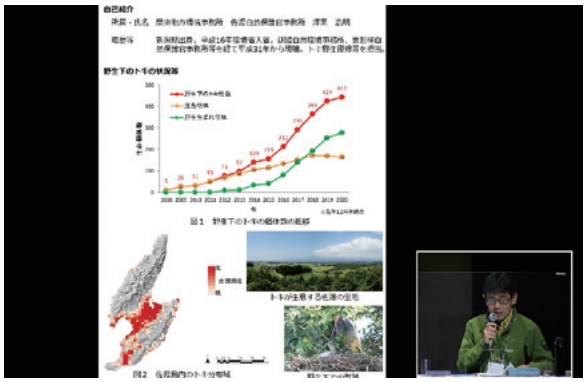
続きまして図２に佐渡島内のトキの分布を示しました。多くのトキは国中平野と羽茂平野を中心とした場所に生息しています。

トキの分散と普及啓発のために2019年から地域住民の方々と共に、島内各地への放鳥を始めておりまして、これまでに前浜の片野尾、野浦そして小佐渡の山中の生椿で住民参加による放鳥を実施しました。

右下にトキが生息する佐渡の里地と野生下での繁殖の様子の写真を載せました。トキが生きていくためには浅い水辺を始めとする餌場と、ねぐらや営巣場所となる樹林が必要です。佐渡ではトキをシンボルとした環境保全型農業、ビオトープ整備、河川の自然再生、森林管理などによってトキの生息環境が作り出されています。

トキの餌場の季節変化を示しました。主な餌場は水田、ビオトープ、農道、畦などで、季節や水田の状況に応じて利用頻度が変化します。トキが生きていくためには、積雪期も含む１年を通して採餌できる環境が必要です。夏から秋にかけての稲が大きく育つ時期は水田に入りにくくなりますので、ビオトープや農道、畦での採餌が増加します。そして積雪の多い時期はふゆみずたんぼ、ビオトープ、江など水のある環境が重要な採餌環境となります。

図４は生きものを育む農法による水田をトキが、



どの程度利用しているかを示したものでして、生きものを育む農法はトキの餌場確保に大きく貢献していることが分かります。こちらは2016年までの観察データから作成したもので、少し古いんですけれども、今の現状ではトキの個体数が増えてきていますので、未実施の水田でも採餌している個体が増えてきているようです。それぞれの農法が行われた水田のうち、トキの採餌が観察された水田の割合を示しています。例えば、江の場合100か所の水田に江を設置した場合に、そのうちの26か所でトキが観察されたということを示しています。トキの採餌利用割合は魚道、ビオトープ、江、ふゆみずたんぼ、無農薬の順で多かったです。資料の最後にトキに配慮した観察方法であるトキのみかたを載せました。トキは臆病な鳥ですので車の中から静かに観察すると見やすいです。車から人が降りると、トキは警戒しやすいです。会場の皆様には、こういった観察方法でトキをご覧いただければと思いますし、知り合いの方にもトキのみかたをお伝えいただければありがたいと思っております。

最後に、今年７月にトキ保護増殖事業計画が変更されまして、トキ野生復帰ロードマップ2025という今後５年間の取組の計画を策定いたしました。今後は佐渡での各種取組を着実に進めることに加えて、本州でのトキの定着を目指していきます。佐渡でのトキ野生復帰の取組をトキと共生する里地作りのモデル的取組として、全国に広げていきたいと考えています。

【関島】 ありがとうございました。それでは続いて「佐渡の生物多様性農業の歩みとこれから」というタイトルで齋藤さんのほうからご紹介を頂きたいと思います。

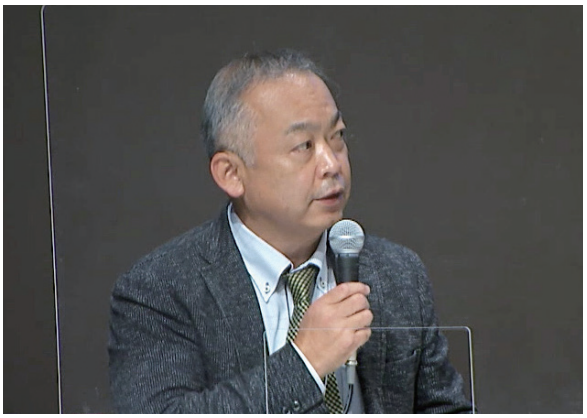
【齋藤】 有限会社齋藤農園ということで紹介させていただいておりますけれども、今、耕作面積が約40haを超えてしまっています。毎年面積が増えるので、大規模化とかトキの野生復帰だとか環境保全についてはかなり苦慮していることがたくさんありますので、その辺も含めてちょっとお話しをさせて

頂きたいと思います。

今日は認証米制度の振り返りなんかもありますけども、ここではちょっと農業の場面から見た、認証米制度の歩みっていうところをちょっと紹介したいなと思っています。トキと生物多様性農業について2001年から始まっていますので、そういう農業が今年20周年目になるな、という思いがあります。2001年からトキと農業の関係が始まってまいりました。中国からトキを頂いてその年に雛が誕生したということで合併前の新穂村村長がこの後、10年、20年後には必ずトキが佐渡の空に戻ってくる。そのためには今から、生きものがたくさん含まれる田んぼ作りをしなくてはいけないよと提案いただいて、そこで７軒の農家が集まってトキの田んぼを守る会というものを立ち上げて、減農薬や無農薬栽培の取組を始めてきたというのが、一番最初のことだと思います。この年に初めて東京のNPOのメダカの学校の方々が、生きもの調査を行いまして、そこで生きもの調査が始まったということであります。2002年から、無農薬、無化学肥料の米作りをはじめました。１年目は減農薬ということで皆さん自信を持ったんですけども、やっぱり農薬の力が非常に凄くて、２年目から草との戦いが、この後20年続いてきていますけれども、改めて化学農薬の力を実感したなっていうのがこの年でありました。そして午前中話にありましたように大崎市の方々が、ふゆみずたんぼというのを先進的に取り入れられていましたので、それについて佐渡としても生きものを育む視点でふゆみずたんぼ導入が決まったのも2002年からであります。そして、その次の年に佐渡市が合併しまして、これがなかったらうまくいかなかったと思いますけども、台風による壊滅的な被害で、市長のほうから話がありましたように、これを契機にトキをシンボルにした米作りが佐渡で進んできたということであります。

そして2001年に色んな多様な方々が集まって兵庫県豊岡市でのコウノトリの野生復帰の取組について研修に行ったということで農業者も含めて、色んな方々がトキの復活の取り組みに火が付いたというような状況だったと思います。2008年に認証米制度が立ち上がりました。やっぱりこれは農協、市役所、生産者が一体となった取組ということで急速に佐渡全島に広がっていきました。佐渡の農業は今年から生物多様性農業という題目で農業が進んできました。そして2011年に世界農業遺産に認定されました。そして、現場の取組としては、2008年から減農薬の米づくりが始まったんですけども、まだその当時は３割減減取り組みでしたが、2012年には佐渡の稲作面積ほぼ100％で５割減減の取組がなされたということで５割減減がスタンダード化してきたということであります。

また、同じ年に当時から若干問題となっていましたけど、ネオニコチノイド系農薬が問題視されていました。当然これを使うと最初の頃はですね、生きものがいなくなっちゃうよっていう話でした。またスズメがいなくなったりツバメがいなくなったりというような現象が日本各地で言われてきました。その原因が、この農薬だったということでJA佐渡と共にネオニコチノイド系農薬の規制に取り組みました。最初、注文書からこの薬剤を取り消しという事ですけれども、この農薬を使ったものは認証米にはなりませんし、JA佐渡米という規定からも外れるということで、今ほとんど使われていないと思っています。この取組については11月３日のTBSの報道特集で佐渡の取組ということで、放送されますので、時間がありましたら見ていただきたいと思います。そして2020年から認証米制度も10年たちますので、この辺の見直しをしようということで協議会のほうで見直しの検討を始めています。これは認証米の内容ですけども色が変わっているところが当初から設定した部分に加えて新しく追加した部分となっております。エコファーマーの基準があるんですが、申請が難しくなってやめていくっていう高齢化農家の現実がありますので、それを令和２年度から削除しています。それと生きものを育む農法の中で無農薬無化学肥料栽培を追加しています。当初、これは特に手をかけて生きものを増やしていくっていうことじゃないということで、なかなか受け入れてもらえなかったんですけど、やはり生きもの調査なんかをしていくとこういう田んぼには、生きものがたくさんいるっていうことで追加をしていただいております。あと美味しさという部分ですね、当初この制度を発足した時に、認証米の中でもおいしくないものがあるという声がたくさんありましたので、品質基準も入れていただいたと。そして、トキは夏場畦畔で餌を採るということで、畦への除草剤を禁止するということも取り入れていただきました。そういう意味で進化をしていくということが認証米の大きなテーマでもありますので、このあと色んな形で時代に合わせて、認証米も変化していくんだろうなと



思います。

一つの大きなコンセプトが、佐渡全島で誰でも取り組めるっていうのが大きなポイントだと思います。ひとにぎりの農家が取り組むというのではなくて、農家の方々全員がこういう農業に取り組むところが認証米の大きな成功だったと思います。ただ、平成24年をピークに取り組む農家の面積が減ってきているのが大きな課題になってきています。

トキは野生復帰から12年経ちました。トキはもういいというような言葉も最近出始めています。やっぱりトキは良いしもっとお金儲けをしようよというようなことも事実であります。これについてはまだ課題がありますので、後ほど喋らせていただきます。

佐渡がトキを育んできた農業から地球環境を考える農業に転換していかなきゃいけない。と考えているところであります。５、６年前佐渡農業は周回遅れのトップランナーと言われた事もあります。ただその頃から比べると、世界は環境問題にかなり傾倒しておりますので、当時からやってきた佐渡は逆に言うと、これからトップランナーになれると思っております。

今、国の方でもみどりの食料システム戦略が出ました。でも、それについて佐渡の歴史を見てみますと、基本は50年目標なんですけれども、佐渡は減農薬だとかそういうことを考えると、もう10年前にその目標を達成しているような状況でもありますし、ネオニコに関しても2040年に脱ネオニコを出しました。佐渡は2012年にそれを取り組んでいるということでありますので、あとは有機農業をどう展開していくかというところが、それにとっても大きな課題になってくると思います。

トキの学名はニッポニアニッポンでありますので、私なりに佐渡の農業は日本の誇れる農業、世界に誇れる農業ということで日本の農業はこういうものだというような位置づけで、ニッポニアニッポンプロジェクトみたいなものができたらいいかなと思っています。そういう意味で佐渡の米づくり、農業は生物多様性を育んでいくんだという部分と、地球環境にも優しい農業だということでCO_2を排出する農業よりも酸素を生み出す農業になるんだというようなところをちゃんと見える化していった方がいいだろうと思ってます。問題提起しているんですけども、佐渡の米作りは一発肥料というのが主流になります。約８割一発肥料です。でも一発肥料はプラスチックコーティング肥料でありますので、田んぼで使われたものが川に流れてそして海に流れていってマイクロプラスチック化する。それを食べる生きものたちがいるっていうことでこの辺をGIAHS認定地域である佐渡がしっかり認識をしながら、環境に貢献していく、エシカルな生産をしていくというところをしていって、また消費者の方からはエシカルな消費をしてもらうというような循環を生み出す必要があるだろうなと思ってます。

佐渡は生物多様性農業と言われてますけども、今年は取材がけっこうあって、認証米が成功したと思いますか？という質問が結構ありますけれども、認証米自体はまだまだ問題がありますので、決して成功してはいませんよという話をさせてもらってます。しかし、一つ成功したということであれば午前中からの話にもありますように、郷土愛というか地元に対して誇りを持てたというのが一番大きな宝だったと思います。2012年からずっと使ってるスライドなんですけど、世界農業遺産と朱鷺と暮らす郷の関係性というか、精神論になりますけど５点ばかりにしてますけども、年を追うごとにこの５点に近づくという意識が年々薄れてきているなというような感じもしてますので、その辺の取組を今一度見直して生きもの調査だとかに活かしていくってことが大事かなと思います。

【関島】 ありがとうございました。これまで環境省の澤栗さんからトキの現状、個体数とか採餌環境について紹介していただきました。また、齋藤さんのほうからは、佐渡の生物多様性農業についてこれまでの取組を紹介して頂きました。私から佐渡の環境保全型農業に対してトキがどのように貢献しているかといったところを紹介したいと思います。

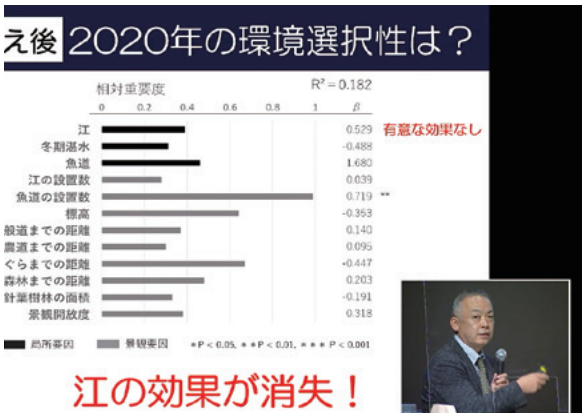
現在新潟大学農学部で動物生態学の研究をしています。出身が東京新宿区で本当に生物というものが佐渡に比べたら圧倒的に少ない環境の中で、ある意味生物に対する飢えですね。そういったところで非常に高い価値のあるものが身の回りにないことで、今の職場の中で生物を研究できるということで魅力を感じています。

今取り組んでいることは、トキの生息環境評価なんですけど、鳥類に対する風力発電の影響ですね。昨日環境省中井事務次官からこれからの再エネの推進が紹介されました。今、全国的に進む中で鳥類、特に希少鳥類が衝突していることに対する影響。それから今、齋藤さんのほうからも紹介されたように、

殺虫剤ですね。皆さんネオニコチノイド系の殺虫剤を聞いたことがあると思いますが、その殺虫剤が生物、それから人にどういう影響を与えるかということを調べております。

今日ここでお話したいのはトキの生息環境を支える認証制度と順応的管理ということです。順応的管理という言葉を、ご存じない方もいらっしゃるかもしれないですけれども、実は非常に重要な考え方ですのでご紹介したいと思います。

先程、澤栗さんからご紹介ありましたように野生下のトキ、これは６月の時点であって451羽になってますけど、９月の時点では482羽になっているということで500羽近い状況になっています。今では佐渡の水田、それから森林で普通に見られるような鳥です。このトキの生息に対して、農地の再生というのは非常に重要な役割をしてきました。これまで多くの方々が野生絶滅以前の調査を参考にドジョウ、カエルといった生きものを増やしていくような農法に取り組んで推進していく必要がある、その中のポイントですね。農地再生を後押ししたのは、まさに認証制度の導入ですね。先ほど齋藤さんの方からご紹介されたように生きものを育む農法によって栽培されるという、かなり農家に対しては負担をかけてしまうんですけども、それにいち早く取り組んでいる。そこでポイントとなっているのは、江の設置だったり水田魚道の設置、それから冬期湛水する。ビオトープの設置ですね。そういう取組をすることによってトキの餌生物を育む。こういった取組に対してトキにとってどういった生息環境が望ましいのか、これを評価していくってことが当初から重要だというふうに考えていました。その評価のときに水田を一枚一枚評価、それぞれの水田で何をやってるかその取組に対してトキはどうように反応してるかということを調べていくということが、しっかりと認証制度を成功させる、トキの野生復帰を成功させる情報として大事だろう。ただ、そういう提案をして水田一枚一枚の情報を整備するというのはその頃、委員会等で話をしても、なかなか取り合ってくれなかったです。そのときに手を差し伸べてくれたというか、これは非常に重要だと一緒にやって行きましょうということですごく後押ししてくれたというかそれを進めてくれたのは、今の佐渡市長、渡辺竜五さんです。トキの利用場所情報だったり、環境保全型の農業、ビオトープの情報、生物量の情報というのをGISのプラットフォームに全部一元的に管理する方法です。それを佐渡市のほうでは生物多様性支援システムという名前を使ってデータベース化していました。今は農水省の方でも水田一枚一枚っていう形で一筆情報を整理するということを進めていますけれども、佐渡の取組が一番早かったのではないかと思います。



そこで想定していたのは、認証制度の取組を一元的に管理して、そしてそれに対して評価を行う。そして取組に対してトキがどのように応答していくのかっていったサイクルを回していく。これが大事だと考えていた。こういう仕組みを作っていくためには検証です。このPDCAサイクルを回していくためにはアクションに対してどのように評価していくかが大事だと思っています。

次はポイント２として、生物多様性支援システムを活用して認証制度の効果の検証の話です。解析の手順なんですけど、皆さん中学生、高校生のころに一次関数、二次関数とか学ばれたと思います。まさにそれと同じ考えで、下の式を見ていただけるとY＝$\beta_1 + \beta_2 \chi_1 + \cdots$という形で式があります。このように変数としてたくさんの変数を取って、それによって応答変数を説明していく、というような関係式を作る。これを統計モデリングと呼んでいるんですが、それによって評価しているということを意味しています。応答変数ではトキの位置情報、それを認証制度、それから農地管理の情報、それから農地周辺の景観情報を使って説明できるかどうかといった検証をしています。それを一年５期ですね。田植え後、最高分げつ期の夏の時期、稲刈り期、積雪期、田植え期の５期で環境解析を進めています。これを放鳥直後の2010年から５年ごと2015年、2020年という形で進めています。その結果を紹介します。これは田植え後に絞った結果なんですけども2010年と2015年の結果を見ていきます。これを見ていただければ分かるように、左の結果では黒いところはトキが利用している水田ですね。それから餌をついばむ水田、それから灰色の部分が周辺の環境、景観要因という形で灰色にしています。2010年、放鳥直後の田植え期に江に対する反応は見られない。それが2015年になると江に対して極めてすごい応答を示している。プラスですね。江が活用されている。それから冬期湛水に関しては、これは放鳥直後の2010年、2015年と共に冬期湛水を避けているという結果になりました。これを絵で示しますと、認

証要件に関しては、江がある環境を好んでいて、冬期湛水する環境には忌避している結果が見られていました。これに営巣木の変数を加えてみてみると繁殖期には営巣木に近い環境で、江があるような水田を好むと。そして一般道から離れているとか開けた水田地域とかそのような環境を好んでいるということが言えると思います。

そして３回目の調査。この５年後の調査ですね。どうなっていくか。2020年の環境選択性の結果として田植え後の時期ですね。江に対して有意な効果なし、江に対して反応しなくなってるんですね。どういうことかというのをこれから解析していかなくてはいけないんですけども、なぜ江の効果がなくなったのか、推察したものを紹介したいと思います。通年型の江ということで一年中、田んぼの側面に水が張られている。この江の特徴は水深が深い、それから畦によって水田と一部隔離している、それから管理コストが大きい。これに対してもっと江を推進していくためには簡易型の江というタイプを導入していくということが行われてきたわけです。これは営農期に湛水する、水深が浅い、江と水田が連続している、管理コストが小さい。農家の方からすれば、通年湛水は非常にコストがかかるので避けたい。でもトキの為に江を創出する。そういったところで広まってきた簡易型の江なんですけれども、こういうようなタイプの違いに対して、トキが江に対してこういった環境で生物学というのは分からないですけど、その効果が薄くなっていくんじゃないかと推測されます。

トキの野生定着までの長い道のりを絵で示したものなんですけれども、トキが放鳥された。そして自然再生していく。そして繁殖しました。その時に私も色々、学会等で色んな方の意見を聞くと、もうこれでトキの野生定着は成功したんではないかと言われることが多かった。でも、そうではないんですね。繁殖は成功したかもしれない。でも、色んな取組を佐渡が行っている。それに対して、トキがどう応答してるかということを検証していく検証手続きが大事なんですね。私たちは放鳥直後の2010年、そして５年後の2015年、そしてその５年後2020年に評価した。こういった順応的管理を進めていくことによって、認証制度が内容をより最適なものに仕上げていく。そういうような手続きが大事なんです。なので、実は自然再生っていうのはトキの繁殖が成功したから終わりではなくて、こういうことを、ずっと続けていくことによって初めて成功する。佐渡はそれができるんです。色んな情報も行政の方々の関わる体制も含めてなんですけれどもそういったことが全て揃っている。そういった体制があることが非常に重要だと考えます。

私はこういった順応的管理を進めていくことに

よって、特に野生定着というのは安定したものになるだろうと思っていたんですけども、今そういった取組に不安視する状況が少しずつ現れています。人口減少が進むなかで耕作放棄地が広がっている。これは佐渡だけの話ではないんですが、耕作放棄地の拡大に伴い、さらに外来種が侵入してくる。それから場合によっては、足引きが早くなってくる。そういう乾性遷移が進んでいます。そういった事によって起きることは、トキの生息地としての価値はどうなるのか、それから生物多様性は変化するのか、そういったところを見ていく必要性があって、これから耕作放棄地という問題は大きな問題になってくるのではないか、ということで最後のパネリストの黒江さんにつなげたいと思います。

【黒江】 長野県環境保全研究所の黒江と申します。今は県の研究所で哺乳類の担当になっておりますので、熊やエゾシカ、カモシカなどの研究をしています。

「生物多様性を支える水田耕作、周辺景観で異なる休耕と生きものの関係」ということで紹介させていただきます。専門分野は関島さんと同じように動物生態学はあるんですけれども、特に土地利用や地形が生きものにどういう影響を及ぼすか、また、生きものの数がどういう風に決まっているかというのをこれまで取り組んできました。これまで結構色んなところで環境調査をやってきたんですが、九十九里平野であったり、秋田平野、佐賀、長野の戸隠などで田んぼの生きものなどを調べてきました。今日は特に秋田平野のあきたこまちを栽培したところでのカエルの話をご紹介します。

ちょっと先に日本の水田っていうところが、どういう場所かというのを少し視野を広げて捉えていただきたいなと思って、このスライドを作りました。日本の特に田んぼっていうのはすごく昔から存在しているものなので、生きものの住む二次的な場所としてずっと機能してきました。左上は佐和田の航空写真とフロリダのほうでの農地のサイズを比べると、農地一個一個のサイズが全然違うんですね。日

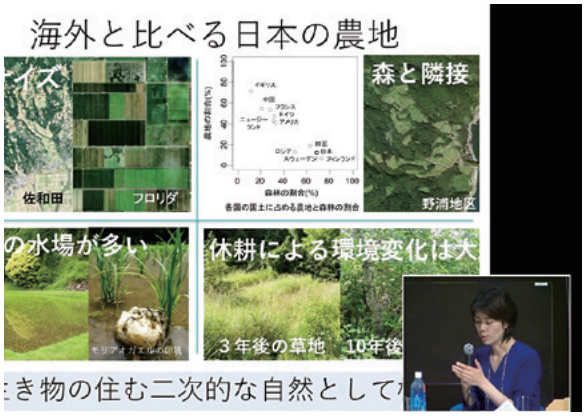
本の方は急斜な地形であることもあって、一つ一つ農地が細かい、サイズが小さいという作りになっています。そしていろんな環境が田んぼを取り囲んでいて、とても土地利用の多様性が高いとなっています。

右上のほうは農地と森林の関係を示しているグラフなんですけども、基本的に北米やヨーロッパのほうは農地というのは、森林を減らす要因として、生物多様性を減らしている要因として認識されています。中でもポーランドのように伝統的に昔から農地を維持しているところというのは、同じように二次的な自然として機能してるんですけれども、ヨーロッパの方は本当に国土の大部分を農地が占めていたり、森林の面積がすごく少ない。グラフの左上のほうは森林の割合が少なくて、農地の割合が高い、イギリス、中国、フランス、ドイツ、アメリカといったところになります。同じ先進国の中でも日本は国土の中に占める農地の割合がすごく少なく、一方で森林は５割以上はまだ国土に残っているという珍しい環境になります。例えば、野浦地区のように田んぼの周りが森に囲まれているというような所になります。田んぼの特徴として、皆さん十分ご存じだと思うんですけれども、遠浅の水深が浅い水場であるっていうことになっています。その水深の浅い水場は、休耕して３、４年経つと草地になり10年以上経つと木が生えてくるように、どんどん植生の遷移が進んでいくというのが日本の農地の特徴になります。

日本は特に降水量が多いので植生の遷移のスピードがとても早い国になります。イギリスの農地は、もともと水田ではないので水を溜めるような農地ではないんですね。草地だった所を休耕しても草地のままなんですよ。大きな環境の変化っていうのはヨーロッパの農地はあんまりない状況になります。一方で、日本の農地っていうのは水が溜まっていく所を、何も作業しなくなってしまうと、どんどん樹林化が進んでいってしまう変化も大きいですし、スピードも速いです。これが休耕することでの環境変化ということになります。

休耕すると生物がどうなるかというのをお示ししたものになります。秋田平野で特にカエル類を調べていたんですけれども、なぜカエルにしたかというと、蛇であったり佐渡にいるトキであったり色んな生きものを支える餌になり易い、餌生物として代表的なものとして、カエルを調べていました。秋田の場合はトキはいないので、サギであったりサシバといわれる猛禽類などの主要な餌となっています。秋田にいるカエルはアマガエル、トノサマガエル、ヤマアカガエル、モリアオガエルというカエルがいるんですけれども、縦軸がカエルの量で横軸が休耕している割合という風に捉えてください。休耕していくと最初の方は少しカエルが増えます。ですがある程度、休耕がどんどん進んでいってしまうと、カエルの量は右肩下がりに下がっていくような関係にあります。これはシンプルに水田を産卵場所として使っていたので、産卵場所がなくなるということであったり、田んぼや畦から出てくるような餌も少なくなってしまったというようなことがあげられます。休耕し始めの頃は、増えるっていうのは少し最初、不思議だったんですけど、これは後々調べていくうちに、休耕をするとしばらくは少し水が溜まった箇所が残っていたりするんですが、そこで農薬を使わなくなる、農薬を使わない面積が増えるっていうプラスの効果が働いて数年は続くっていうことが明らかになってきました。その結果として少しの休耕っていうのはカエルの量にプラスに働くんですけれども、それ以上のたくさんの休耕っていうのはカエルの個体数を減らすという影響になりました。先程から平野と中山間地の違いの話が少し出てきているんですけど、平場と山つけの田んぼで同じ面積を休耕しても生きものへの影響は大きく変わりました。上の方が中山間地、元々ちょっと中山間地の方がカエルが量が多いんですね。その中で休耕していくと、一時的には増えるんですけれども、そこから先は急激にカエルの量が減ってきてしまうという関係にありました。一方で平野というのは、かなり広い平野なので、平野から山つけの田んぼの方が見えるような距離にはないんですけれども、平野の中での休耕っていうのは緩い関係ではあるんですが、少しずつカエルの量を増やすという、ちょっと山つけの田んぼと平場の田んぼは別の反応が出ました。これは平場のほうは休耕が一面に水源がある中で少し草地ができるという事になるので、農薬を使わない場所が出現したり、カエルにとっては餌になるような昆虫を増やす場が出現するっていうような、そういう効果があるのではないかと考えております。

最後に休耕と生物多様性なんですけども、中山間地の休耕っていうのは水場がなくなってしまう。あるいは森と水場を分断してしまうことから、ほとん



どのカエルが減少しました。秋田でも調べたんですけれども、サシバって書いてあるものはカエルを餌にする猛禽類で、佐渡でいえばトキやサギなどが捕食者にあたると思います。左側の耕作放棄地の割合が低い所にはサシバが繁殖をしていくところもすぐ近くにあるんですけれども、休耕地の割合が増えて、だんだんカエルが減っていく場所では、サシバはある程度の所でいなくなってしまうというふうに発見できました。

休耕と耕作が生物多様性、今回はカエルとその捕食者を見たんですけれども、そこに及ぼす影響っていうのは周辺がどういった場所であるか、水田がどういった立地にあるのかということで大きく異なるという結果が出ました。

【関島】 ありがとうございました。紹介いただいた内容を踏まえて、おもにこの３つにポイントをあててディスカッションしていきたいと考えます。

まず一つ目は、環境保全型農業と生物多様性、トキの野生復帰との関係について話を進めていきたいと思います。まず澤栗さんに伺っていきたいと思いますが、放鳥後、トキの個体が順調に増えてきて、先ほどの報告だと482羽という事です。佐渡で進められている環境保全型農業の推進が大きく貢献していると考えられていますか。

【澤栗】 そうですね。佐渡で進められている環境保全型農業のおかげではないかと思っております。放鳥を開始する前は主にトキは中山間地域の棚田や沢で餌を採って、そしてねぐらや営巣のためには山の中の松の大木のようなものを使うだろうと考えられていたんですけど、放鳥されたトキはおもに平場の水田やビオトープで餌を採って、屋敷林や社寺林などの身近な林を利用して、予想と違う行動を取っていました。平場で餌を採れるっていうことは環境保全型農業のおかげだったんだろうと考えています。

【関島】 もう一件澤栗さんに質問したいと思うんですけれども、ご報告いただいた個体数の推移を見ると、ここ数年、増加傾向に少し陰りが見えてきているように見受けられますけども、それに対してはどのようにお考えでしょうか？

【澤栗】 増加の速度が鈍っているのは一番大きい要因としては、特にトキの密度が高い国中平野などで密度効果と呼ばれる、生きものがたくさん居ることによる影響というものが出始めているのかなと考えております。放鳥個体については、猛禽類に捕食される率が野生生まれの個体に比べると高くて、猛禽類に襲われたりしている可能性が高いのかなと考えております。よい餌場を野生生まれの個体の方が上手く使うことができているのかもしれないです。野生生まれの個体の増加速度も2019年から鈍っているんですけれども、これは、トキはコロニー繁殖ということで、ある程度トキの巣が近くの林に集まっていたりすると繁殖成功する可能性が高まるような印象が2015年、2016年、2018年ごろまでずっと続いていたんですけれども、トキの個体数が増えてくるとお互いの個体間での干渉というものが増えたり、天敵がコロニーに入ってきてしまったり、そういったことでコロニーが崩壊してしまうことが起きています。そして、最近ではコロニーでの繁殖がなかなか上手くいかなくなって、野生生まれの個体の増加も鈍っているようです。繁殖期の場合は春の強風によってトキの巣が壊れてしまったり、気象的な要因もあるように考えています。

【関島】 ありがとうございました。それでは、齋藤さんに質問させて頂きたいんですけれども放鳥前から齋藤さんはトキが生息できる環境づくりを実践されていて、どういったところが大変だったのか農業者の立場からお聞かせ願いたいと思います。

【齋藤】 一番大変だったのが、今までやってきた農業からの転換、意識転換ですよね。トキを増やすのか？自分の経営を守るのか？という。認証米制度ができた時からの農家の方々から、私たちが今までやってきた農業が悪いとは思っていないという発言があり、そこからトキが自分の田んぼにいることによって意識転換がはかられてきた。そういうことでやっぱり意識転換をどうやってきたかというところが一番難しかったんじゃないでしょうかね。あとは、やっぱり生きものをどう増やすか。田んぼっていうのはお米作りだけの機能っていう部分から、そこに生きものを育んでいるっていうこと、佐渡の景観が良くなっていくっていう部分の理解をし、どう農家の方々が対応して取り組むかっていうところが大切だったと思います。

【関島】 ありがとうございます。私がトキの餌場環境評価の調査に入ったのは2004、2005年だったと思うんですけれども、その頃まだ佐渡に環境保全型農業に取り組んでいる方がいらっしゃらなくて、齋藤さんは周りがそういう意識になってない中でトップランナーとして活動されて非常にぐっときたんですけども、そういった闘志ですよね。かなり苦労されて事に対して、認証制度という事にふれましたね。認証制度の効果っていうのは、齋藤さんの立場からはどうでしたか？かなり追い風になったということでよろしいでしょうか？

【齋藤】 佐渡の人は全体が動くとなびくいう傾向があると思います。そういう意味では農協だとか市役所がそっちの方向に政策転換したということが、一番大きな追い風だったと思います。であれば農家も一緒にやろうという流れで認証制度に取り組むし、減農薬だとか減化学肥料の栽培が急速に進んだという事がありますね。行政と農協の力が大きかったと思います。

【関島】 今日の午前中のパネリストの方からも紹介されてましたけども、自分の田んぼにトキが降り立ったときに非常に喜びに感じたと。トキを放鳥する前から、農業者の方からトキを放鳥した時に水田に入って稲を荒らす、それがすごく懸念されたというような声を聞きました。そういうことが懸念事項だったわけですけど、自分の田んぼに降りたって観察したときの気持ちはどうだったでしょうか？

【齋藤】 最初からそういう農業をやってきた田んぼにトキが降り立ったかというと、そうでもなかったと思います。うちの田んぼに降り立ったのは放鳥してからたぶん２年後くらい。GIAHS認定の年に入ったんですよね。その前までは、放鳥したトキはどこに行くかっていうと、放鳥に反対だとか、認証制度で農薬、化学肥料を減らすことに反対していた農家の田んぼに降りるって事があったんです。降り立ったことによってその農家はうちの田んぼもトキに認

められた良い田んぼなんだということで農薬、化学肥料を減らす栽培、認証制度に参加するパターンが結構多かったと思っています。やっと俺のとこに来たか！という感じですよね。

【関島】 もしかするとトキも、トキに対して反対していた方の水田に降り立って、認証制度や環境保全型農業推進という事に対して凍り付いた所を溶かすような振る舞いをしたのかもしれないなと。お話を聞いていて思いました。

では黒江さんに質問させていただきます。先程ご紹介あったように国内外の水田を見てきてらっしゃると思います。また調査もされてきてると思います。トキが生物多様性を支える佐渡の農業というのを黒江さんの立場からすると、どのようにご覧になりますか？

【黒江】 私も2010年くらいのまだ学生時代だった時に、江の所で生きものをすくい取り、調査とかやらせていただいたんですけれども、他の田んぼ、秋田とか佐賀とかそういうところにトキみたいなシンボリックな生きものがいないので、生きものを増やす、ここは生産の場であって生きものの住処を提供するわけじゃないんだという考えがまだまだ多いんです。そういう中で、これだけ面的にこういう取組が広がっていて、かなりの方達がそのトキに対して寛容に暮らしを共にするっていうのは、佐渡自体が生物多様性の島としてやっていくんだという所も、勢いというかすごい誠心的な場所だなっていうのも10年くらい経って思いました。

【関島】 午前中のパネルディスカッションの中でも渡辺市長が、佐渡の観光資源の位置づけが世界でランキング100に入ったというお話がありました。渡辺市長は参加者の方々に、皆さんご存じですか？と問いかけをされました。たぶん多くの方がご存じないんだと思います。自分たちの住んでいる環境、そして農地というものがどれだけ国内外の人たちから熱い視点で見られているかというところを、なかなか認識することができないと思うんですけど、そういう形で非常に注目されている場であるということに今一度、認識していただけるといいのかなと思います。

パネルディスカッションの２つ目のポイントですね。環境保全型農業や認証制度の推進で見えてきた課題ということになります。認証制度、これは非常に有効だったということは今までのお話の中でもお分かりになったのではないかと思います。一方、齋藤さんの説明の中にもあったように、ちょっとトキはいいかなとか、認証制度の方も少しずつ取組から外れていく農家の方が現れている。そういった中で

課題をもう少し見える形にしていく必要があるんじゃないかということで課題について話を進めていきたいと思います。

まず齋藤さんにお聞きしたいんですけれども、先ほどの資料で朱鷺と暮らす郷づくりの課題と述べられていました。放鳥後から今に至るまで環境保全型農業に取り組む農家の方々の意識が、農家という立場に立ったとき周りの方の意識がどう変わってきているのか、どうお考えですか。

【齋藤】 意識は高まってきているんだと思います。トキを増やしてきた佐渡の環境をよくしようという中での取組はしてきたんですけども、資料にも書いてありますけれども、高齢化による老化現象によって、私、先ほど40haと言っていましたけれども年々担い手に農地が集まってきて大規模化をしていく。集約化されていく中で、管理ができなくなってきているっていうところが、一番大きいんだと思います。今年あたり米価が下がってきて、もう農家もやっていけないよというような状況になっています。そういう中でお金がないと経営が成り立たないので、ちょっと環境は二の次にして昔の化学肥料に頼った農業に戻ろうかというような、これは社会的な要因だと思いますけども、そういう中で環境から逆方向の農業に戻ろうという農家、経営体も来年以降も出てくるだろうと思ってます。

認証米はかなり手がかかります。水管理だとか江の泥あげだとか草刈りだとか手がかりますので、面積が大きくなればなるほど、そこにかけられる手が足りなくなるので、どうしても私もですけれども、草刈りが今まで５回くらいやれたところが２回くらいしかできないと。そうすると景観が荒れてくる。生きものの多様性を失っていくというところに繋がっていくので、これから認証米の大きな課題の一つはどう大規模化に対応していける制度に変えていけるのか。そういうところが大事なのかなと思っています。これは農家だけでの取組では解決できない問題だなと思っています。

【関島】 島外、県外から見ていると佐渡の取組というのはまさに環境問題、環境に対して非常にうまくいっている先行事例ではないかという風に見ていく方々が多いのではないかと。ただ一方、そこには農家の方々の苦悩があってそういった問題にどうやって解決していくかというのは佐渡の農家の方々が考えていく話だと思いますし、それをさらにいうとGIAHS、世界農業遺産という形で認定されている中で過去の遺産ではなくて、今人々に作られていく環境というものが指定されているわけなので、GIAHSの中でそういう問題をどのように考えていくかといったところも、簡単に解決できるような問題では

ないですけど、佐渡の農家の方を中心に考えていかなきゃいけないというふうに思います。

澤栗さんに質問させて頂きたいのですが、トキを見守る立場から、生息環境、農地について最近見てる中で、変わったなとか昔と変わってきてるじゃないかといったことがあればぜひお聞かせ頂きたいなと思います。

【澤栗】 齋藤さんがおっしゃっていたような課題というのは見聞きしている中であるんだろうなと感じております。高齢化や人口減少していく中で、こういった取組を続けていく事の難しさというものがあるんだろうなと感じています。佐渡の皆さんがやってらっしゃる取組は、すばらしい価値があると思うんですけれども、自分達で続けているとその価値が見えなくなったり、気づきにくくなったりというのがあると思いますので、外との交流や、こういったイベントは一つの見直すチャンスになったりするのかなと思っています。

【関島】 ありがとうございます。お示し頂いた最初の自己紹介の時の資料で４のなかで、生きものを育む農法ごとのトキの採餌環境利用を割り出していまして、それを見ると、魚道53%、次にビオトープ、そして江、冬期湛水、無農薬と続いているんですけど、こういった農法に対する反応性が解析した結果を実際見ていく中で選好性が変わってきているとかはあまり議論になっていないですか？

【澤栗】 こういった形でまとまったデータの取得というのが2016年くらいまでなので、その後は感覚的なものだったり、短期間でとったデータだったりするんですけども。昨年佐渡は雪がかなり多くて厳しい冬だったんですけれども、その中でトキがどのように過ごすかというのを見ていったところ、江とか、冬期湛水の全面の湛水ではなくてワダチの部分に湛水するような水田でトキが餌を採って冬をしのいでるような様子が見られました。一方で、関島先生がお調べになったように冬期湛水は全面になった

ときに生きものにとっても、なかなか厳しかったりすると思うんですけれども、トキの餌場の選好性というのは多少変わってきているのかもしれないと思います。いずれにしてもトキは通年餌を食べていかなくてはいけなくて、季節によって餌場が変わったりしておりますので、なるべく様々な環境の中で一年を通してトキが餌を食べられるそういった環境が保たれていくと良いのではないかと考えています。

【関島】 ありがとうございます。私が冒頭で紹介した資料で認証要件の検証を定期的に実施するというので管理の重要性をお話しました。先ほど江に対すると応答というのを紹介したんですけど、他の認証要件もこういったトキの応答の変化が見られていて、水田魚道に対しては放鳥直後はすごい選好性が高かった。水田魚道を設置している水田に降り立った結果になっていたんですけど、５年後の2015年には水田魚道に対する応答が全くなくなっていった。今回、３回目の調査で、また水田魚道に対する反応が少しずつ見られてきています。このように、この15年の間でも認証要件への応答が同じ要件でも変わってきているということですので、水田魚道の場合でいくと、なぜ最初強い応答があったのに５年後になくなったのかということで私は全ての水田魚道、百数十か所を全部見ていったんですけど、メンテナンスがされてなかったということなんですね。本来であれば、水田魚道は水路から魚が上がっていくような形で設計されているんですけど、５年間の間に水の流れが保たれている形がなくなってしまっていて、土が溜まる、それから魚道自体がねじれて通路になっていないとかですね。そういう様々なトラブル、問題がでている。そういった意味では水田魚道は非常にコストがかかる。維持コスト、それから作成するコストがかかる、メンテナンスしていくといったところを重要視しなくてはいけない。そういうことも含めてどういう要件が有効なのか、実施可能な要件になるのかといった所を絶えずチェックしていきながら、PDCAサイクルを回していくということが大切だと思います。そういう意味では認証要件も、これをやっていけば万全だっていうものではなくて、そういったこの課題が絶えず出てくる、それをチェックする。その機能はやっぱりこういう制度を実施していく上では必ず必要になってくるということです。

これまでの話をお聞きになられた上で、黒江さん自身はどのように思いますか？

【黒江】 私自身が調査に携わっていた時は、やはり江がある田んぼっていうのが生きものが多くなっていて研究者でも盛り上がっていた時だったので、2020年で江の効果がなくなったと聞いて、今回凄くびっくりしていた事ではあったんですけれども、今伺った、魚道もそうだったんですけれどもトキの選択性が変わったわけではなくて環境で構造の変化があったということなんですよね？

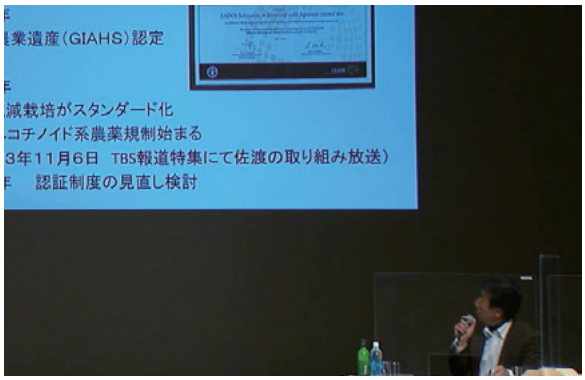
【関島】 そういうことです。

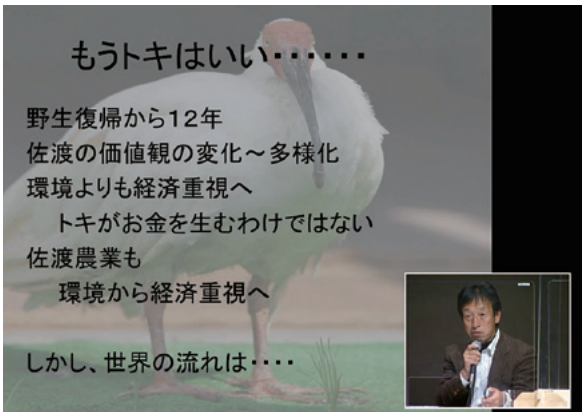
【黒江】 生きものの為だけにやっている場ではないので、毎年毎年良い環境を保っているというのが生産者の方はすごい大変だと思うんですけど、先ほど澤栗さんがおっしゃったようにトキは年間を通してかなりの量の生きものを種類も量も食べていると思うので、それを支えていくのには面的にどうにか良い農法でやっていくというのが、すごく大事なんじゃないかなと思って、そういうトキが居ても離農であったり休耕の影響というのは佐渡でもすごく大きな問題になっているんだなと。他の地域でも同じような問題を抱える中で、なかなか難しい課題だなと思っています。

【関島】 齋藤さん、いかがでしょうか？

【齋藤】 江の効果がなくなってきているという話なんですけど、現場の中では、湿地管理と乾田管理がかなり明確にされてきているという部分がちょっとギャップがあるんですよね。佐渡の生物多様性農業で生きものを育むために湿地を整備していきましょうよという流れで米作りをしてきましたけども、最近は気象災害もあって、等級が悪くなる。そのために中干しをしっかりやることだとか、水の駆け引きをしっかりやりましょうよという事が慣行の指導機関から言われています。ある意味､完全な管理をしっかりやりましょうという流れになってるんですよね。その中で生きものが増えるかというと、なかなか難しい。江の中での部分でも６月、７月になると全く水がない状態が続きます。ですから、生物多様性の米作りと慣行の米作りのギャップがすごい出てきて大変になってるんだと思ってます。

【関島】 非常に興味深いですね。簡易型江は連続し





ているので中干しの時には当然干上がりやすいし、今のお話だと乾田管理という事ですね。農業者の人たちの立場からすると、やっぱり生産というのが大事なのでそういった意味で品質を落とさないような形で営農していくことを一応しつつ、そういったことが環境保全型農業、生きものを育む農法としての効果が少しずつ薄れてきているということですね。

【齋藤】 ちょうど６月って生きものが一番にぎわう時期なんですよね。米作りの中で中干しの時期って早くなってるんですけど、６月の第一週からやりましょうという話になってくると、ちょうど生きものが増える時に水がない。米にとってはよいですが、生きものにとっては非常に最悪な状況になってくる。他の地域だと中干しの延期をしましょうっていう中で、生きものを増やす技術が出てきてますが、佐渡は、まだそこまでいっていないのでその辺の折り合いをどうつけるかっていうところが一番大きな課題だと思います。

【関島】 そういったことを含めて、２つ目の課題に対して、これからの歩みどう進めていくかというところで、簡潔にお話いただければと思います。本当に管理がすごく難しくなっているというお話だったんですけれども、GIAHS認定の中で環境保全型農業をどう取り組んでいくか、そういった中で課題も出てきている。こういった問題の中で、認証制度の良さの中でも色々課題がある中で、次の10年、その次の10年というのをどう歩んで行けば良いのかっていったところをなかなか難しい質問ではありますけども、皆さんにお答え頂きたいと思います。

【齋藤】 今まではトキだけを見ながらの認証米制度だったと思います。先ほどから地球環境には待ったなしだという話が言われてます。米ではありませんが、今年霜害で柿は特にうちの地域ではほぼ９割がた全滅しているという状況であります。トキだけじゃなくて地球環境をどう良くしていくかっていう視点で農業をやっていくことがおのずとトキにとっても良い環境作りになるんだろうなと思ってます。やはり脱炭素だとか、生物多様性をどう復元していくんだとか生きものをどうするべきなんだろうかという取組を進めることがトキにとってもいい環境、人にとってもいい環境になるんだろうなと思っています。その辺に力をいれていくべきだろうなと思っています。

【関島】 ありがとうございます。それでは黒江さんお願いします。

【黒江】 午前中のお話を聞いていて思ったのは、どういう風に佐渡を売り出していくかは、すごくはっきりしていたと思うんですよね。お米を穫る暮らし、それに基づく農村文化。そうしたものを維持しながら世界に佐渡を発信していくということではっきりしていていいなと思います。認証米自体は、最初そのお米を買うか買わないかの選択肢が大きく関わってくるんですけれども、リピーターを伸ばしていくって話だったんで、色んな生きもの認証米が乱立する中でリピーターが増えていくというのは、食味のところで優れているからこそ生き残れている一つの大きな点になります。そういう事をふまえていくと佐渡で水田を維持していくって言う事も、佐渡の中だけで解決しようとするのではなくて、そのグローバルに打って出るというか今、環境省さんのほうでOECM っていうような、保護地域と指定されないような所でも生物多様性に大きく寄与するような場所について、民間の方と一緒に候補としていこう。その地域で行っていく仕組み作りについて検討に入っていると思うんですよね。

【関島】 中井事務次官が紹介されていた海と陸地でそれぞれ30％。

【黒江】 そのところで、この佐渡については、それが良いんじゃないかと思います。佐渡のほうからアピールしていって、極端なことを言えば佐渡の水田を維持するのに、わかりやすく言えば、ふるさと納税のような仕組みを作って、農業生産だけではない別の支援の仕組みを入れるっていう事も一つの選択肢としては考えられるかなと思います。

【関島】 凄く難しい課題にどんどん直面してきて昔に回帰しているような流れが今、できつつあってというのは齋藤さんの話ですけど、そうではなくて、やはりビジョンがしっかりしている中で、それをやっぱり達成するために、またそれを支えるために違う枠組みを持ってきてそれを支えていくような形

の制度設計が必要なんじゃないか。

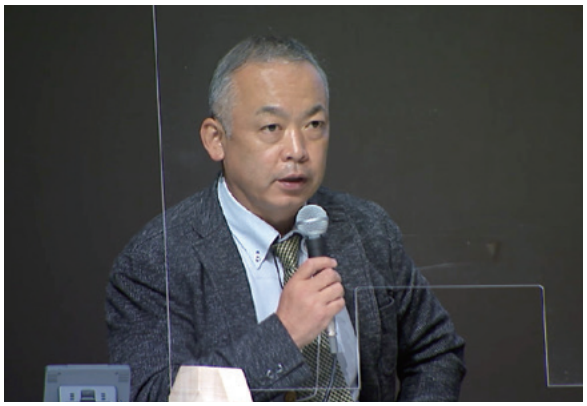
【黒江】 一つの選択肢としてですね、今色んな企業が資源を持続的に得ていくためにもオフセットという考え方で、生物多様性にどれだけ寄与できるか問われる時代になってきているので、そういうところで佐渡を企業に支援してもらうっていうのも一つ選択肢としてあるかなと思いつつ、大規模化については、なかなかちょっとうまく解決策がおもいつかないなと思います。

【関島】 分かりました。それでは最後に澤栗さん。お願いします。

【澤栗】 トキ野生復帰のデータを見ていく中で、かつては春、６月頃に放鳥する個体は生存率が高いという状況だったんですけれども、最近そうでもなくなってきたり、野生下で３羽、４羽の雛を育てることができる個体はかつてそれなりにいたのが、最近、４羽目は失敗したりとかそういった状況が少しあって、どうしてなのかなって思ってきているんです。先ほどの齋藤さんの話の中で乾田管理が進められて、６月頃の生物量が変わってきているというお話で、もしかしたら餌が少し足りない部分も出てきているのかなと。実際詳しく調べないと分からないと思うんですけれども、そういった気づきもあって私達だけでは分からない事も多いので、さまざまな方の知恵を借りながら一緒に考え続けていくことが大切なのかなと思いました。

【関島】 ありがとうございます。それでは次のポイントに移らせていただきます。最後のポイント、人口減少に伴う離農や耕作放棄地が生物多様性やトキに与える影響ということでいきたいと思います。私の資料の最後にご紹介したんですけど、佐渡を見て回ると中山間地を中心に放棄農地が少しずつ広がっていくのを凄く実感しています。

以前テレビ局がボランティアを集めて自然再生を支援していたビオトープその周辺がまさにセイタカアワダチソウの大群集になっていて、凄いショックです。場所によっては森林化が進行していたり、芦とか外来種のセイタカアワダチソウですとかそういった植物が相当繁茂している。それはトキの生息環境としても、生物多様性保全の視点からも、さらに景観、それから防災、そういったさまざまな視点から水田の本来持っている多面的機能を喪出してしまうということになります。黒江さんに質問をさせていただきたいんですけれども、これまで休耕と生物多様性の関係を調べてきたご経験があるんですけれども、佐渡を含めこれから耕作放棄地が全国的に広がって拡大していくと言われています。そういった状況に対して、どのようなお考えをお持ちでしょうか？



【黒江】 私自身もスライドの一番最後に一言補足を入れたんですけども、生物多様性を高めるような田んぼでの農法っていうのは凄く大変だと思うんですよね。手間だったり、やりにくい地形だったり、機械を入れられないような細かい形や急傾斜な所というのが多いので、手間がかかる所での農業生産は皆さん進んでやりたがるものではないと思います。その中で、食料生産の場としての農地と生きものを育んでいくための農業の継続っていうのを、ある程度分けて考えるっていうのも一つ有りかなと思います。

【関島】 そうですね、メリハリを付ける。これは農地だけじゃなくて、森林や他の環境もそうだと思うんですけれども、これから人口減少が進んでいく中で、今の国土管理ではできない。そういった中でメリハリということをしなきゃいけないんですけど、なかなか日本のリーダーがそういった所に踏み込めるかどうか。なかなか、選挙とかもあるので微妙なんですけれども、そういう風にしていかないと多分、立ちゆかなくなっていくんじゃないか。そういった懸念が私にもあります。農業者の立場として耕作放棄地が広がっていくのに対する考えを伝える事ができれば、齋藤さんよろしくお願いします。

【齋藤】 これはもう深刻な問題なんで、農家だけでは対応できないと思ってますし、守るべき農地と守らなくて良い農地を区分しましょうという話も出てきています。そうすると、どうしても平野部しか残っていかない。効率の悪い中山間地の田んぼなんかは耕作放棄地になってしまう。そうなってしまうと、景観が荒れてくるし、災害も多くなってくるといった問題が出てくるんだと思います。これはもう社会全体で考えていかなきゃいけないし、そこにお金の投資だけでも解決はできないんだろうなと思います。佐渡では棚田のオーナー制度なんかもやって

いるんで、そういう消費者側からの応援も頂きながら、経済的な応援、また労力的な応援なんかも頂きながら、何とか不便な農地があっても守っていこうと、あらがうような精神論になるかも分かりませんけど、そういう意識を持って農業をやっていくというところが農業者としての大事な所かなと思ってます。

【関島】 ありがとうございます。澤栗さんに質問させて頂きたいんですが、私の方の資料で紹介したんですが、乾性遷移、乾いた環境で遷移が進んでいくと丈の高い植物が多く繁茂していく。こういった点に関して生物多様性の観点からも含めてトキの生息環境が変化していくことが将来的には危惧される。そういった事についてはどのようにお考えですか？

【澤栗】 野生復帰したトキは人里を主な生息環境としていますので、耕作放棄が進んでいけば、直接的にトキが利用できる餌場が減っていってしまうということになると思います。特にトキの繁殖期には、雛にもたくさん餌を与えるので大量に餌が必要で、営巣木の近くで放棄された水田が増えると雛に十分な餌が与えられなくなるという事も懸念されると思っています。佐渡市のトキビオトープ事業ですとか、新潟県さんが取り組んでいるトキ保護募金の助成を活用するなどして、耕作を続けることができなくなったとしても、その跡地がせめてビオトープとして管理されたりということがなされれば、多少なりともトキへの影響という意味では緩和できるのではないかと思います。

【関島】 ありがとうございます。私が佐渡のあちこちを回っていくなかで耕作放棄地を目にする機会が増えています。そういった中でその問題はいずれ、より深刻になっていくだろうと感じられる事が多々あるんですけど、おそらく佐渡の方々、日本の農村地域に住んでおられる方は皆さん気づいているんですね。でも、将来10年、20年後、30年後、50年後どうなっていくかっていうことに対して、それをどうにもならないっていうことで、多分見て見ぬふりじゃないですけど先送りしちゃってるんだと思います。個人的には今進行している状況をまず見える化して、皆さんがこういうことが起きてるよねっていうことを私は共有することが大事かなという風に思うんです。それから次の対策を考えていく。それぞれの地域で事情が違いますけども齋藤さんが言われたように、それは景観とか生物多様性とかトキだけではなくて、景観、それから防災についての水田が持っている機能ですね。そういったものを消失させてしまっている。それは農業という視点だけではなくて恐らく国土管理の意味で非常に重要になって

くる。なので皆で考えていかなくてはならない。で、みんなで考えていくための情報をしっかりと見える化して次の手を打っていく必要性があるのではと感じております。耕作放棄地の問題が近々に見えてくる課題だと思うんです。それ以外の事も含めて、佐渡の農地がこれから直面する問題に対して、どう対処していくのかっていうことに対して皆さん、最後に一言ずつコメントを頂ければと思います。

耕作放棄地の問題で今、ディスカッションしてきましたけど、農家をやっている人はそれ以外の課題もあるんだと思うんですけれども、耕作物中心にお話していただいて結構なんですが、そういう問題に対してこれからどのように対処していくべきなのか。

【齋藤】 佐渡のブランド価値を上げていって、島外からの移住者を入れながら、農業の後継者になるような仕組み作りが大事だと思いますし、その中で不利益な農地管理をしていくかっていう所を、若い方々と一緒に考えていく、消費者の方々と考えていくっていう場の設置も必要になってくるんじゃないかなと思ってます。農家は消費者の方々からの応援があると、この土地で頑張っていこうというような意識が少なからず沸いてきますので、やっぱり普段から応援して頂ける方々とどう繋がっていくかというよう所が大事になるかなと思います。

【関島】 ありがとうございます。黒江さんいかがでしょうか？

【黒江】 先ほど齋藤さんがおっしゃっていたように、やり易い場所だけ残していくっていう事になれば平野の方しか田んぼが残らないということになり、場所の偏りが生まれてしまう。一方で生物多様性や防災の面では中山間農地というのはすごく大事な機能を持っていると思うんで、私達としては中山間農地がどれくらい生物の出現数を上げているかということや、防災、田んぼダムでの話でもあったようにどれぐらいの防災機能を持っているかというのを数値化していく、数値化して、それを多くの人に

発信していくっていうところに力を入れていきたいなと思います。

【関島】 私達研究者は、多分それを数字として見える形にするとかマップで示すとか色んなツールを使って色んな人と共有できる情報を整理していく。そこはまさにスタートさせなきゃいけないのかなと思います。

【黒江】 それらの機能があると言われながらも、果たしてどれくらいの効果なのかっていうのを実感してもらえるようなものをこちらが用意しなければいけないのかと思っています。

【関島】 それを共有した上で地域の人たちと、次どういう手を打っていくべきなのか具体的な方法を考えていくと言うことが大事なんだろうなと思います。澤栗さんいかがでしょうか？

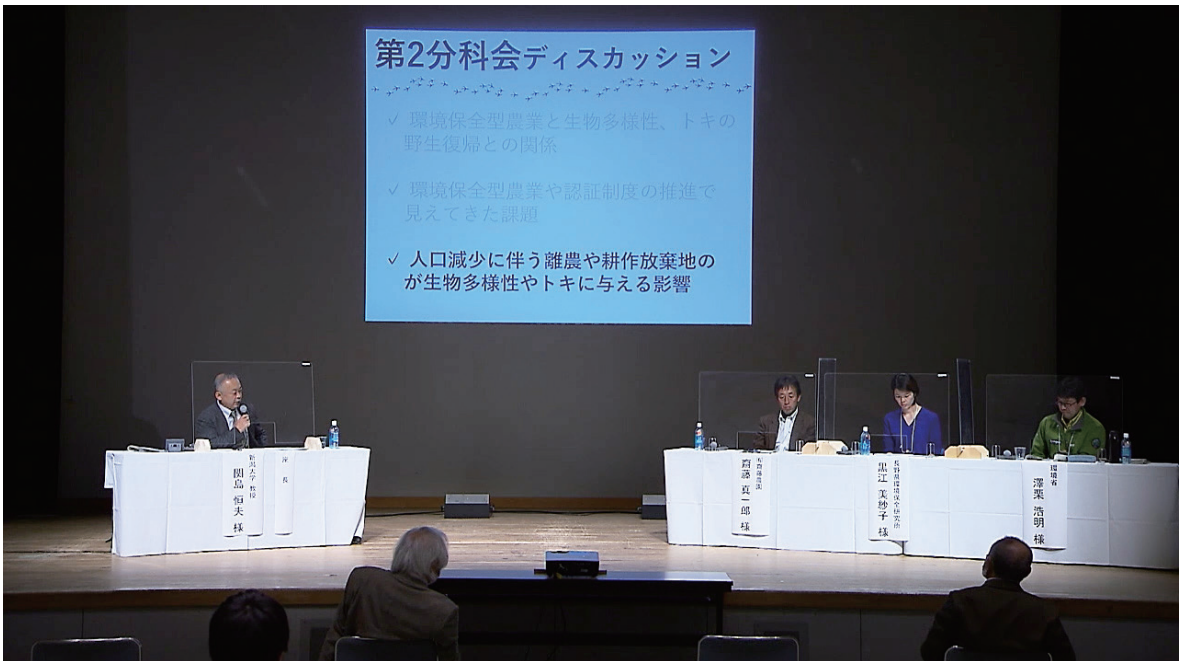
【澤栗】 佐渡でトキと共生するような里地が実現したのは本当に素晴らしい事だと思うんですけれども、その価値って言うのは、なかなか気づきにくかったりマンネリ化していったりということがあると思いますので、イベントですとか交流の機会を捉えて佐渡の取組の価値を認識いただきながら、誇りをもって取組を進めていって頂ける事が外から入ってくる方を呼ぶことにも繋がるかもしれませんし、続けていくためには大切なんじゃないかなと思います。

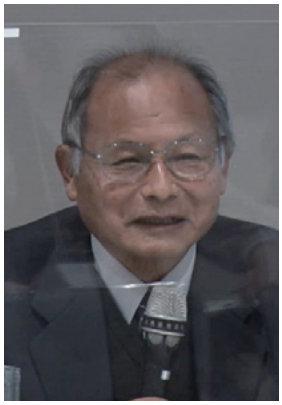
【関島】 残り少なくなってきました。最後に、このディスカッションを受けて私の方でポイントをまとめさせていただきます。

まず１つ目はですね、トキの生息に不可欠な餌場環境を保持するために朱鷺と暮らす郷づくり認証制度が非常に重要だということが分かりました。それを引き続き継続し、生きものを育む農法の普及拡大に努めていく事が重要であるということが理解できました。

２点目は生物多様性保全に有効な取組をこれからも実施していくために生きものを育む農法の継承を進めて、長期的な農地管理というのを推進していくことが重要だということ。それから、近い将来に人口減少に伴う耕作放棄地の急速な拡大が予測されるわけですけれども、耕作放棄地の拡大に伴う生物多様性及び地域社会の影響を予測していくこと。そしてそれを共有する。そして人口減少社会における地域作りのあり方を早急に検討していくことが必要だということをこのパネルディスカッションの中でまとめさせていただきました。

これで第二分科会を終了したいと思います。ありがとうございました。





テーマ

農業が育んだ地域社会の営みと文化・歴史

農業が育んできた地域固有の歴史や文化を継承していくために、何が必要なのかをディスカッションします。

座長

新潟大学 名誉教授

池田　哲夫 氏

佐渡出身。旧両津市郷土博物館学芸員を経て、新潟大学勤務。2016年定年退職。博士（文学）。学芸員当時から佐渡の生活文化に関する研究を続けている。

パネリスト

神奈川大学国際日本学部
歴史民俗学科

教授　安室　知 氏

専門は民俗学（環境論、生業論）。日本を中心に東アジアの水田文化についてフィールドワークを続けている。

パネリスト

（公財）鼓童文化財団

専務理事　菅野　敦司 氏

東京都出身。1982年より鼓童に参加。国際芸術祭「アース・セレブレーション」総合プロデューサー。

パネリスト

（一財）佐渡文化財団

理事　藪田　亨 氏

佐渡で唯一、村歌舞伎が残っている片野尾集落の出身。農業などに携わる。

【池田】　この第３分科会のテーマは、「農業が育んだ地域社会の営みと文化・歴史」という非常に大きいテーマです。パネリストの皆さんに助けていただきながら、進めて参りたいと思います。

佐渡と言うと、海があって山があって川があって平野があって湖まであると、まさに地形的あるいは地理的に見ても日本の縮図だと思います。そうした地形あるいは地理に合わせた生業や暮らしの仕組みあるいは仕方があったんだろうと思います。

特に江戸時代、幕府の財政を支えたとさえ言われる、金銀山隆盛は爆発的な人口の増加を招いて、そこに人々や物流の大きな移動がございました。人の移動は多様な文化をもたらしたり、当然、食料、生産、暮らしにも大きな影響を与えて、佐渡の文化と同化して、佐渡らしい独特な文化の様相を作り上げて現在に至っているのだと思います。その様相は今も暮らしや芸能に、あるいは生活のリズムの中に継承されてきております。

佐渡は島でありながら農業の島でもあります。そうした農業が育んできた営みの中で、生業の育みなどがありましたが、近年の少子高齢化、生業形態の変化など社会経済的な激変に伴って、それらの継承が非常に危機的な状態になっています。農業が育んできた文化あるいは歴史をどう捉え、どう考え今後の継承につなげていったらいいのかということを含めて、本テーマ設定の趣旨説明とさせていただきます。

パネリストの皆さんについては、お手元の資料にございますのでご覧ください。この後に自己紹介を含めて、ご意見をいただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは私の方から自己紹介を兼ねて、文化との関わりをどう考えてるのかというようなことを、ちょっとだけ前振りをさせていただきたいと思います。

私自身が５年前に定年退職をして佐渡へ戻ってまいりました。そして農業経営者になっています。まさに植え付けから、種を蒔いて植え付けまでの毎日というのは、どうかこう豊作をもたらしてほしいという祈るような気持ちで過ごしております。そして

限られた土地をどのように効率よく組み合わせて使うか、私自身の地域を見ますと地域には地域の暮らしの論理があったと考えています。地域の当たり前に思える景観も、合理的な暮らしの中の仕組みの上に成り立っているのではないかと思います。

佐渡空港近く、ここが私の住んでいるところです。航空写真の左側が戦後間もなく撮られた航空写真です。右が五年前に撮られた航空写真です。本線と書いてあるのが国道350号線になります。そこに長江川と言う川があって、それを源に田んぼが広がっている。右側になりますけども、台地と低地が入り乱れております。これが私の自宅のある方で高台になります。下は、田んぼが広がっている。右側が加茂湖という新潟県で一番大きい湖（汽水湖）であります。ここではカキの養殖が行われています。こんな風に入り組んでいるということをご認識いただきたいと思います。台地には畑だとか家が建ち並んでおります。

金北山という佐渡で一番高い山があるのですが、ここに春先の目印に雪形が残るんです。猿の格好をした雪形が出てくる。「種まき猿」という言い方してますが、これが出ると、そろそろ春の支度をしろということで、慌ただしく農作業が始まってまいります。

私の住んでるところは、400年前の（元禄）検地帳、今で言う土地台帳でしょうか。土地の税金を取る為のものですけれども、そういう書いたものがずっと残ってる地域です。

ここでは厳格な水の引き方などの水利慣行が、今でも守られているという地域です。

地域文書などを調べてみましたら、菅田の測量帳が見つかりました。菅田で菅を栽培してつい近年まで菅笠作っていました。

今から180年前、江戸時代に佐渡奉行所の役人がまとめたものの中に、「佐渡市民風俗」というものがあります。この中に私の住んでる所、釜屋、籠米というところですが、その辺りは稲を作る耕作の間に、菅笠をたくさん作って佐渡全島に売り出していたと記述があります。これでこの地域は古くから菅笠を作っていたことを確認いたしました。

これは明治のものですけれども、測量し直してるんです。菅田の価値、菅を作る場所の課税評価が、きちんとなされていた。それだけ生活を支えていたのかと思っています。

これは、菅が群生してるところを茶色で落としてありますけども、こういう沢地とかあるいは日陰の辺りで、菅の群落というか菅田の跡が見ることができます。

スライドにあるように菅田は、稲作に向かないところ、水利が不便であったり日陰だったり沢地など、稲作に不向きなところで菅の栽培をしてると言うことです。

夏は米を作りながら、そして菅も育てながら、冬の副業として菅笠を作ったということです。記録はほとんどありませんが、唯一当時の税務署へ出した記録に、明治27年の記録ですが菅笠を17,000個作って470円だったと書いてあります。当時の小学校の校長の年俸が149円だったといいますから、いかに高額な副収入だったかということが分かります。こんな風に菅を刈り取って、冬の副業に備えていたと言うことです。夏になると、こんな菅干しの風景がありました。ほんの30年前の話です。その菅を作る為に、笠の骨になる竹とかあるいは竹の皮などが必要になってきます。そういう竹林や菅田がこの地域の景観を作っていると言うことです。

数年前から退職老人４人が集まりまして、そういうことを見直そうということで、報告書を作りました。地域の見直すことで、当たり前が実は当たり前じゃなかった、いかに生活を助けてきたのかということを見直したりする試みをしております。まあこんなことで菅田の復元などをやりながら、地域の見直しをしています。

実はなぜこういうことを申し上げたかと言うと、皆さんご自身の農業とかあるいはそれに関わる文化との関わりについて、色々お話やお考えを伺えればということで、まず私が冒頭つまらないお話をさせていただきました。

それではまず安室先生からご自身のお考え等をお聞かせいただければありがたいと思います。

【安室】 ありがとうございます。私、安室と申します。

出身は東京の下町で町工場を父親が経営しておりましたので、農業とは全く関わりのない暮らしをしてまいりました。

ただ大学で民俗学という学問に出会いまして、そこで当時大学の先生ってのは気軽なもので、調査

に行くって言ったら何を聞いたらいいでしょうって言ったらお百姓さんにお米の作り方を教えてもらってこいってって言われて、それが私の大学２年生の頃ですから二十歳前後の初めての農業体験、農業体験と言えるほどではない昔の米作りというものを聞いてきたんですね。

それ以来ずっと米作りを聞いてるんですけれども、ただ米作りの話って言うのは非常に日本の場合には精致で非常に細かな苗代作りから田植え、田の草取り、ヒエ抜き、稲刈り、取った米の調整、さまざまなところで非常に詳細な作業がありまして、それを１つ１つ聞いていくっていうのは、とても時間のかかることですし、また地域性もあって面白いことではあるんですけれども、欠点は単純になって面白くなくなってくるって言う欠点があります。

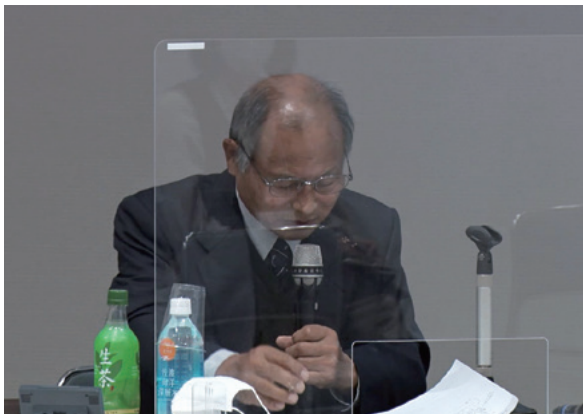
米作りの色んな話を聞いてくる中で私も退屈してきますし、話を聞いてるおじいさんおばあさんもやっぱりそういう当たり前すぎてちょっと退屈されているなっていうのが気が付くときがあるんですけども、そんな時にふと田んぼでの遊びと言いますか、田んぼでどんなことをやってましたかっていうような話になったと思うんですけども、魚捕りの話になったんですね。魚を田んぼでどうやって取っているかという話になったら、それまですごく眠そうにしていたおじいさんが、実はこうやって水の入れる時期にはのぼりに受けをし、受けという魚通りの道具があるんですけれども、それを水の入る方向とは逆方向に向けて仕掛けるんだとか、今度は水を抜く時になると水の方向と合わせて受けを仕掛けるんだとか、登り受け、下り受けとか他にもさまざまなやり方で魚を取ったりどじょうを取ったり、タニシを拾ったり、そんな田んぼが魚捕りにも多様に利用されているっていうことを知って、それが実は非常に面白い話として私も印象に残りますし、話していただいてるおじいさんおばあさんも非常に楽しい話として語ってくれる。実はそれ以来私はそういったことを話として聞いておりまして、特に田んぼでの魚取りっていうのを卒業論文の時にテーマにしました。

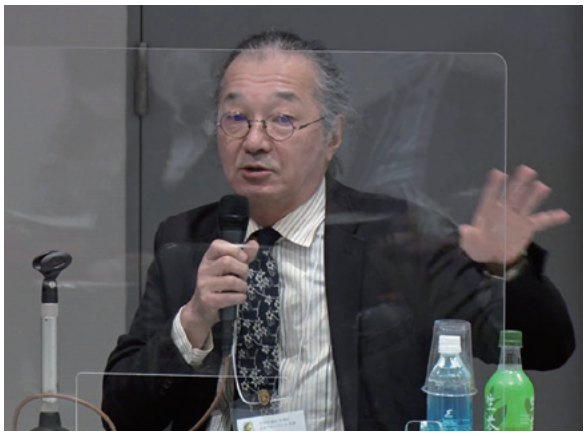
当時の私の先生は、田んぼの魚取りを研究したいと言ったら、それは子どもの遊びを研究するんだなという風にして早合点されて、実際は田んぼでどういう稲以外のものがこんなに豊富に取れてるし、実はそれが毎日のように食卓に上るその農家の人にとっては栄養源であったって言う話をして、実はそういうことかきっかけで、土地改良以前の狭いし不定形だし四角かったり丸かったり色んな形をしている田んぼならではの、だからこそこういうどじょうやタニシが多くいて、それを取ることができてそれをまた我々が利用する。そういう知恵といいますか、私民俗学やってますので、民俗の知恵と呼んでおりますけども、民俗の知恵が実はいっぱい詰まった空間が水田だったっていうことに気が付かされました。

それから田んぼの魚取りだけではなくて実は田んぼは鴨、この佐渡で言えばトキですよね。トキが非常に重要なものになるとともに、水田ってのは実は雁や鴨というのがいっぱいやってくる。特に冬になりますと渡り鳥としてやってくる。実はそういったものを取る知恵というのもさまざまなものがあります。

後でまた写真を見ていただく機会を作りたいと思いますけれども、ごく簡単な今のように猟銃を使ったりはしない。もう簡単なものでこうした道具で鴨を捕まえる知恵というのもやはり普通の農家の人達は持っていたわけで、そうそう聞いておくと実は田んぼではまた畦を利用して大豆を作ったり、冬になると乾燥する田んぼであれば麦を撒いたり菜種を作ったり、そんなようなこともできる水田とは実は色んなものを生み出す、特に土地改良以前の水田というのは機械化が難しいような湿田であったり、また不定形の機械を入れづらい田んぼであったりするんですけども、かえってそういう点がいろんな生物を引き付けて、しかもそれを人間が利用できる空間だったんだっていうことに気づかされて、それ以来もう20年30年近く、30年以上ですね。そんなことばかりを聞いて回っております。

実はそういうことを念頭に置くと、この佐渡と言う島がGIAHS登録しているその意味と言いますか、そういったものがまた見えてくるのかなということで、今日はもう少し具体的な話を後々させていただきたいと思っております。そんなことで自己紹介を兼ねて自分の農業体験ということでお話しさせていただきました。





【池田】 ありがとうございました。

田んぼは、米作りだけではなくてその田んぼの持つ豊かさ、あるいはご専門の立場から民俗の知恵のつまった空間としての水田、そういうもののご研究をされている。水田はいろんなものを生み出すというお話でした。

続きましてご自身のお仕事あるいは文化との関わりについて、菅野さんよろしくお願いいたします。

【菅野】 皆さんこんにちは。鼓童文化財団の菅野敦司と申します。

自己紹介ですけれども、私も東京生まれの東京育ちで、私の場合は親が勤め人だったもので団地暮らしで、祖父の代にもう田舎から縁を切ってというか東京の方に出てきたっていうことで、子ども時代は自分には故郷がないなというような印象を持っていて、夏休みになるとみんな友達は故郷に帰って夏休みが終わると豊かな絵日記を持って帰ってくるんですけど、私はずっと東京にいたんですね。

そんな中で育ちまして学生時代に登壇者コメントのところにも書かせていただいたんですけれども、開発経済学という学問を勉強しておりまして、そこの中で、インドネシアの人口問題というものを扱った論文に出会ってインドネシアというのは大きな国土なんですけど、ジャカルタという首都にですね、ほとんど人口が1/10以上の人口が集中しているっていう形で、当時1970年代80年代を通して、強制的に移住させて、また地方に移住させるんですけども、また戻ってきちゃうっていうことがあって、その中で地域に人がとどまる地域というのがあって、それはどういうことなんだろうというのを調べた論文だったんですけれども、中央から発せられるメディアによって伝わる文化情報ではないその土地だけにある固有の文化っていうものが非常に強いもの、そういう地域と言うのは、やっぱりそういうところで育った方というのはそこにとどまったり、１回都会に出ていってもまた戻ってくるという論文に出会いました。

その時に人間の行動と言うのは必ずしもその金銭だけではなくて、そういう文化というものがかなり大きい影響を与えるんだなという風に思って、海外で留学して勉強していたもので、日本に帰ってきた時に逆に今度日本に帰ってきてみると、高度経済成長っていう形で日本が近代化していく中で、太平洋側に人口はどんどんどんどん増えていっているんですけど、日本海側から、そこは豊かな穀倉地帯な訳ですよね、そこのお米を作ったりする人手と言うのが労働人口がどんどんどんどん都会の方に来てしまっていると言う状況も、ある分国策でもそういうことがあったと思うんですけど、それは非常に開発経済学っていうのを勉強していた者の目から見ると、非常にいびつな発展の仕方をしているなっていう風に思いました。

そんな中で鼓童に出会って今に至る訳なんですけども、少し鼓童の話をさせていただきますが、これは佐渡島の風景です。佐渡は本当に近海に寒流と暖流、対馬海流と千島海流がぶつかっているということで、非常に魚の種類も豊富ですし、そういう土地柄なので、植生も凄く豊かな島です。

そういう豊かな自然の中で育まれた、育った人達と言うか生きている人達は鬼太鼓に代表されるような多様な文化を伝えています。それは自然背景だけではないと思います。当然先程池田先生もお話しされたように、歴史的な背景もあるかと思います。

そんな中で、佐渡には島の中に点で示されているのが鬼太鼓が継承されてる集落で、今でも270ぐらいの集落で鬼太鼓が受け継がれていると言われております。

その中で鼓童の歴史、宮本常一さんという『忘れられた日本人』という書籍を出されてる民俗学者の方が関わられています。

これは宮本常一さんの写真です。

その方に影響を受けた田耕という鬼太鼓座、私達、鼓童の前身のグループを作った方も宮本先生に影響されて日本全国の祭りを見に回っていたんですね。その先生が、佐渡には本間雅彦先生と言う佐渡農業高校の先生をされていた先生がいらっしゃって、この２人が1955年に出会ったっていうことです。

それを引き合わせたのが宮本先生ということになります。本間先生は、佐渡農業高校って言うのはある分農業の跡取りを養成する学校ですよね。そこの学校ってのは要するに農業の跡取りで佐渡に残る方って言うのは先程言った鬼太鼓であったりそういう芸能を継承する方々になる訳ですけれども、1950年代高度経済成長の真っただ中は佐渡農業高校ですら９割以上の卒業生が都会に出ていってしま

うという時代だと思います。

その中で本間先生はこのままだと佐渡のそういう文化の継承も途絶えてしまうということで、佐渡の農業高校の中に、郷土部っていう地域のことを学ぶサークルを作っていて、そこに田さんという方が突然飛び込んできて、実は佐渡の鬼太鼓っていうものもこの後今のままだと衰退していくかもしれないので、何か佐渡の芸能が継承できるような場が作れないだろうか、動きが作れないだろうかっていう話が1955年に盛り上がったという風に聞いております。

それが具体化するのが、1970年鬼太鼓座夏期学校という、これは宮本先生が校長先生になって当時学生運動で学生も大学に行っても自分達の学びたいことが学べない、もう１回自分達で価値観を作り直そうという政治運動だけではなく、自分達の足元を見てというところで学生が集まりまして、鬼太鼓座というものを立ち上げようという話になりました。

そこから鬼太鼓座として活動していた時期があるんですけれども、1981年に鼓童という名前に名称を変えまして、ベルリンでデビューしました。

そのあとはワンアースツアーという１つの地球というテーマで、今では52か国6,000回以上の公演を行なっております。

鼓童は、今は佐渡の南端にある小木半島に拠点を構えております。

約36,000坪程の土地がありまして、こちらの方に自分達の稽古のスペースや、事務所、ゲストハウスが点在しております。

鼓童のメンバーって言うのは全国から集まっているので、必ずしも佐渡出身者というのは本当に少ないですね。その中で地域の方々から色々どんど焼きなどの風習を習ったりとか、お正月には餅つきをしたりとか、自分達の周りにある里山、森の手入れをして、薪を作って薪ストーブで暖をとったり、そういう生活の中に地域の風習とか自然と共に暮らす知恵みたいなのを、できるだけ吸収するようにしております。

またですね、柿野浦という佐渡の前浜地区にある旧岩首中学校という廃校になった中学校を鼓童文化財団の研修所として20年ほど使わせていただいております。

研修生は今２年間のプログラムになっているんですけれども、基本的にはやはり鼓童の舞台を目指す人達を養成するところなので、ここの写真にもあるように太鼓であったり踊りとかそういうものの芸能ごとの稽古はもちろんなんですけれども、基本的に日本の芸能っていうのは、やはり農業の神様に対しての奉納の芸能ですよね。そこの原点になってるのはお米を作るということで、今の若い子、子ども達って言うのはそういう生活の中で育っていませんので研修所に来て、とにかくお米を作ったり農業をするということをまず土台にしてですね、そういうところの中から色々こう芸能を習う、佐渡の鬼太鼓を習うにしても、地方の芸能を習うにしても、やはり芸能やられている方は農業をやられている方が多いので、そういう方とも、お話がちゃんとできると言う意味でも、こういうお米作りと言うのは非常に大事だし、自分達のやってる芸能の本来の意味っていうことを学ぶというようなことを研修所では大切にしております。

そんな形で鼓童の活動を通して、私も直接的に農業っていうことに携わってるんではないですけれども、農業と文化みたいな関わりの観点の部分について、今日お話しさせていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

【池田】 ありがとうございました。

人間の行動というのは文化に影響されているんだということで、鼓童の事例などをお話しいただきました。

ありがとうございました。

続きましてご自身が農業をやられて、それから地歌舞伎の伝承者でもあるという藪田さんよろしくお願いします。

【藪田】 皆さんこんにちは。佐渡文化財団理事の藪田と申します。よろしくお願いいたします。

私、今ほど紹介いただきました、歌舞伎に関係しておりまして、生まれは片野尾集落というところで生まれまして、実はこの場所が野生トキの最後の生息地になるところでございまして、私の家の裏山でトキが捕獲されたと言う土地が出身でございます。

私、30年余り行政の方に関わりまして、その傍ら地元の文化であります、歌舞伎を楽しむという文化に関係してまいりました。

今日は、佐渡の自然と共に、今現在は半農半漁で

自然と共に暮らしているわけなんですけれども、その業を営む中で、これまで文化活動にかかわってきた体験を元にこの分科会で関わっていきたいなという風に思っております。

今ほど言いましたように片野尾地区には歌舞伎を親しむ、楽しむ文化が残っておりまして、私の物心がつくかつかないかという頃から、こう目を閉じると家の中にも髪の毛がいっぱい散乱してるんですね。それは何かって言うと実はかつらだったんですね。それから段ボールとかそういうものにピカピカ光るものがありまして、それは何でかと言うと鎧作りをしていたと言う輝きだったんですね。

それを扱っていたのは私の祖父がかつら関係、それから衣装の鎧小道具とかそういうものを作っていたり、それを小さい時から肌で感じておりましたし、それから小学校に入るか入らないかの頃ですね。神社で芝居を上演することがありまして、自分の父が演じていると、それを舞台袖で見ていると言う映像が頭の中にありました。

その記録は大体春先それから冬の終わり頃って言うイメージがありまして、冬の終わりに衣装とかかつらの準備をして、ぽかぽかしだして田んぼが始まる前に上演されたということだったんだと思っております。

私も青年期に歌舞伎の役者にさせてもらってこれはいいもんだなという風に楽しんできた訳なんですけれども、これを自分の世代以降にも伝えたいなという考えでですね、日本にも他にも色々ある地芝居というものがございましたので、交流したいということもありましたし、それから柱になる義太夫節が大事だということで、演奏家のところに師事したり、それから地芝居の家元さんの方に師事して、裏方の化粧とかそれから衣装付け、この辺を裏方の方でも参加して伝承に備えたいという気持ちで関わってきた経験がございます。

それも楽しさを次の世代の子ども達に繋げていきたいなということからなんですけれども、なぜか少子化になりまして、その子ども達も集まれないような時代が来ております。そこで地域の枠を超えて伝承したいなということで、佐渡子ども歌舞伎クラブというものを立ち上げて、地域の枠を超えて募集して活動してきたというような経歴がございます。

地芝居と農業の関わりなんですけれども、佐渡でも以前は色んなところで芝居がなされていまして、能舞台が点在してるというところにあったという風に聞いておりますし、片野尾に残る以前は、まず小木から来たというと、やっぱり金山関係で北前船に乗りまして日本全国の文化が入ってきたという流れの中にいたのではないかと。

そしてお師匠さんは赤泊の徳和というところとか真野町の竹田の方、遠藤さんというようなそういう方が関わりがあると言うことです。

それから近年では新穂の田野沢ですね。そちらに市川絞三郎さんという方がおられまして、紋四郎と言う屋号だそうなんですが、そちらの方に直接指導をいただいて、今があるというような状況で、昔の方がそこへ山越えして教わりに行ったという風なことを聞いております。

そんな中で農繁期前の４月に上演するというサイクルで農業等関わってきたんじゃないかなという風に思います。

それから芝居に関わるということが何て言うんですかね、活力って言うんですかね、さあ仕事をしようと、さあ収穫ができた、よかった。そういうサイクルの中に地元の文化として芝居が残ってきたのではないかなという風に感じておりまして、これも文化活動をすることで地域を愛する心を育んでこられたのかなという風に感じております。

地元の小学校で取り組まれた歌舞伎もございますが、今はもう成人されておりますけども、その方々が中心になって活動を続けています。

そういうことでやはり郷土を愛する心を育んでこられたのかなという風に感じておりますので、これからも応援していきたいなという風に思っております。

以上自己紹介を含めまして、ちょっと過ぎましたが終わりたいと思います。ありがとうございます。

【池田】 ありがとうございました。

家業の農業を継ぎながら、昔から残っている地芝居の伝承に尽力されておられるというお話でございました。

かつて、藪田さんのお話にもございましたように、家業を継ぐ親の仕事を受け継ぐっていうのは当たり前でした。

しかしそういうものが大きく変化して、生業の変

化というのは生活様式あるいは慣習なども大きく変えました。

そういう地域社会というのは、生業の変化とともに大きく変わりましたが、地域の根っこの部分、基層の部分まで変わったのかどうか、そういうことも大きな問題だと思います。

そういうことで、国内におけるそういう生業、文化などの継承などについて、安室先生、お考えをお教えください。

【安室】 私、先程ちょっと述べましたけれども、農村をずっと回って歩いています。日本だけではなく東アジアや南アジアも含めて水田稲作地帯をずっと回ってきている。

そして日本に戻ってきて高度経済成長以前の水田の様子などを写真などで見てみて、何が一番違うかというと日本の水田はやっぱり美しいですね。何が違うかとよくよく考えてみると、畦をきれいに塗る畦塗りをする。それで畦を塗る前に棚田地帯であれば水が漏れないようにきれいに足で踏み込んでとこゆかを作る。とこゆかっていうのは水が漏れないように下の部分に不透水層を作ることなんですが、そういうことをする。

極めつけは田植えですね。年寄りはしつけって言いますけれども、佐渡でもそう言う方もいるかと思うんですけども、しつけをする時に必ずきれいに植えていく、30センチ間隔で正条植えをする。または佐渡には車田植えのように円形にきれいに植えていくというように、非常に美しい田んぼが日本の田んぼの大きな特徴じゃないかと。生産性で言うとそんなに美しくする必要はないはずなんですね。特に機械加工はそういうことを手間をかける必要はない。畦塗りなんて非常に大変な仕事なんですけれども、そういうことをやっていくのはなぜなのかなと。

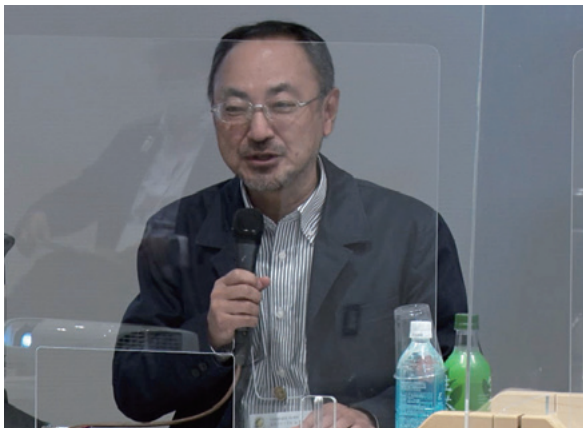
日本の稲作というのは世界で最も北にあります。今北海道の天塩平野まで水田は伸びておりますけれども、元々南の熱帯の植物であった稲をこの北にまで持ってくるにはそうせざるを得なかった。日本のように山がちな棚田も多く分布するような水田を維持するには、そういった畦をきれいに作り、とこゆかを作らざるを得なかったという、もうどうしようもない部分があったんですね。

しかし、そういう部分が実は、例えばきれいに畦を塗った後にそこへ豆を植えるという知恵を発達させてくる。あぜ豆ですね。私が調査した長野県の飯山というところの畦では、畦の面積と水田の面積だと畦の面積の方が広い。街道が川沿いに通っていて、見上げるような形、富倉という地域になりますけど、富倉の水田を見るとまるであぜ豆がずっと植わっているもんですから、豆畑しかない貧しい村だとそういう風に道行く人は言う。しかしそこの村に暮らす人達は自分達の田んぼでは米が作れる、畦では豆が作れる、畦の豆も土を塗ったところには大豆、土を塗らない草土手のところには小豆を付ける、実は非常に多くの豆が取れる、それで米も取れる。それで豊かな村だということで、富倉と蔵が建つ、みんなが蔵を持てるような家があるということで富倉という点。必ずその地域に行くと、私何度か行ってますけども、おじいさんおばあさんは必ずその話から始めるんですね。みんなから貧しい村だと言われてるのは違うんだと、富倉なんだと言う話をしてくれます。

実はこれは富倉だけの話ではないですね。日本国中、ちょっと大袈裟ですけど私は30年間、日本の農村も歩いてますけれども、全てのところで畦に豆を作るという習慣はありました。高度経済成長以前の水田畦には必ず豆が作られていたと言っていいぐらいです。この佐渡にもあったはずです。

これは中国浙江省の写真なんですけれども、左側見ていただくと稲が植わっていて、モールのように縁取りをするように畦豆が綺麗に植えられている。こんな風景が実は日本にもかつてはあったはずなんですね。残念ながら今はもう日本ではこういう風景は見られない。たまに見られると、おじいちゃんが昔のお畦の豆の味を忘れられなくて、おいしかったから作ってると言う話は私も何度か聞いたことありますけれども、その程度でほとんどこう言う風景はもうない。かえって中国なんか行くとこういう風にきれいな畦豆の風景が見ることができる。

これはほんの数年前、中国の浙江省衢州というところに行った時の写真なんです。ちょうど右側の下の写真などのように、下から見ると豆がもっと育ってくると、豆畑に確かに見えるんですね。田んぼが見えなくなってしまい、稲が見えなくなってしまうような状況。こんなのが先程富倉というところの故事で言われるようなところであります。



棚田を維持していくのは非常に大変ですけれども、棚田になると必ず畦がたくさん作らなければならないんですね。その分豆ができるということで、大変な労力はかかるけれども余得も多かったのが棚田であったということになると思います。

それからこれが田んぼでの魚捕り。先程ちょっとお話ししましたけれども。これは最もそれが発達した長野県の佐久地方というところでは、田んぼで単に魚を取るだけではなくて、田んぼの中にやってきた魚で卵を生ませて、その卵を田んぼに入れて育てる。

ここは標高が600メートルから700メートルありますので大体手に持っている大きさの鯉を育てるのに、３年掛かります。霞ヶ浦や琵琶湖のように標高の低いところで網いけすで作ると２年で同じサイズに育ちます。しかし、この佐久地方の鯉は、３年かけて作らなければならなかったので、どうしても高くなってしまうんですね。値段が高い。1.5倍の値段です。しかし、一時期ブランド化します。昭和の初めの頃なんですけれども、明治から昭和の初めにかけてこの佐久鯉というのが、日本国中に知れ渡る。それは２年で育った鯉よりも３年で育てた鯉の方が身がしまっていておいしいと。そういう言説を作って、それを売り文句に売っていくんですね。そういうような状況があった。

佐渡でこういう養魚までやったかどうか分かりませんが新潟の山古志だとかそういうところへ行くと、こういうことはやっていたんですね。

今度は溜池を利用して、田んぼというのは魚が寄ってくる。しかもその寄ってきただけじゃなくて、それを逃さないようにすることで、そこで稚魚を育てる。実は３年かけて育てるにはそれなりに大変で、夏の間は田んぼの中に入れてエサをたくさん食べさせて、大きくするんですけども、冬の間は佐久などは特に寒いですから、一旦また池に戻すんですね。池に入れて越冬をさせて、その間エサを食べませんので大きくならない。また春になると水田に戻して育てて と言うのを３回転やる訳ですね。それでやっと200匁、700グラムですね、今の単位で言うと。700グラム、今１キロないとちょっと商品としてはあれですけども、そのサイズにまで育てていくということをやっていました。

この水田養魚というのも技術としては実は日本国中にあります。佐渡の田んぼでもこういうことを覚えている方はいないかもしれないですけど、もうちょっと素朴な段階までの養魚はやってたんじゃないかと予想しています。なぜなら田んぼでの魚捕りというのはどこでもやっていたんで、そこからの展開っていうのはあったと思います。こんなような魚捕り、またはそれを育てるというようなことをやって、実はこれが冬場の秋から冬にかけてお祭りをやる時の儀礼食に用いられますし、もちろん売り物になります。そのようにして村祭りに使われる、結婚式などのような人生儀礼にも使われるごちそうになる訳ですね。佐渡の場合には海の幸もありますけども、こうした里での淡水魚というものも、日本の場合でいえば、おそらく組み合わさってあったはずなんですね。

もう一つの特徴は、日本は近代化する時に養蚕が非常に重要視されますよね。養蚕で繭を育てて、その繭を輸出する。または絹糸にして衣の織物にしてそれを輸出して日本は近代化してきた訳で、軽工業とそれを発達させる時に、実は農村が無関係ではなくて、養蚕を日本国中でやっていました。その養蚕で出てくるサナギが、餌として使われて鯉を大きく育てる餌になってくる訳です。ちなみに佐久では人間もサナギは食べてましたけれども、こうやって鯉を育てるのに使われる。これは自然にやってくるものを捕るだけではなくて、それを育てるという養殖ですよね。人間の技術の中で、捕ってきて食べるっていうのは、素朴な段階としても、卵を孵化させて育てるというのは、これはドメスティケイションという養殖・栽培というのは、人類史の中でも一つ大きな技術のステップがあるわけで、それをいとも簡単に水田地帯ではかつて普通に行っていた訳で、何もすごく優れた誰かが開発した技術ではなくて、どこの誰もが持っていた技術として、田んぼでの魚捕りのようなことから発達して、こうしたことができてきたと言っていいと思います。

じゃもう１つ、次の写真になりますかね。これは石川県の加賀市の例なんですけれど、先程田んぼというのは水鳥を呼び寄せるというお話をしました。特に雁や鴨、雁鴨科の鳥類と言うのはシベリアで繁殖します。シベリアで卵を生んで、子どもを育てて、そしてシベリアは冬になると寒いですので、秋になるといっせいに渡り鳥として日本列島にやってきま

す。佐渡島にも多くやってきます。東北地方にも多くやってきて、種子島でもこういう漁があるんですけど、種子島にまでやってきますね。ですから日本列島中、実はこういう雁や鴨がなぜやってくるかというと、一つは偏西風の影響で南の方に行こうと思うと、自然とシベリアからですと日本列島の方にやってくるっていうのが１つあります。

それから最も大きいのは、これは私が野鳥の会の人に言うと、半分首をかしげられますけども、１つはやはり日本は世界で最も北にある水田地帯・稲作地帯なんですね。雁鴨の鳥類っていうのは、落ち穂を拾ったり水田地帯で餌を採って冬を越します。それから中継地にして、もっと南に移っていきます。そういう時にシベリアからまっすぐに南に行けばいいじゃないかというと、そうはいかないですね。

中国大陸っていうのはちょうど山東半島と言って日本で言うと九州ぐらいなんですね。九州ぐらいのところに淮河という川が流れていて、ちょうどそこが降水量が1,000ミリあるかないかの境目になっていて、それより北というのは基本的に畑作地帯です。

雁鴨科の鳥類っていうのはくちばしが平たいですよね。それで乾燥した地面に籾殻が落ちていても食べられないです。スズメだとかカラスはくちばしがとんがってますから、土の上のエサをついばむことができるんですけど、雁鴨科の鳥類は、水の上に浮いているものを水と一緒に口の中に入れて口の脇から水を出して餌を採るんですね。白鳥もそうです。そのようにして採ることをします。ということは水がないと餌を食べられないことなんです。だから淮河よりも南に行くまでは、畑作地帯を餌なしでこれるかと言うとそうではないわけで、やはり日本列島に来るには天塩平野まで水田化されてるような、日本列島を経由してくるっていうことは、そういう意味では餌を食べるということは必要不可欠だったわけですね。午前中のお話の中にふゆみずたんぼというのがありましたけれども、ふゆみずたんぼというのがなぜ日本でまたこうやって復活してきてるかというと、佐渡ではトキの繁殖に必要だということで言われてますけれど、こういう水田湿地を人工的に

冬に作ってあげる。特に土地改良以降の水田というのは、きれいに水がはけてしまうので、冬場は乾燥しちゃいます。そんな所に渡り鳥がやってきても生き残れません。そうなった時に人工的に湿地を作ってあげて、そこに籾も撒いてあげれば餌場になることができるということで、ふゆみずたんぼが盛んになる。

午前中、大崎市の課長さんがいらっしゃってましたけど、あそこにはラムサール条約という条約を結んだ指定地になっている池、蕪栗沼があります。そうしたところは、冬に水を張ってあげることで、雁鴨科の鳥類が中継地として、越冬地としてやってくる、そういう土地になっているわけです。佐渡島の場合には、トキにふゆみずたんぼを餌場として確保してあげる為に必要だということですけれども、トキと共にやはり雁鴨科の鳥類、これも豊富に佐渡島にいるのはその為で、こういう自然を守り、そしてGIAHS世界農業遺産をする時には、１つの起爆剤としてトキは必要なんですけれども、トキだけではない、雁や鴨も生き残れる、または多くの渡り鳥としてやってくるような環境を作ってあげることが、トータルに見るとやはり我々の暮らしと関わる部分、また地域の生活文化を守る部分で非常に重要ではないのか、という風に思っています。石川県加賀市大聖寺の片野鴨池という、これもラムサール条約の指定地になってるところで、鴨を捕るんですね。

ここは余談ですけれども、ラムサール条約の指定地になる時には、自然保護側の人達と、それから鴨猟師が、大変にもめました。私はその渦中に１回いたことがあって、両方の方々から責められたといいますか、調査をできない状況になってたことがあるんですけれども、実はその後、これが改善していきます。何かって言うとワイズユースという考え方なんですね。賢い利用という。当初はそういう訳をしてましたけども、ワイズユースというのは何かというと、こういう水鳥を守る為の条約、ラムサール条約であるんだけども、水鳥を守る為には必要な湿地を守る条約というんですけれども、その条約に従った時に、水鳥を捕る伝統的な行事というのは、たとえ水鳥の雁や鴨を捕っても持続している、そういうことが何百年も続いてるってことは、実はその地域の自然を守っていることと同じなんだと。守っているからこそこういう素朴な猟ができるんだということです。素朴と言いますかね、結構鉄砲よりも生産性は高いんですけども、実はそういう猟ができるんだっていうことが分かってきた。ですから今自然保護派の人達と、鴨猟をやる人達は非常に仲の良い状況になってます。

私は渦中でずっと見ていきてましたので、そう

いうものがよく分かる訳で、こういう技術というのは三角形の網で飛んでくる鴨を捕る。これは非常に大きな技能なんですね。こういうものが文化としてここには伝えられている。恐らく佐渡島にもあるんじゃないかと思って先程池田先生に昼食を取りながら聞きましたら、三角形の網ではないけれども水田に面した加茂湖の周辺などでは、鳥もちを使った鴨猟が行われていたといいます。恐らくそれも、鳥もちを使う猟自体はもう禁止猟法になってしまって、駄目なんですけれども、伝統文化としてこういうことも見てとれるんではないか。

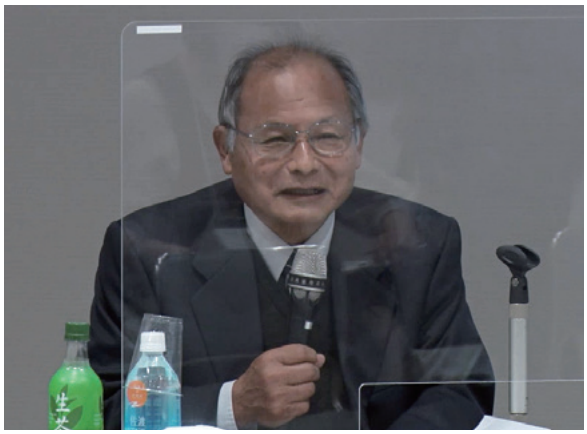
極論を言いますと、トキだって普通の鳥になれば捕まえることだって可能じゃないのか。そんなこと言うと本当にGIAHSの精神に反してしまうのかどうか分かりませんが、そういうのが当たり前になるぐらいになるのが、本来のGIAHSの精神ではないかという風に思ってます。

この三角形の網で捕る最大の利点は何かと言いますと、生け捕りにすることができるんですね。もちろん捕ったのは食べてしまいますけれども、もしこういうことをやるんであれば取ったものをまた逃がしてあげるというような仕掛けを作ればいい。

皇室宮内庁がやっています、新浜鴨場というのが千葉県の市川市にあります。そこにも取材に行ったことありますけれども、似たような三角形の網でちょっと仕掛けは違うんですけれども、鴨を捕って、実はそこで捕った鴨は食べないんですね。ちゃんと逃がしてあげる。皇室の方と外国から来た賓客の方が猟を見学したり、自分でやってみたりして、捕ったやつを、山科鳥類研究が近くにありますので、そこの研究員が来て足羽をはめて、それを飛び立たせてまた放すという。よく皇室のアルバムなどでその写真が出たりしますけれども、そうする。そういうことをすれば今は捕って食べるというそういう時代ではないですので、そういうこともできるのではないかということです。

実は鴨を捕ったり、それから寄ってきた魚を捕ってそれを育てたり、そして先程挙げたような豆を畦に作ったり、冬になると麦を作ったりと、実は日本食の基本的な素材というのはほとんど水田から手に入るんですね。海の魚は手に入りませんけど、淡水魚、そして豆、これは醤油や味噌の原料になります。それからお米はもちろん我々の主食になる訳ですし、冬のタンパク源として水鳥、鴨や雁というのはいまだに非常においしい鳥として言われてますし、日本食の原型がこの田んぼから捕れる。

田んぼの中でも棚田から平野にかけてのそういったところに行く。だからこそ動植物も豊かである。そういうところが見て取れる、そこにプラス海が佐



渡にはある訳ですから、更に文化としての多様性というのは増してるのではないかという風に思います。

私はそれを勝手に水田文化と名付けています。日本は稲作文化の国。稲作民、稲作文化だと言いますけれど、私は違うと、水田文化の国だという風に考えておりまして、日本国中でこうしたことを探しております。佐渡はそういう意味ではトキをメルクマールにしながら、そういうことをGIAHSとして守って、それを生活文化として、そして今回は色んな鼓童の活動などもありますように、今度は精神文化の方にも芸能の方にも、実は影響してるんだということで、非常にポテンシャルの高い地域ではないかと思います。

ただ残念ながら記録が、特に民俗のこういう鴨猟の話だとか魚捕りの話は、実は佐渡ではあまりまだ記録されてないですね。記録しようと思えばお年寄り聞けばまだまだ出てくる話だと思いますし、一旦記録しておくことによってまたそれを復活させることも可能になりますので、まずはそういうことから始めることが必要なのかなっていうのは考えるところでございます。以上です。

【池田】 ありがとうございました。賢い利用というか、当たり前が当たり前になるのがGIAHSだという、色んな事例を挙げてお話をいただきました。ありがとうございます。

それでは、今、日本の現状や日本的な水田文化のお話をしていただきましたけれども。そういうことを踏まえて生業というものを、その地域の文化資源というかそういう捉え直すことはいかがなもんでしょうか。

そういう点について地域の力とでも言いましょうか、あるいは佐渡の力とでも言いましょうか、鼓童の菅野さんどうお考えでしょうか。

【菅野】 私も鼓童の活動を通して、世界40カ国ぐらい回らせていただいてるんですけれども、そういう中でやはり地域の文化の多様性という意味で、印象に残ってるのはイタリアだったりスペインだったりヨーロッパにおいては、非常に食が豊かですよね。そういうところというのは、やはり土地土地によってやっぱりすごくユニークな祭りが継承されているコミュニティがあって、日本もまだまだそういう形の地域の特色があるコミュニティっていうのは、維持されていると思います。

その中で今日の課題になっていますけれども、農業に従事する方々の高齢化だったり人口減少っていうものは、非常に大きな日本全国の課題になっていると思います。

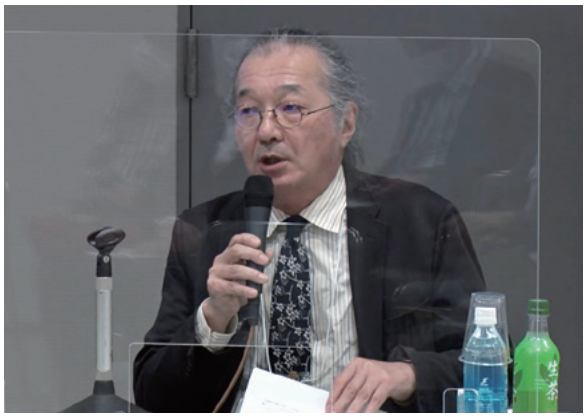
アジアを歩く中で、例えば中国だったり、韓国ってのも非常に長い歴史があるんですけれども、そういうところの地域でも、必ずしも日本にあるような、集落単位で一次産業の儀礼に付随した形で芸能が営まれてるというのは、意外と少ないんですよね。中国の場合は、やはり漢民俗とモンゴルの民俗が行き交う中で、一旦その伝統が途絶えてしまうっていうこともあったりしますし、そういう意味でいくと、東アジアの中でも非常に日本は、豊かな農業に根差す文化というものをまだまだ持っていて、日本各地にある郷土料理の多様さにも繋がっていると思います。

その中で、日本は経済的には先進国の仲間入りをしたと言われていて、その日本のあとを追うように、東南アジアの国々も経済発展をしてきていますけれども、そういう地域も回ると、やはりどんどん近代化で、今まで農業で生活していた方が会社勤めをするようになると、お祭りの為に休みをとるって言うようなことがなかなか許されなかったりっていうことで、祭りの労働っていうものに対して、出られない代わりにお金で払うみたいなことというものも、インドネシアのバリ島、祭りの島って言われるような島でもすごく起こっています。

そういう姿を見ると、日本は先ほど鬼太鼓座が始まったのは1955年のきっかけだって言われてますけど、もうそこから今66年ぐらい経っているわけですよね。そこの中でも佐渡と言う島は、まだまだ地域の中で芸能を維持してきている。そして日本全国でもこうやって経済的に近代化しているんだけれども、地域地域の芸能があるって言う事例は、やっぱり科学技術を伝えるっていうことだけではなくて、これからますます日本から、発展途上国と言うかそういう国々に伝える知恵としては、生活形態とか近代化っていうものが進んでいくんだけれども、自分たちが持っている文化とか芸能とか食文化っていうものが多様にあることが、その地域の豊かさに今後なっていくっていう事例を、日本という国もどういう形で伝えていけるのかっていうものも、これからだんだん非常に大事になってくるのかなと思っています。

今日は午前中の武内さんの基調講演であったり、そのあとのパネルディスカッションを聞かせていただくと、日本という国も近代化とか、産業の効率化を進めてきているところから、もう一回脱炭素の社会に向かっていく時に、やはり農業を営んできた生活を、育んできた地域のコミュニティーであったり、そういうところに人が定着して、昔の祖先の方々から受け継がれてきた知恵であったりとか、地域を維持していく為の団結力と言うかコミュニケーションのやり方であったりっていうものがますます重要になってくる局面に、これからなってくるのかなという風に感じましたし、日本がそういう経験を、海外の方にお伝えするっていうこともできたらと思っています。

１つ取り組んだ事例としては、ベトナムは、フランスの植民地の時代があって、その後北と南に分かれてしまって、今では社会主義の国になっています。国としては非常に豊かな穀倉地帯を持っているところで、多様な芸能があったところなんですけれども、植民地の時代、それから今社会主義の時代ですから、あまりそういう伝統的な芸能に対して国の理解は、なかったんですけれども、ベトナムもドイモイと言う資本主義を取り入れた社会主義という形になってきた時に、やっぱり金持ちになる人がいる訳ですよね。そうなってくるとその方が伝統的には農関係に催し物を開いて、芸能を呼んで、そこに農家の方々が見に来れてって言う芸能を主催して、そこでお金をいっぱい使って、皆さんの為にお経を提供しますということがあることで、世の中のバランスって取れるというか、昔の中世だと有徳人という、お金の持ってる人が社会の為に色んな形でお金を貢献していくという、そういうことで地域の方からも尊敬を



得ていくという、文化があったと聞いておりますが、やっぱり文化っていうのはそういう風に非常に大事なものになってくるっていうのは感じました。

その中でベトナムの方々が、どうやって自分達の芸能復興できるかといった時に、佐渡まで来ていただいて、佐渡のお祭りの稽古でどういう形で地域のお年寄りが若い人達、子ども達に芸能を伝えているのかとかいうことも見ていただいて、そういう中から地元に帰って、また昔のお年寄りから話を聞いて、芸能を復活するお手伝いをさせていただいたりもしております。そういう意味での日本からの貢献というのは、これからますます大事になってくるのかなと思いますし、佐渡からの貢献はもちろんできると思っています。

【池田】 ありがとうございました。

地域の力というのは佐渡の力として、鼓童さんは全国に、あるいは世界に発信してるというようなお話だったと思います。

それでは続きまして、藪田さん、集落にお世話になっていてどうお考え、あるいはどういう風にご覧になってますでしょうか。

【藪田】 やはり人口が少なくなっているという状況がありますし、先ほどもお話ししたように子ども達の数も少なくなっている中で、伝統文化、特に芸能の部分でお話しておりますけれども、伝承者がいるうちにその姿を皆さんに見せるという活動を継続していただくということと、子ども達にしっかりそれを教えるということ、若い世代に教えるということが大事かと思うんですが、人間が少なくなってきて、祭りなどもなかなか行えない難しい状況になってきておりますので、伝承者の方がおられるうちに、なんとかそれを支援する形を取っていけたらという風に思っております。

【池田】 ありがとうございます。

活動する姿を見せることも大事、それから伝承者のお元気なうちに、それをどう守り伝えるか考えなきゃいけないというようなご指摘だったと思います。

安室先生突然ですが、そういう佐渡に対する今のお話を伺って、何かコメントをいただければと思います。

【安室】 はい、農村歌舞伎の伝承をこれをどうしていくか、まだ伝承できる間にして、また昔の伝承を持っている人に様子を次の世代に見せていく、そういう危機感というのはまさに私もありました。

私の場合には特に民俗伝承、先ほど言いました鴨を捕ったりトキを捕った話も、もうそろそろ聞けなくなってくる話になります。何でトキを捕る話を聞かなきゃいけないかって、やっぱりそれは歴史として文化として残す必要がある。そしてそれが当たり前として行われた時代があったわけで、私は民俗のもの、民俗の伝承っていうのは、芸能だとかそういう信仰だとかを代々伝承者が伝承していくということと共に、むしろこう当たり前だったこと、昔だったらみんなが見ていたことが伝承されずに消えていってしまう。そういう危機感を持っています。田んぼでの魚捕りもトキを捕った時の話も鴨猟の話も、実はもう話せる人がほとんどいなくなってきてるのが現状で、やはり是非これを伝承として記録しておく必要があるだろうと。

もう一回やって、せっかく増えてきたトキを捕れという意味ではなくて、そういった歴史があったことを記録し、またそういうやり方を１つの我々の技術・生活の文化として、民俗の知恵として、それを記録しておくことは、私はトータルに文化というものを、この佐渡にGIAHSの精神に則って伝承していく、基礎になるんではないかという風に思っております。今お二人の先生方の話を聞いて考えたのはそういう伝承についてです。

【池田】 歴史で捉え直すことが大事だというご意見だと思います。

民俗も記録として残していくこともですね、GIAHSの精神として大事ではないかというようなお話だったと思います。

そろそろ時間が迫ってまいりますので、これからまとめを兼ねて皆さんのご意見を伺っていきたいと思います。

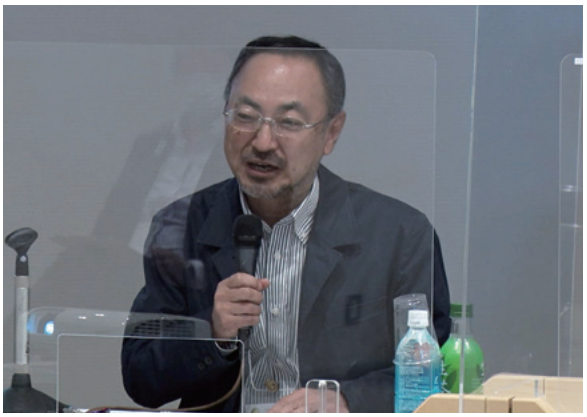
佐渡において、農業により育まれた色んな生き方、あるいは文化・歴史がありますが、こういうものを継承していくための施策方法としてご意見がござい

ましたら安室先生からお願いしたいと思います。

【安室】 私は民俗学という学問をやっていると冒頭申し上げましたけれども、特に人と自然との関係、これを水田という舞台でずっと見てきたわけですけども、同じような分野で環境史という見方があるんですね。人が自然をどう利用したか、自然が人にどう作用したか、例えば災害であるとかそれから利用した部分で言うと農業だとか漁業なんていうのは人間が自然を利用する。こういう見方っていうのは人間対自然というのを一対一の関係で見る見方なんですね。こうした見方ではなく、私は佐渡であれば生態史という生態の歴史という見方をすべきであろうと思っております。

この生態史って見方はどういうことかと言うと、人は自然の中の一部に過ぎないし、当然トキもそうですし、土壌もそうです。稲もそうです。その一部として見る。実際には人間の力はあまりにも強くなり過ぎ、大きくなり過ぎ、自然に与える影響は甚大なものがあるわけですけども、いったん生態史という見方で自分達がその自然の中の一部であるという、いわゆる謙虚な気持ちですよね。自然の構造物の一つであるという謙虚な気持ちを持つということが、やはり非常に重要なのかな。

今後GIAHSとして継承していく上で重要なのかなという気はいたします。どこかで人間が自然を利用するような感覚を持つのではなく、自然の中の一部だという考えを持つことで、おそらくこのGIAHSの中で佐渡モデルのようなものが、作り上げられるのではないかという風に考えておりまして、私に具体的なアイデアがあるわけではないですけれども、今申し上げたような生態系の視点、生態史という視点を持って、佐渡のGIAHSを考える。そして佐渡モデルというものを考える時に１つ今まで自分が話をしてきた中で言いますとやはり遊びっていいますかね、楽しみというかそれをやはり起爆剤にできないかと。



先程鴨猟の話をしましたけど、鴨猟は三角形の網でどれだけ捕れるか。捕れる人は捕るんです、結構。それで捕れない人は年間一羽も捕れないですね。猟友会にお金を払い、狩猟免許を取り、年間８万円ぐらいお金が掛かるんですね、やろうと思えば。猟銃を持ってやるよりははるかに安いですけど、８万円払っているのに一羽も捕れないで過ごす人もいる。でも捕れない人がいて捕れる人がいる。また捕れない年があって捕れる年があるっていうのは、これはギャンブルじゃないですけど面白いですね。鴨猟をやってる人達全てと言っていいと思います。今まだやってる人は面白いからやっているんです。お金の為だとか売る為ではないですね。こういう面白を評価する何かが佐渡モデルの１つになってくるのではないかと。

あぜ豆がなぜなくなって、今少しだけでやってるのは、あぜ豆が昔の味が忘れられない、美味しかったとおじいちゃんが作っているという、たった１枚２枚の田んぼに作っているというような状況は、おいしかった思い出っていうのも、やはりこれも他の遊びといいますか、楽しみに繋がってくるんじゃないか。私は遊び仕事とよく言うんですけども、遊び仕事というと現代社会ではどちらかというといい加減な仕事ぶり、遊び半分でやっている仕事ぶりを、マイナス評価で遊び仕事って言われてしまうんですね。でも私は田んぼでの鴨猟や田んぼでの魚捕りのような遊び仕事があったからこそ、稲作という非常に緻密な稲作を日本はやってきたと。しつけという呼び方がまさにそうなんですけども、非常にきちんとした稲作をやってきた。これは結構辛いことなんですね。その辛いことの中にこういう遊び仕事がぽつんぽつんと入ってくるというのは、結果として日本人が稲作というものを非常に重要視してやってきた、そういう一服の清涼剤としてこうした鴨猟、トキも捕ったこともそういうところにはあったかもしれないなという風に思ってるんですけど、そういうものを生かす遊びの精神と言いますか、遊び仕事っていうものを佐渡モデルの中に入れられれば、独自性のあるGIAHSの佐渡におけるあり方として言えるのではないかな、と思っております。以上です。

【池田】 ありがとうございました。

緻密な稲作の中にも遊びの精神を入れることによって、そういうものを加味しながら生態史という中での人間、そして人は自然の一部として見る心構えが大事だと言うことで、そういうことを組み合わせることで佐渡モデルというのができるのではないかというご提言を交えてのお話だったと思います。

続きまして菅野さんいかがでしょうか。

【菅野】 今回は佐渡のGIAHS認定10周年という機会ですので、佐渡のことについてお話しさせていただくと、先程冒頭に私達のグループが始まったきっかけというのは、佐渡で芸能を継承していく人達が、このままだといなくなってしまうっていう危機感の中から始まったということでございます。自分達はその中から生まれたんですけれども、自分達は佐渡の芸能を中心に学んでるわけではなくて、佐渡で育ませていただいて社会で演奏活動しております。そういう中で本当に佐渡の中で、これから芸能が継承されている形っていうものを、どういう風に作っていくかっていうところっていうのが、これからの10年で非常に大事になってきてるところなのかなと思います。そういった時に、藪田さんからのお話もありましたけれども、集落の単位でやってるのでは子どもの数が少ないからそれを広げてみたりとか、今までであれば祭りに関わる人が集落の方、それも男性、長男しかできないっていう時代から、もう少し広がってきたり、集落によっては外から来る方もウェルカムだよ、というような形でやってきてるっていう。

今日の武内さんのお話もありましたけれども、これからの地域の文化とかGIAHS的な環境っていうものを維持していく為には、都市だったりとか企業だったり市民だったりという人たちが連携する、新しいコモンズっていうものが必要になってくるっていうお話があったかと思います。そういう意味でやはり関係人口と言う言葉があるかと思いますけれども、佐渡の魅力を感じて佐渡に来てもらう、色んな形で通っていただく。その為には私達も夏にアースセレブレーションというフェスティバルもやっておりますけれども、そういうイベントを通じて佐渡に来ていただいて、そこから佐渡の魅力を感じていただいて、そこから佐渡のファンになっていただいてリピーターに繋がって、場合によっては定住する方であったりとか、二地域居住みたいな形で通ってくる方っていうものが増えていくような仕組み作りっていうものを民間だけではなくて、もちろん行政と民間、幅広い人達が関わって、先程佐渡モデルというお話がありましたけれども、佐渡モデルを生み出していくっていうのが非常に大事だと思います。

また、最初に菅笠のお話がありましたけれども、祭りって言うのは演じる芸能だけではなくて、その衣装の道具立てなどものも全部元々は地域の方々が用意している。地域の農業で生み出される藁を使ってわらじを使ってそれが祭り道具になっていたり、色んな佐渡の中の宮大工さんが、鬼太鼓の面を彫ってたりとかっていう形で、本当に生業でものを作ってるものという、ものの担い手がいることで、やっぱり芸能事が無形な部分と有形の部分で受け継がれていくと思います。藪田さんが今されている佐渡文化財団等はその辺を是非担っていただきたいと思いますし、私共も一緒に知恵を出していきたいという風に思っております。

【池田】 ありがとうございました。

佐渡の魅力による交流の仕組み作りっていうのが、GIAHSを軸にして考えられるのでないか。佐渡モデル的なものを考えられるのではないかというご提言であったかと思います。

それでは実際に地域で芸能を上演していただいている藪田さん、ご意見等をいただければと思います。

【藪田】 そうですね、やはり人口が少ないっていうことになると、色んなことが取り組めなくなっている問題があるんです。例えば祭りが上演できない状況もあります。芸能とか文化が、発表する、皆さんに見ていただくということが根源にあって、それが喜び、楽しみ、生きがいに繋がっているところであるんです。その機会が最近少なくなっているという風に今感じておりますし、先程菅野さんも言われましたように、行政と民間そして私達文化財団が連携して、その機会の創出をしていかなければならないのかなと感じております。

文化財団では、この夏に人形芝居を各座集めまして、発表会の機会を作っておりますし、この後来年２月には、民謡関係の発表する場を作りたいと今準備をしているところですけれども、そのようなことを地道に繋げながら、そういう機会を与えながら、起爆剤を作って、文化芸能活動がこの後も継続されるような動きに繋げていけたらなと感じておりますので、官民一体になって協力していきたいなと感じております。

【池田】 ありがとうございました。

とにかく発表する場、機会がないということもこれから官民で考えなければいけないというご提言だったかと思います。時間が来ました。

進行が不手際で申し訳ありませんでしたが、総括としてGIAHSの中での佐渡の暮らしや文化のあり方について、１つ佐渡モデル的なものを作ってみたらどうかと言うご提言。

それを生かして、そうしたものをどのように守り伝え生かしていくか、その辺りが、これからのGIAHSに期待されるところかなというお話だったと思います。

テーマ

農村の未来の可能性を次世代と共に考え、切り拓いていくために

若者が住み続けたいと思う農村の未来のために、学生が考えたアイディアを発表します。

座長
新潟大学 准教授
豊田　光世 氏

アイディア発表者
佐渡市内高校生、新潟県内大学生

プレゼン発表者
GIAHS認定地の学生

●あいぽーと佐渡で実施し、フォーラム本会場（アミューズメント佐渡）ではその様子を中継しました。

2021年8月、「ずっと暮らし続けたいと思う農村の未来」をテーマに、佐渡市内の高校生や、新潟県内の大学生がアイデアを練り上げるワークショップを行いました。里山ユースサミットでは、そのアイデアの発表会や、他のGIAHS認定地からのプレゼンテーションを行いました。

スケジュール

2021.8.16　フィールド調査
佐渡市内で農業や地域ビジネスに挑戦している方々15名をゲストに迎え、オンラインでインタビューを実施しました。印象に残ったことを整理し、どんな課題解決に取り組んでみたいかを考えました。

2021.8.17　アイデアのインスピレーションを探る
「もう暮らしたくないと思う農村とは？」ワースト・ケース・シナリオのアイスブレイクから始め、「ずっと暮らし続けたいと思う農村の未来」についてキーワードを出し合い、イメージを膨らませました。他の参加者との意見交換を通して、自分の関心を掘り下げ、企画書の骨組みを描きました。

2021.8.18　事例調査と提案のブラッシュアップ
アイデアの構想を深めていくために、佐渡市内や他地域の事例を調べて参考情報を収集するとともに、3～4人のグループでお互いの提案を吟味しながら、各提案の特徴やウリを改めて考えていきました。

2021.8.19　地域関係者へのプレゼンテーション
プレゼンテーションをブラッシュアップし、地域の方々を招いてオンライン発表会を行いました。3日間という短い期間でかつ全てオンラインでの実施という限られた経験の中で、それぞれの参加者が感性を生かした提案をまとめてくれました。

2021.10.30　里山未来ユースサミット
GIAHS認定10周年記念フォーラム in 佐渡の分科会のひとつとして、あいぽーと佐渡を会場にオンラインとのハイブリッドで実施しました。いままでのワークショップを踏まえて7つの提案が発表され、審査員として参加した市内外の企業の方々から、若者のアイデアを社会実装につなげる提案を考えていただきました。

ユースサミットプログラム

第1部　未来をひらくアイデアを探求する

ワークショップ参加者による「ずっと暮らし続けたいと思う農村の未来」を作るためのアイデア発表会

佐渡市内の高校生、新潟県内の大学生から、7つの提案が発表されました。

第2部　未来を創造するアクション

GIAHS認定地で展開する若者のアクション（プレゼンテーション）

国内の世界農業遺産認定地のユースと、佐渡で農業に取り組んでいるユースが参加し、各地域での取組をプレゼンテーションしました。

オープンダイアローグ
共に考えよう、里山の未来！

GIAHS ユースサミットシリーズ「佐渡と能登からつながろう」

里山未来ユースサミットは、佐渡と同じく世界農業遺産10周年を迎える石川県能登地域と連携し、リレー企画として実施しました。国連大学いしかわかなざわオペレーティング・ユニットをはじめ、関係いただいた皆様に感謝申し上げます。

2021.10.16　第１弾　「実はよく知らない世界農業遺産」（オンライン交流）
「世界農業遺産の価値って何だろう？」「世界遺産を知ろう！」という切り口で、日本各地のユースが集まり、発表やグループワーク（交流）を行いました。

2021.10.30　第２弾　里山未来ユースサミット（佐渡地域）

2021.11.26　第３弾　GIAHSユースサミット（能登地域）
石川県に能登や佐渡等の次世代のGIAHSを担う高校生・大学生が集まりました！グループに分かれて、農業の生物多様性と里山里海の環境保全や経済活性化なと、様々なテーマでグループディスカッションを行い、GIAHSユース宣言を発表しました。

コーディネーターコメント

若者たちが考えたアイデアをどのように地域社会に生かしていくことができるか。アイデア実現に向けた可能性を一緒に考えていくことが、大切な大人の役割だと考えます。ワークショップで重視したことの一つは「大人のインボルブメント」です。若者のアイデアをさまざまな立場の人がつながりあって実現に向けた筋道を考えていく「共創のコミュニティ」を形成することを目指しました。

一つの試みとして、企業や地域住民に審査員という形で参加してもらい、ただ評価するだけでなく、コラボレーションの可能性を検討してもらいました。その結果、里山未来ユースサミット終了後に、島内外の企業と高校生・大学生の共創の芽が生まれています。

ユースのアイデアから世代や地域の境界を超えたプロジェクトを展開することで、里山の課題を共に考えるコミュニティが広がり、未来の可能性が膨らんでいくと確信しています。

豊田光世・北愛子（新潟大学 佐渡自然共生科学センター コミュニティデザイン室）

佐渡の農と能

解説
NPO法人佐渡芸能伝承機構
松田　祐樹 氏

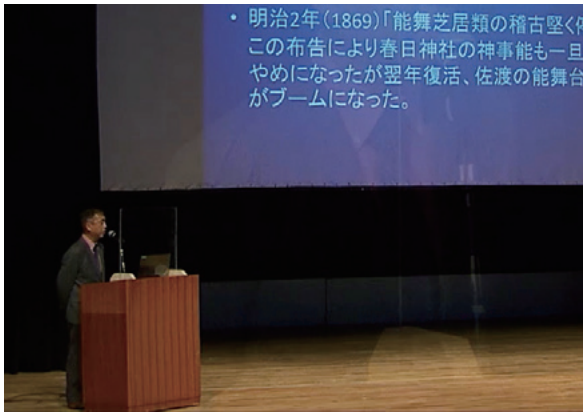
能・民謡　披露

【松田】　佐渡のGIAHS認定の一つの要素となった要因に佐渡の文化と芸能があるということで今日まず能、佐渡民謡、そして五つの型の鬼太鼓というものを披露させていただくんですが、その前に「佐渡の農と能」という演題で少々お時間をいただきたいと思います。

佐渡には現在35以上の能舞台がありますが、なぜ能の島になったのか、ということでちょっとお話をさせていただきたいと思います。

まず佐渡に能が広がるきっかけになったのが、世阿弥が室町時代に流されているんですが、世阿弥ではなくて江戸時代の金銀山の佐渡代官。よく「佐渡奉行」という方がいらっしゃいますが、正しくはこの頃は「佐渡代官」です。佐渡代官　大久保長安が実は、金春（こんぱる）流の能楽師の出なんですね。それで慶長８年。佐渡代官に選ばれるんですが、その翌年慶長９年1604年、佐渡に来た時に常太夫（つねだゆう）、杢太夫（もくだゆう）という二人の能楽師を連れてきたという記録が残っております。この大久保長安がまず佐渡に能を広めたきっかけになったのではないかなという風に思っております。

佐渡の能の普及に最も大きな貢献をしてくれたのが、本間家。これは宝生（ほうしょう）流ですね。能には今現在プロとしての流派は５つあります。その中の宝生流という流派が佐渡では盛んです。初世秀信は元々全国を回って山形にいたんですが、奈良か興福寺かで能を見た時にえらい感銘して能楽師になったという風に言われております。これが佐渡の本間氏。能の本間氏の初世という風に言われております。彼は佐渡に帰ってきてそこから本間家の能が始まるんですが、十八世本間英孝（ふさたか）さんを最後に、今のところ家督を継ぐ者がまだ決まっていないようです。



本間家っていうのはどんな家柄だったかというと、1751年から1764年に書かれた「佐渡四民風俗」というのに、潟上村に宝生座由緒の者がいる。数代相次ぎ能楽師の真似ごとをして家業にし、農家ながらスキ・鍬も取らないで生活し、自然と隣村にも囃子方の者が多くあり畑や田の片手間に舞楽を楽しんでいるため、この辺の風俗になっているということが書かれてるんですね。ここでちょっとお分かりになるかと思うんですが本間家って何だったのかというと、お百姓さんだったんですね。

更にその能の村への広がりのきっかけになったのが「国仲の四所の御能場」とも言われるんですが、これが、村々、お百姓さんとかに広がるきっかけになったものです。現在も一番最初の若一王子（にゃくいちおうじ）以外３つが建っております。作られた時代はもちろん当時のものではないのですが、この３つが佐渡にあって使われております。なぜ農民達、お百姓さん達が能をやるようになったか。その理由の１つに農民達が裕福になっていったことが挙げられます。

なぜ裕福になっていったかっていうと享保３年、1718年ですね検見制から定免制という毎年夏に奉行諸関係の人が来て田んぼの石高を測って毎年毎年年貢を決めるのではなくて定免制っていうのは三年間据え置きなんですね、年貢が。そうすると稼げば稼ぐ分だけ要は収入があって豊かになっていくんですね。この定免制になったおかげで、お百姓さんたちが一生懸命頑張って裕福になっていった。裕福になったおかげである程度余裕ができて能などをやるようになってきたと考えられております。

さらにその農村に能が広がっていったのがよく分かるきっかけが農民のストライキ。安永9年1780年ですね。これが成功するんです。江戸時代、よく一揆に失敗したっていうのがあるんですが、このストライキが成功するんですね。

小百姓たちが新田畑の調査に反対。要は年貢が

上がるんですね、調査をされると。それを反対するんですね。自分の村でそんなことをすると俺達もう神事能は手伝わないぞと。要は村の能は手伝わないよって言って反対するんですね。重立（おもだち）衆、村の有力者達ですね。そうすると能をやるのも非常に楽しみにしたり非常に生きがいにしてたりしてたんですね。で、その人たちが奉行所にお願いしてちょっと何とか善処してもらえないだろうか、新田畑の調査を何とか止めてもらえないだろうかって奉行所に掛け合ったんですね。

当時その有力な重立衆などを使って佐渡を統治してたんです。やっぱり佐渡は広いんで奉行所はその重立衆を使って佐渡を統治してた。その為にやっぱり言うことを聞かざるを得なかったということで、農村の新田畑が中止になりました。検地が中止になりました。これは能を使って脅してるんですね。

能楽の危機が戦国時代、明治維新、太平洋戦争直後っていう３つがあります。

まあ戦国時代はさておいて、佐渡の大きな特色として明治維新っていうのがですね、江戸時代の猿楽。能のことを江戸時代は猿楽と言ってたんですが、どういうものだったかって言うと江戸時代は武士、士分で、給料は藩から貰っていた。どういう時にやってたかと、式楽。色んな儀式ですね。色んな儀式としてやってた。一方、佐渡では江戸時代、身分としてはお百姓さん・商人・農民が支えておりました。神事でやっておりました。この辺が全く違いまして、どういうことが起きるかっていうと、明治維新によって能楽師の経済と身分が崩壊。藩がなくなるんで武士達はお給料をもらうところがなくなります。明治２年、しかも能・芝居類の稽古を禁止っていうのがあったんですが、佐渡はこういう島なのであんまり影響がなかったという風に言われております。

この頃から実は明治維新から佐渡に空前の能舞台のブームが起きるんですね。明治維新によって能楽師の経済と身分が崩壊した。しかし佐渡では農や商の民間人が支え、住民みずからが演者となって伝承し地域の行事でもある神事能として誰でもふれることができた芸能だった。そのため維新の政変も関係が薄く能が盛んになったと。

この頃色んな方が佐渡へいらしてるんですね。太平洋戦争後の佐渡の能っていうのを見ると、都市ではね、皆さんご存知のように能楽堂が罹災し、面・装束を消失した家も多く食料難等に苦しんだ。この頃の21年。昭和21年戦後間もなく翌年ですね。ものすごい数、宗家とかね、偉い人たちがどんどん来てるんですね。ご覧の通りこれだけ来てるんですね。宝生流十八代宗家が佐渡に来た時っていうのは、街道を歩いていると畑を耕していた百姓がほっかむりを取って「太夫、昨日はどうも」と挨拶するんです。見ると昨日舞台で太鼓を打っていた人だったりして。これだけやっぱり佐渡の農民達が能に親しんでいたということが分かります。東京は大変な食料難だったが穀倉地帯である国中平野を備える佐渡は食料はとても豊富だったという。

農村が佐渡の能を支えてたというようなことを、ちょっと短い時間でしたが説明させていただきました。どうもありがとうございました。

鬼太鼓等地元芸能プログラム　能・民謡

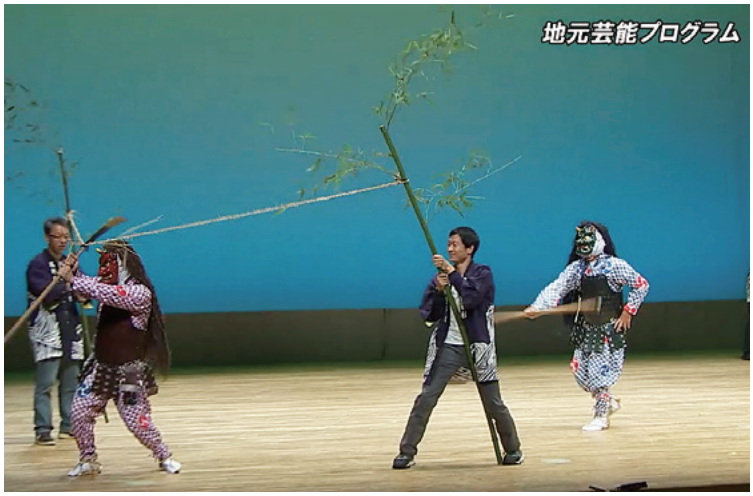
袴能　「猩々」（しょうじょう）　　樂謠游舞の会

民謡「佐渡おけさ」「山田はんや」「そーめんさん」「やっとこせ」　山田やまびこ会

鬼太鼓等地元芸能プログラム　鬼太鼓

御太鼓（おんたいこ）（一足型鬼太鼓）　南片辺青年部

豆まき（豆まき型鬼太鼓）　西野豆まき保存会



鬼太鼓等地元芸能プログラム　鬼太鼓

鬼太鼓（前浜型鬼太鼓）　岩首余興部

鬼舞（花笠型鬼太鼓）・小鹿舞（こじしまい）　赤玉文化財保存会

鬼太鼓等地元芸能プログラム　鬼太鼓

鬼太鼓（潟上型鬼太鼓）　潟上誠心会

30日

佐渡GIAHS認定10周年記念フォーラム　エクスカーション

早朝トキモニターツアー

31日

佐渡GIAHS認定10周年記念フォーラム　エクスカーション

佐渡GIAHSを形成したジオパークと佐渡金銀山そして農村の営み

概要

佐渡ファンへ贈る学芸員解説付きのスペシャルツアー。

午前中は世界文化遺産国内推薦間近の佐渡金銀山を主軸とした文化や歴史、ジオパークの観点からみた鉱山の成り立ちや鉱石と人々のかかわりをご説明しました。

午後からはコースを二つに分け、それぞれのテーマに沿って進みました。

Ａコースでは、「トキのテラス」にて、トキが生息する佐渡の自然豊かな里地里山を展望しながら、地域の担い手農家による生物多様性の取組の説明を受けた後、会場を移し、佐渡の地域の祭りで五穀豊穣や家内安全などの願いを込めて演じられ継承されてきた伝統芸能「鬼太鼓」を参加者自らが体験しました。

Ｂコースでは、佐渡最古の砂金山で平成23年に重要文化的景観に選定された西三川地区の旧西三川小学校笹川分校にて、小さな島に様々な鉱山がある佐渡の特異性・独自性について追及しました。集落散策では、集落の方の話を聞きながら、笹川集落の人々が大切に守っているモノは何かという点に注目し、農村環境維持の重要な役割を考えました。

両コースともに、GIAHS認定10周年を迎えた佐渡の、地域資源を活用し未来へ繋ぐ力強さを感じていただく内容になっています。

Ａコース　～テーマ：生物多様性と農文化～

Ｂコース　～テーマ：金銀山の昔と今～

GIAHS認定10周年記念フォーラム in 佐渡
記録集

発　行　佐渡GIAHS認定10周年記念フォーラム実行委員会
発行日　令和４(2022)年3月
住　所　新潟県佐渡市千種232番地
印　刷　島津印刷株式会社

GIAHS認定10周年
記念フォーラム in佐渡
記録集

会 期
2021年10月29日（金）▶31日（日）
会 場
アミューズメント佐渡